

和田遺跡

—秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2015年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

和田遺跡

—秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2015年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山市和田所在の和田遺跡は、和歌山県北部を西流する和田川の流れによって形成された低湿な沖積氾濫原に位置しています。

和田遺跡の北側には、神前遺跡や井辺遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が展開しています。遺跡の北東に位置する福飯ヶ峯の山塊には井辺八幡山古墳を含む井辺前山古墳群が所在しており、集落と墓域の解明が期待されているところです。また、和田遺跡の立地する和田川周辺には、県内でも著名な河南条里が広がり、古代から中世にかけての開発史の中でも注目される地域の一つに挙げられます。

公益財団法人和歌山県文化財センターでは、秋月海南線道路改良工事に伴い平成 24 年度と 25 年度に発掘調査を実施しました。ここでは、弥生時代から奈良時代に断続的に続く生活遺構や自然流路を発見し、往時の一景観を明らかにすることができました。

平成 26 年度に整理作業を行い、このたびその成果をまとめることができましたので、発掘調査報告書として刊行する次第です。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申しあげます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 工 樂 善 通

例 言

- 1 本書は、和歌山県和歌山市和田に所在する和田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、秋月海南線道路改良工事に先立つもので、平成24・25年度に発掘調査業務を行い、同26年度に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受けた公益財団法人和歌山県文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、和歌山県（海草振興局）が負担した。
- 5 現地調査に際し、海草振興局をはじめ、和歌山市教育委員会・関係機関および隣接する地元の方々から多大なご協力を得た。
- 6 本書は、発掘調査業務担当者と協議のうえ、土井が執筆・編集した。
- 7 図版に使用した遺構写真は、調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。
- 8 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査及び出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調査組織

事務局	平成24年度	平成25年度	平成26年度
事務局長	渋谷 高秀	勝浦 久和	嶋田 文紀
管理課長	渋谷 高秀	勝浦 久和	嶋田 文紀
埋蔵文化財課長	村田 弘	井石 好裕	井石 好裕
発掘調査業務担当			出土遺物等整理業務担当
埋蔵文化財課	(技師) 津村かおり	(主任) 佐伯 和也 (技師) 山本 光俊	(課長補佐) 土井 孝之

凡 例

- 1 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系(世界測地系)に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
 - 2 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位(T.P.+)表示である。
 - 3 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、以下のとおりである。

12-01・301	(2012年度-和歌山市・和田遺跡)第1次調査
12-01・301-2	(2012・2013年度-和歌山市・和田遺跡-第2次調査)

出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。
 - 4 遺構番号は、第1次調査の第1遺構面遺構は001番から、第2遺構面遺構は201番からの通し番号である。第2次調査では、遺構番号の前に各地区の地区名を冠し、1区を1001番から、2区を2001番から、3区を3001番から、4区を4001番からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類(性格)を付した。但し、遺構が2地区に跨る場合は、先行して調査を行った地区の遺構番号を付して使用している。なお、本書における遺構番号は、全て調査時のものをそのまま使用した。
 - 5 本書の遺構・断面土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。
 - 6 遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。
 - 7 遺物実測図の縮尺は、土器類は原則として1/4で、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
 - 8 調査時の土層の色調・土壤の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(2010年版)を使用した。
- 土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本文目次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 位置と環境	3
第1節 位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 既往の調査と文献史料	7
第Ⅲ章 発掘調査の方法と資料整理	8
第1節 調査現場の記録作業	8
1 写真撮影作業	8
3 航空写真撮影・基準点測量	8
第2節 出土遺物等資料の整理	9
1 出土遺物応急整理	9
2 実測図作成作業	8
3 出土遺物等整理業務	9
第3節 調査区の設定	11
第Ⅳ章 調査成果	14
第1節 第1次調査の成果	14
1 第1次調査の概要	14
3 各遺構の調査成果	15
(1) 第2遺構面の検出遺構	15
(2) 第1遺構面の検出遺構	20
4 小結	26
第2節 第2次調査の成果	32
1 1・2区	32
(1) 調査の概要	32
(2) 基本層序と遺構面	32
(3) 各遺構の調査成果	35
2 3区	47
(1) 調査の概要	47
(2) 基本層序と遺構面	47
(3) 各遺構の調査成果	48
3 4区	61
(1) 調査の概要	61
(2) 基本層序と遺構面	61
(3) 各遺構の調査成果	61
4 小結	65
第Ⅴ章 まとめ	69
出土遺物一覧	73
写真図版 検出遺構・出土遺物	

挿図目次

図 1 和田遺跡と周辺の地形分類図	3
図 2 和田遺跡と周辺の遺跡	4
図 3 区画割模式図(1 km 区画)	12
図 4 調査位置と区画割(100 m 区画)	12
図 5 調査範囲と地区割(4 m 区画)	13
図 6 第1次調査の基本層序 1	15
図 7 第1次調査の基本層序 2	15
図 8 第1次調査 第2遺構面 遺構全体平面図	16
図 9 第1次調査 018 井戸実測図	17
図 10 第1次調査 037 小穴実測図	17
図 11 第1次調査 209 土坑実測図	18
図 12 第1次調査 205 自然流路断面土層図	19
図 13 第1次調査 第1遺構面 遺構全体平面図	20
図 14 第1次調査 206 土坑実測図	21
図 15 第1次調査 012 土坑実測図	21
図 16 第1次調査 011 井戸実測図	22
図 17 第1次調査 005 井戸実測図	23
図 18 第1次調査 004 井戸実測図	23
図 19 第1次調査 032 落ち込み断面土層図	24
図 20 第1次調査 001 井戸実測図	25
図 21 第1次調査 出土遺物実測図 1	28
図 22 第1次調査 出土遺物実測図 2	29
図 23 第1次調査 出土遺物実測図 3	30
図 24 第1次調査 出土遺物実測図 4	31
図 25 第2次調査 2-1区の基本層序	32
図 26 第2次調査 1・2区第2遺構面、3区遺構全体平面図	33・34
図 27 第2次調査 1・2区 2010 自然流路Eトレンチ断面土層図	36
図 28 第2次調査 2-2区 2010 自然流路Fトレンチ断面土層図	36
図 29 第2次調査 1・2区 第1遺構面 遺構全体平面図	37
図 30 第2次調査 1区 2005 土坑実測図	38
図 31 第2次調査 2-1区 2003 土坑実測図	38
図 32 第2次調査 2-1区 2011 自然流路Gトレンチ断面土層図	40
図 33 第2次調査 1・2-2区 2021 溝状遺構・土坑列実測図	41
図 34 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 1	42
図 35 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 2	43
図 36 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 3	44
図 37 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 4	45
図 38 第2次調査 1・2区 出土遺物実測図 5	46
図 39 第2次調査 3区の基本層序	47
図 40 第2次調査 3区 3019 土坑実測図	48
図 41 第2次調査 3区 3032 井戸実測図	50
図 42 第2次調査 3区 3031 井戸実測図	50
図 43 第2次調査 3区 掘立柱建物 1 実測図	51
図 44 第2次調査 3区 掘立柱建物 2 実測図	52
図 45 第2次調査 3区 3027 土坑実測図	53
図 46 第2次調査 3区 3062 土坑実測図	53
図 47 第2次調査 3区 3039 土坑実測図	54
図 48 第2次調査 3区 3108 土坑実測図	54
図 49 第2次調査 3区 3115 井戸実測図	55
図 50 第2次調査 3区 出土遺物実測図 1	56
図 51 第2次調査 3区 出土遺物実測図 2	57
図 52 第2次調査 3区 出土遺物実測図 3	58
図 53 第2次調査 3区 出土遺物実測図 4	59
図 54 第2次調査 3区 出土遺物実測図 5	60
図 55 第2次調査 4区の基本層序	61
図 56 第2次調査 4区 遺構全体平面図	62
図 57 第2次調査 4区 4040 土坑実測図	63
図 58 第2次調査 4区 溝・溝状遺構断面土層図	64
図 59 第2次調査 4区 出土遺物実測図	66
図 60 各時代の遺構変遷図	71・72

表 目 次

表 1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程	2
表 2 和田遺跡と周辺の遺跡地名一覧	5
表 3 第1次調査 各層序別遺物数量	27
表 4 第2次調査 1・2-2区 土坑列一覧	46
表 5 第2次調査 3区 3019 土坑出土の弥生土器文様構成	49
表 6 第2次調査 4区 杭列(小穴)一覧	65
表 7 第2次調査 各層序別遺物数量	67・68

写 真 目 次

写真 1 第1次調査 第1遺構面 032 落ち込み 掘削状況(北東から)	1
写真 2 現地公開風景(第1次調査)	2
写真 3 現地公開風景(第2次調査)	2
写真 4 神前遺跡出土の弥生土器(5区 5040 自然 流路)	5
写真 5 井辺遺跡出土の弥生土器(市13次調査)	6
写真 6 井辺遺跡 2011-4区 4259 自然流路(北 北東から)	6
写真 7 坂田遺跡出土の琴柱型石製品	6
写真 8 神前遺跡(和歌山橋本線)2011-7・8区 (北東から)	7
写真 9 出土遺物(土器)への登録コード注記作業	9
写真 10 土器の接合作業	9
写真 11 遺物充填材による土器の補強作業	10
写真 12 遺物充填材による土器の復元作業	10
写真 13 出土遺物の実測図作成(土器)	10
写真 14 出土遺物の実測図作成(石器)	10
写真 15 遺物実測図のトレース作業	10
写真 16 遺物実測図トレース図のレイアウト作業	10
写真 17 遺構図面のトレース作業	10
写真 18 遺構図面トレース図のレイアウト作業	10
写真 19 各種データのPC入力	11
写真 20 遺構写真の整理	11
写真 21 第1次調査 調査区西壁断面土層(東から)	15
写真 22 第1次調査 調査区東壁断面土層(西から)	15
写真 23 第2次調査 2-1区 調査区西壁断面土層 (東から)	32
写真 24 第2次調査 3区 調査区東壁断面土層 (西から)	47
写真 25 第2次調査 4区 調査区東壁断面土層 (西から)	61

写真図版目次

写真図版1 第1次調査 第2遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(北東上空から)
- 2 調査地全景(真上上空から)
- 3 調査遺構全景(北北西から)

写真図版2 第1次調査 第2遺構面 調査遺構

- 1 018 井戸完掘状況・木杭検出状況(南東から)
- 2 018 井戸断面土層・遺物出土状況(南から)
- 3 018 井戸遺物出土状況(南西から)
- 4 018 井戸 木杭検出状況(東から)
- 5 037 小穴土器出土状況(南から)
- 6 037 小穴断面土層(北から)
- 7 209 土坑断面土層(南から)

写真図版3 第1次調査 第2遺構面 調査遺構

- 1 205 自然流路 遺物集中4出土状況(南から)
- 2 205 自然流路 遺物集中4出土状況(南から)
- 3 205 自然流路 遺物集中9出土状況(北から)
- 4 205 自然流路 遺物集中13出土状況(北西から)
- 5 205 自然流路 B-B断面土層(南東から)

写真図版4 第1次調査 第1遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(南南西上空から)
- 2 調査地全景(真上上空から)
- 3 調査遺構全景(南西から)

写真図版5 第1次調査 第1遺構面 調査遺構

- 1 206 土坑完掘状況(北東から)

2 206 土坑断面土層(北から)

- 3 012 土坑断面土層(北東から)
- 4 011 井戸完掘状況(南から)
- 5 011 井戸上層遺物出土状況(西から)
- 6 011 井戸断面土層(南東から)
- 7 005 井戸完掘状況(南から)
- 8 005 井戸下層遺物出土状況(南西から)

写真図版6 第1次調査 第1遺構面 調査遺構

- 1 032 落ち込み遺物出土状況(西から)
- 2 032 落ち込み礫出土状況(南西から)
- 3 004 井戸断面土層(北西から)
- 4 001 井戸木枠出土状況(北から)
- 5 001 井戸遺物出土状況(北から)
- 6 001 井戸板石出土状況(北から)
- 7 001 井戸断面土層(北から)

写真図版7 第2次調査1・2区 第2遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(東上空から)
- 2 調査地全景(北上空から)
- 3 調査遺構全景(北から)

写真図版8 第2次調査1・2区 第2遺構面

調査遺構

- 1 2010 自然流路 下層確認Eトレーンチ断面土層
(北東から)
- 2 2010 自然流路より下位層遺物出土状況
(北西から)

- 3 2010 自然流路 下層確認F トレンチ断面土層
(西から)

- 4 2010 自然流路上層 土器溜まり(南から)

写真図版9 第2次調査1・2区 第1遺構面

調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(真上上空から)

- 2 調査遺構全景(北から)

- 3 2011 自然流路 下層確認G トレンチ断面土層
(南東から)

写真図版10 第2次調査1・2区 第1遺構面

調査遺構

- 1 2005 土坑完掘状況(南から)

- 2 2005 土坑断面土層(南から)

- 3 2003 土坑完掘状況(南から)

- 4 2003 土坑断面土層(南から)

- 5 2021 溝状遺構・土坑列(東から)

- 6 2021 溝状遺構・土坑列断面土層(西南西から)

写真図版11 第2次調査3区 調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(西上空から)

- 2 調査地全景(南上空から)

- 3 調査遺構全景(南から)

写真図版12 第2次調査3区 調査遺構

- 1 3019・3099 土坑掘削状況(南東から)

- 2 3032 井戸掘削状況(南南東から)

- 3 3032 井戸上位層断面土層(東から)

- 4 3032 井戸下位層断面土層(東から)

- 5 3031 井戸断面土層(北から)

- 6 掘立柱建物1掘削状況(南東から)

写真図版13 第2次調査3区 調査遺構

- 1 掘立柱建物2完掘状況(南東から)

- 2 3027 土坑遺物出土状況(北北西から)

- 3 3027 土坑遺物出土状況(北東から)

- 4 3062 土坑遺物出土状況(南東から)

- 5 3062 土坑遺物出土状況(南から)

- 6 3039 土坑断面土層(北西から)

- 7 3108 土坑断面土層(南から)

写真図版14 第2次調査3区 調査遺構

- 1 3115 井戸とその周辺(南西から)

- 2 3115 井戸掘削状況(西から)

- 3 3115 井戸断面土層(西から)

写真図版15 第2次調査4区 調査地全景・調査遺構

- 1 調査地全景(南上空から)

- 2 調査地全景(真上上空から)

- 3 杖列・溝群(南東から)

写真図版16 第2次調査4区 調査遺構

- 1 4040 土坑遺物出土状況(南南西から)

- 2 4003 溝断面土層(南東から)

- 3 4004・4009 溝断面土層(南東から)

- 4 4007 溝断面土層(南から)

- 5 4012 溝断面土層(西から)

- 6 4017 溝断面土層(南東から)

- 7 4042 溝状遺構断面土層(南東から)

写真図版17 第1次調査第2遺構面 出土遺物

写真図版18 第1次調査第1遺構面 出土遺物1

写真図版19 第1次調査第1遺構面 出土遺物2

写真図版20 第2次調査1・2区 出土遺物1

写真図版21 第2次調査1・2区 出土遺物2

写真図版22 第2次調査1・2区 出土遺物3

写真図版23 第2次調査1・2区 出土遺物4

写真図版24 第2次調査3区 出土遺物1

写真図版25 第2次調査3区 出土遺物2

写真図版26 第2次調査3区 出土遺物3

写真図版27 第2次調査3区 出土遺物4

写真図版28 第2次調査3区 出土遺物5

写真図版29 第2次調査4区 出土遺物

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

今回の調査対象となる「秋月海南線」は、和歌山市の紀の川南岸を南北に縦断し、南側の海南市に連絡し、市街地へのアクセス道路としての役目を担っている。現状では、既設路線としての「県道秋月海南線」は2車線で歩道も不十分であるため交通混雑の悪化と安全性の低下が進み、主要幹線道路として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となる新設路線は、現道の交通問題に対処し、地域に活力とゆとりをもたらすために、4車線道路として整備することになっている。

このような役目を担って和歌山県により秋月海南線道路改良工事が計画されたが、その事業予定地の一部が埋蔵文化財包蔵地「和田遺跡」(図2の301)内に位置するため、平成22年11月4日付け海建工第92号で和歌山県知事により文化財保護法第94条の通知が提出された。これを受けて、平成22年11月26日付け文第57号の(45)で確認調査を必要とする旨の通知を和歌山県教育委員会が行った。

以上を受けて、平成24年2月15日付け海建工第95号で和歌山県知事より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成24年2月21日付け文第75号の(13)でこれを受諾し、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課(以下、県文化遺産課)で秋月海南線道路改良工事に伴う第1次試掘確認調査・工事立会調査が平成24年3月1日～3月27日に実施された。その後、平成24年6月19日付け海建工第30号で発掘調査の依頼があり、これに対し、平成24年6月21日付け文第123号の(5)でこれを受諾し、秋月海南線道路改良工事に伴う第2次試掘確認調査として平成24年6月29日に実施された。

次いで、平成24年10月時点で試掘調査が可能な範囲について、平成24年10月1日付け海建工第58号で和歌山県知事より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼が提出され、平成24年10月11日付け文第123号の(8)でこれを受諾し、県文化遺産課で秋月海南線道路改良工事に伴う第3次試掘確認調査として平成24年11月5日～12月3日に実施された。

その結果、一部について記録保存目的の本発掘調査が必要と判断された。そこで、県文化遺産課の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが「秋月海南線道路改良工事に伴う和田遺跡発掘調査業務」としてこれを受託し、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過(図4・5、表1)

第1次調査は、工事請負方式で実施し、発掘調査工事として有限会社芳野組に、基準点測量及び航空写真撮影・測量は株式会社ウエスコに再委託した。調査は平成24年11月27日より機械掘削を開始し、その後、道路計画用地の買収に伴い、調査面積を追加し平成24年12月5日付けで変更契約を行った。調査対象の遺



写真1 第1次調査 第1遺構面 032 落ち込み
掘削状況(北東から)

構面は2面で、第1遺構面の掘削(写真1)作業終了後、平成24年12月25日にラジコンヘリコプターを使用して航空写真測量を行った。調査記録作業を行った後、第2遺構面まで掘り下げ、調査を行い、平成25年2月7日に第2回目の航空写真測量を実施した。調査記録作業終了後に埋め戻しを行い、平成25年2月28日に現地での調査を終了した。本調査面積は、1,557m²である。

発掘調査と並行して応急整理作業(主に出土遺物洗浄作業)を行った。

第2次調査地は、中央を現有用水路の本線が南北方向に流れており、東西も本線から分岐する用水路が流れる。調査の便宜上、調査地が用水路によって分断されているため、調査区を1区～4区と呼称し調査を進めた。

第2次調査も工事請負方式で実施し、発掘調査工事として株式会社桂組に、基準点測量及び航空写真撮影・測量はワコウコンサルタント株式会社に再委託した。調査は、平成25年5月13日から機械掘削を開始し、平成25年9月5日に埋戻しを完了した。本調査面積は、4,548m²である。

1区・2区については、2面の遺構面の調査を行った。このため、航空写真測量はラジコンヘリコプターを使用し、平成25年7月8日に1区・2区の第1遺構面及び4区、平成25年8月22日に1区・2区の第2遺構面及び3区の2回行った。

第2次調査においても発掘調査と並行して応急整理作業(主に出土遺物洗浄作業・注記作業)を行った。

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程

この他、普及活動として、周辺住民の方を対象とした現地公開を第1次調査に伴い平成25年2月9日に実施し、約80名の参加者を得た(写真2)。また、第2次調査に伴い平成25年8月24日(土)に実施し、本遺跡の調査内容及び出土遺物の説明等を行った。当日は雨天にも関わらず40名の参加者を得た(写真3)。



写真2 現地公開風景（第1次調査）



写真3 現地公開風景（第2次調査）

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境（図1）

和田遺跡(図2の301)は、和歌山市和田に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は東西約300m、南北約500mに広がる。

和歌山市は、和歌山県の北西部に位置し、北は大阪府との府県境となる和泉山脈が東西に延びる。その麓には大台ヶ原を源流とする紀の川が西流し、和歌山市の西部で紀伊水道に注いでいる。紀の川北岸で中央構造線が東西に横断し、この断層によって北側の内帶と南側の外帶とに分けられる。内帶は、砂岩・泥岩の互層からなる和泉層群であり、当遺跡が位置している外帶は、結晶片岩を主体とする三波川変成帯で構成されている。

和田遺跡は、紀の川南岸の和歌山市南東部の和田盆地に位置し、和歌山市山東地区から西流する和田川により形成された低湿なラグーン性低地である。和田盆地はかつての構造運動によって生じた溺れ谷で、周囲の独立丘陵は、地盤の沈降が生じる以前の山頂部である。また、和田盆地は、縄文海進時に湾となっていたと推測され、紀の川本流の堆積作用は及ばず三角州下位面となり、長期間入江であったと推測される。

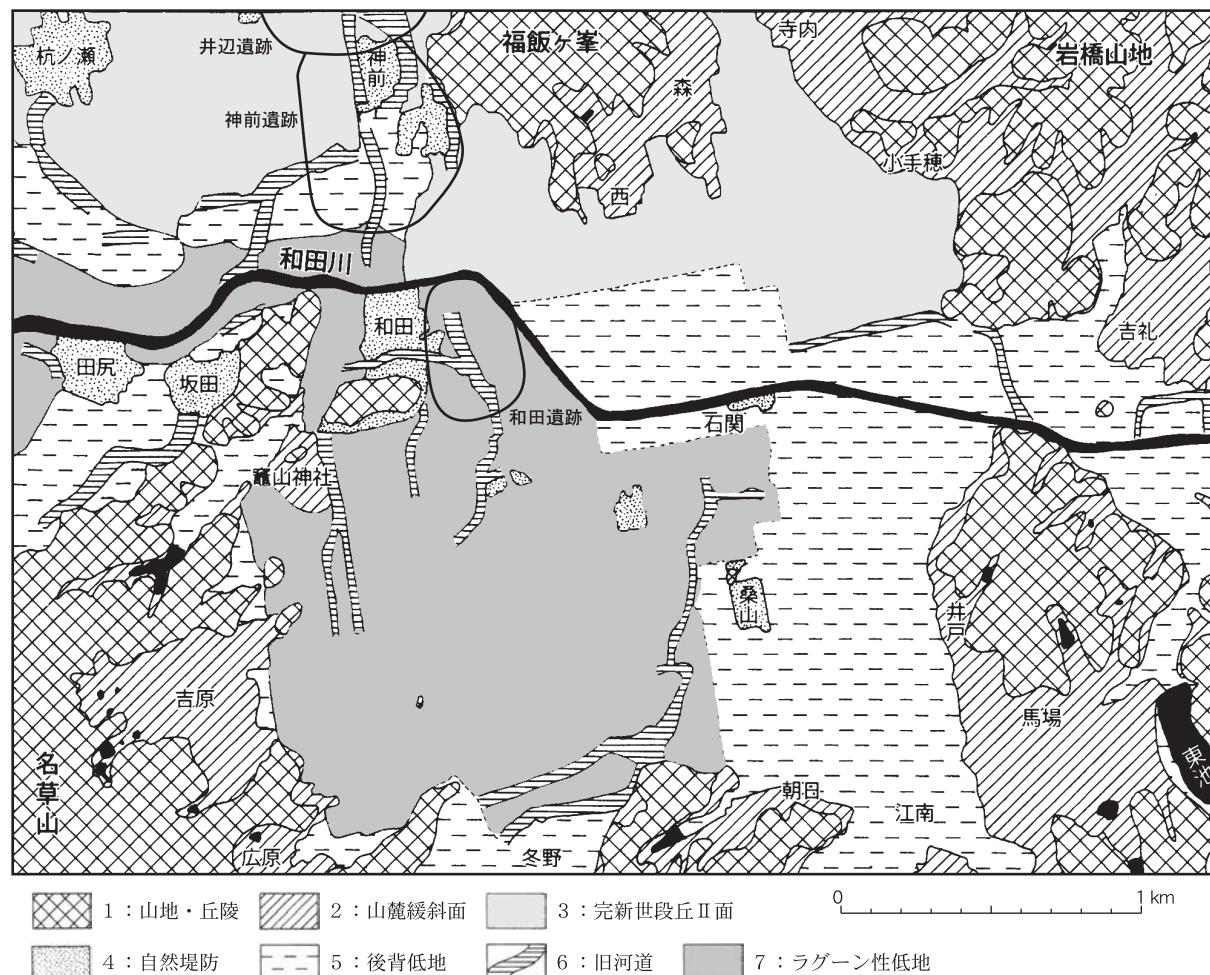


図1 和田遺跡と周辺の地形分類図(1:25,000)

(出典:2013 須田雅裕「和歌山平野南部の地形と土地開発」
『和歌山市立博物館 研究紀要28』和歌山市教育委員会を一部改変。)

今回の調査地は、遺跡範囲の中央北側に位置しており、調査地を南北に縦断する位置には、古墳時代に起源をもつ宮井用水が流れる。また、周辺一帯は河南条里(和田条里区)が良好に残り、小字名にも当時の地割名や坪名が残る。調査地周辺の現況は、水田が一面に広がっている。

第2節 歷史的環境 (図2、表2)

和田遺跡(301)が所在する紀の川南岸の和歌山平野には、国の特別史跡である岩橋千塚古墳群(185)をはじめ、周辺の丘陵に多くの古墳群が所在する。また、丘陵麓から平野部にかけても集落や古墳など多くの遺跡が展開している。以下、周辺の遺跡について概略を記述する。

縄文時代 縄文時代には、低丘陵の裾部に貝塚が形成される。主な遺跡としては、補宜貝塚、鳴神貝塚、吉礼貝塚、岡崎縄文遺跡(309)などが挙げられる。岡崎縄文遺跡では、縄文時代後期～晩期の土器や石鏃・石匙・磨製石器・石錘などが出土し、ハマグリを主とした貝層とその下に



図2 和田遺跡と周辺の遺跡（1:25,000）

カキのみの貝層が確認されている。また、鳴神貝塚は近畿地方で初めて確認された貝塚で、昭和6年に国の史跡に指定されており、縄文時代晩期の土坑墓からは抜歯された女性の伸展葬人骨が確認されている。

弥生時代 弥生時代には前期から中期にかけて紀の川南岸の平野部で多くの遺跡が展開する。主な遺跡は、JR 和歌山駅東側に所在する太田・黒田遺跡をはじめ、秋月遺跡、神前遺跡(307)などがある。太田・黒田遺跡では、弥生時代前



写真4 神前遺跡出土の弥生土器
(2010-5区5040自然流路)

表2 和田遺跡と周辺の遺跡地名一覧

埋蔵文化財包蔵地

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
185	岩橋千塚古墳群	岩橋・鳴神・井辺・寺内	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳13基、方墳4基、円墳455基からなる
186	井辺前山古墳群	井辺・岡崎・寺内・神前・西・森小手穂	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳15基、円墳60基からなる
187	寺内古墳群	寺内・森小手穂・吉礼	古墳群	古墳	山腹	円墳33基からなる
188	森小手穂遺跡	森小手穂	散布地	古墳～中世	丘陵	須恵器、土師器、瓦等
189	寺内ナイフ形石器出土地	寺内	出土地	旧石器	丘陵	横剥ナイフ形石器
254	菖蒲谷遺跡	井戸	散布地	弥生～古墳	丘陵	方形周溝墓、台状墓、土師器、須恵器
257～259	井戸古墳群	相坂	古墳群	古墳	丘陵	円墳3基
260	馬場古墳群	相坂	古墳群	古墳	丘陵	2基
261	馬場遺跡	相坂	散布地	弥生	丘陵斜面	弥生土器
287	松原I遺跡	松原	散布地	古墳？	丘陵端	土師器、須恵器
288	松原II遺跡	松原	散布地	古墳？	丘陵	土師器、須恵器
289	藪師谷遺跡	江南	散布地	縄文	丘陵	縄文土器、石鏃
291	曾垣田遺跡	江南	散布地	古墳	丘陵端	土師器(壺、甕、鉢)
292	曾垣田II遺跡	江南	散布地	古墳？	丘陵端	土師器
294	城の前II遺跡	朝日	散布地	古墳、中世？	丘陵端	須恵器、瓦器
295	城の前I遺跡	朝日	散布地	古墳？	丘陵端	土師器
296	大池遺跡	朝日	散布地	中世？	池畔	瓦器、土師器、擂鉢、大池の西～南沿岸
297	赤津古墳群	朝日	古墳群	古墳	丘陵	5基からなる
301	和田遺跡	和田	散布地	弥生～奈良	沖積地	掘立柱建物、井戸、土坑、土坑列、溝、弥生土器、土師器、須恵器、石器(石鏃、石庖丁)・石製品、木製品
302	和田岩坪遺跡	和田	散布地	弥生～古墳	沖積地	弥生土器、土錘、須恵器、土師器
303	和田古墳群	和田	古墳群	古墳	丘陵	4基
305	竈山神社古墳	和田	古墳	古墳	丘陵	円墳
306	坂田地藏山古墳	坂田	古墳	古墳	丘陵	円墳？、横穴式石室、直刀、須恵器
307	神前遺跡	神前	集落跡 用水路	弥生～江戸	沖積地	堅穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、石器(石鏃、石庖丁、石斧)、紡錘車
308	井辺遺跡	井辺・神前	集落跡 墳墓	弥生～古墳	沖積地	堅穴建物、土坑、土坑列、溝、前方後方方形周溝墓、方形周溝墓、自然流路、弥生土器、土師器、須恵器、各種木製品
309	岡崎縄文遺跡	井辺	散布地	縄文	丘陵端	縄文土器、石器多数
310	森小手穂埴輪窯跡	森小手穂	窯跡	古墳	山麓	埴輪(円筒、形象)
311	大日山I遺跡	井辺	集落跡	古墳～奈良	丘陵端	堅穴建物、掘立柱建物、土師器(壺、小型壺、甕、高坏、坏、甑)、須恵器(坏、高坏)、鳥形土器、滑石製勾玉、有孔円板
312	井辺I遺跡	井辺	散布地	弥生～古墳	平地	弥生土器、土師器
313	井辺II遺跡	井辺	散布地	弥生～古墳	平地	弥生土器、土師器、須恵器
332	津秦遺跡	津秦	散布地	弥生	沖積地	弥生土器、サヌカイト
338	アンドの鼻古墳	三葛	古墳	古墳	丘陵	組合式石棺、土師器(壺)
339～342	三田古墳群	三葛	古墳群	古墳	丘陵	4基
343	吉原古墳	吉原	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳？
361	冬野遺跡	冬野	散布地	中世	丘陵麓	土師器(坏、皿)、土師質土器(カマド、土釜)
367	井辺III遺跡	井辺	散布地	縄文	丘陵麓	縄文土器
370	朝日石槍出土地	朝日	出土地	弥生	平地	石槍
383	神前II遺跡	神前	散布地	古墳～室町	沖積地	土師器、須恵器、土錘、瓦器、陶磁器
407	津秦II遺跡	津秦	散布地	古墳～奈良	沖積地	土師器、須恵器
408	和田II遺跡	和田	集落跡？	弥生	丘陵	溝状構造、弥生土器
412	城ノ前I号墳	朝日	古墳	古墳	丘陵	円墳、周溝状遺構、横穴式石室、須恵器、土師器、黑色土器、土釜
422	朝日蔵骨器出土地	朝日	墳墓	奈良	山腹	須恵器壺(蔵骨器)、短頸壺(外容器)
435	坂田遺跡	坂田	集落跡	弥生～室町	沖積地	掘立柱建物、土坑、井戸、溝、弥生土器、須恵器、土師器、黑色土器、瓦器、陶磁器、琴柱形石製品、勾玉、有孔円板

遺跡内での調査履歴有り

和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地地名表』2007年3月
31日発行を一部改変・補筆

期から中期にかけて竪穴建物跡などが多数検出されている。また、2重の環濠を廻らす県内最大級の弥生時代の集落跡と考えられている。遺物は、多量の弥生土器と共にシカや高床建物を線刻した絵画土器、また、遺跡東側の河川改修工事に伴い外縁付紐式1式四区袈裟櫛文銅鐸も出土している。

神前遺跡(写真4)では、弥生時代前期から中期にかけての10条以上の平行する溝や土坑が検出されている。複数の平行する溝は、地形沿つて北側から南西方向に延び、水路の機能をもつものと考えられている。

一方、弥生時代中期後葉から後期前半にかけては、平野部での遺跡の展開が激減し、周辺部の丘陵部で滝ヶ峯遺跡や橘谷遺跡などの高地性集落が見られるようになる。弥生時代後期後半になると、再び平野部で集落が見られるようになり、太田・黒田遺跡と和田遺跡の間には、秋月遺跡、津秦遺跡(332)、神前遺跡、井辺遺跡(308)などが存在する。多くの遺跡では、弥生時代後期後半から終末期にかけて再び遺構・遺物が認められ、古墳時代前期に継続して集落が展開する。

井辺遺跡(写真5)では、遺跡範囲の北東側で弥生時代後期後半から古墳時代前期を主体とした竪穴建物・周溝墓が検出され、集落の間を縫うような位置で大量の土器・木器・木製品が埋没した自然流路が検出されている(写真6)。

古墳時代 古墳時代には、岩橋千塚古墳群を始め、各支群において多くの古墳群が築造される。また古墳時代の集落遺跡として音浦遺跡、鳴神Ⅱ遺跡、鳴神V遺跡、大日山I遺跡、秋月遺跡、神前遺跡、井辺遺跡があり、和田遺跡の西側には坂田遺跡(435)が展開する。

岩橋千塚古墳群は、岩橋山塊に築かれた古墳群で各支群を含めて総数は数百基に及ぶものとされている。古墳の築造は、4世紀後半から7世紀前半まで継続し、6世紀の主要な石室の構造は岩橋型石室とよばれる横穴式石室に石棚や石梁をもつものが見られる。鳴神V遺跡では、竪穴建物や掘立柱建物の他、大規模な溝が検出された。また、音浦遺跡においても大規模な溝が検出され、和歌山平野を灌漑する現在の宮井用水路に平行するように掘削されていることから宮井用水路の起源と考えられる。秋月遺跡では、遺跡の東半で居住域がみられ、西半で墓域が確認され、県内最古の前方後円墳が検出され



写真5 井辺遺跡出土の弥生土器(市13次調査)
(出典:2013『和歌山市内遺跡発掘調査概報 一平成23年度一』
和歌山市教育委員会)



写真6 井辺遺跡 2011-4区 4259 自然流路
(北北東から)



写真7 坂田遺跡出土の琴柱形石製品

ている。和田遺跡の西側には竈山神社が所在し、和歌山県唯一の陵墓とされる竈山神社古墳(305)が所在する。この竈山神社に隣接する北側に坂田遺跡が所在し、古墳の存在を示唆する琴柱形石製品(写真7)が出土している。

古代 古代の遺跡としては、鳴神V遺跡、太田・黒田遺跡、薬勝寺廃寺が見られ、日前宮・国懸宮、竈山神社が創建される。鳴神V遺跡では、奈良時代から平安時代の官衙の存在を窺わせる円面硯や初期貿易陶磁器、綠釉陶器などが出土している。また、太田・黒田遺跡では奈良時代の井戸が検出され和銅開珎42枚、万年通寶4枚が出土している。日前宮は紀伊国一宮として『延喜式神名帳』にその名が見られ、日前宮より南側一帯には、河南条里と呼ばれる条里型地割が良好に残り、地割方位はN-5°~6.5°-Wである。

中世 中世以降にも、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、鳴神V遺跡などで遺構や遺物が見られる。神前遺跡では、掘立柱建物が検出されている。また、幅7m以上の大溝が検出されており(写真8矢印)、現在の宮井用水路に重複するように掘削されていることから、宮井用水路が整備された当時のものと考えられる。秋月遺跡では、瓦積みの井戸が検出されている。太田・黒田遺跡の南側には、太田城の推定地があり、幅10m、深さ3mを測る16世紀の壕状の遺構が検出されている。また、天正13年(1585年)の羽柴秀吉による太田城の水攻め時の堤と考えられるものがわずかに残っている。岩橋に所在する岩橋高柳遺跡では、鎌倉時代の屋敷跡に伴う掘立柱建物2棟と井戸2基や室町時代の堀状遺構が検出されている。



写真8 神前遺跡(和歌山橋本線)2011-7・8区
(北東から)

近世 近世には、和田周辺は和田村と呼ばれるようになり、宮組に所属する。

神前遺跡では、屋敷地跡と考えられる区画溝や土坑・暗渠排水溝が検出されている。太田・黒田遺跡では、太田城の名残とされる石垣や、耕作地として利用されていたと考えられる鋤溝群が見られる。和田遺跡の西側には静火神社跡があり、初見は『延喜式神名帳』に見える。その後、文献史料に永仁年間に廃絶したとされているが、長享元年(1487年)に静火神社の名が見られる。また、『南紀徳川史』に静火社旧地とみえ、享保8年(1723年)までに廃絶したと推測される。

第3節 既往の調査と文献史料

和田遺跡では広範囲での発掘調査は行われておらず、平成9年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団により約25m²の小規模な調査が行われている。調査は遺跡範囲の東縁辺部で行われ、鎌倉時代の水田跡と推測される植物痕が確認された。弥生土器が出土しているものの、遺構は検出されていない。その他、文献史料では、林家所蔵の大治2年(1127年)「紀伊国在庁官人等解案」に日前宮領であった和田川の塩入常荒田を開拓するため、40町の堤防を築造した記録が見られる。鎌倉時代に大規模な整備が行われ、水田として利用されたと推測される。宮井用水路は長承元年(1132年)の文書『古名草堰』で「綾井」・「国衙堰」といわれ、初見は、鎌倉期の元享元年(1321年)の『歓喜寺文書』に見られる。

第III章 発掘調査の方法と資料整理

調査は、原則的に財団法人和歌山県文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006年4月)を基準として作業を進めた。発掘調査で使用した調査コードは、12-01・301(2012年度—和歌山市・和田遺跡)、12-01・301-2(2012・2013年度—和歌山市・和田遺跡—第2次調査)である。共に同一年度内で同一遺跡の調査が複数行われたことから、末尾に枝番号を用いてそれぞれの調査を区別している。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用い整理・管理している。

第1節 調査現場の記録作業

和田遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1 写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、大判カメラ(4×5判：白黒フィルム・カラー・ポジフィルム)・中判カメラ(6 7判：白黒フィルム・カラー・ポジフィルム)・小判カメラ(35mm判：白黒フィルム・カラー・ポジフィルム)・小型デジタル一眼レフカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、補助的に1420万画素相当の小型デジタル一眼レフカメラにより発掘調査の作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。撮影内容は、写真台帳に調査区・対象・方向・使用フィルムを登録しているほか、デジタル画像データにも内容をファイル名に記載して保存している。

2 実測図作成作業

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図(縮尺=1:100)、個別遺構の平面実測図(縮尺=1:20)・個別遺構や遺物の出土状況図(縮尺=1:10 or 1:5)・個別遺構の断面土層図(縮尺=1:20 or 1:10)を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図(縮尺=1:20)などを記録として作成した。

3 航空写真撮影・基準点測量

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げなどのため、国土座標第VI系(世界測地系)により既設の公共基準点を利用して3級基準点・補助点を設置し、各地区内に4級基準点を設置した。併せて、4級基準点にも水準測量を行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリコプターを使用した調査地全体の航空写真撮影及び航空写真測量による図化(縮尺=1:50・1:100)を行った。基準点の設置と撮影図化作業を併せて、平成25年度の発掘調査では、「和田遺跡発掘調査に伴う航空写真測量・基準点測量委託業務」として株式会社ウエスコに、同25・26年度の第2次発掘調査では、「和田遺跡第2次発掘調査に伴う航空写真測量・基準点測量委託業務」としてワコウコンサルタント株式会社に再委託して実施した。

第2節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理

出土遺物については、調査現場の監督員詰所において一部について応急的な洗浄・注記作業を実施した。これは、調査の進捗に伴い、現地調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、また、現地公開・説明会において公開する目的をもって行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までのコンテナ収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。しかし、この段階では、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。

2 出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、現地調査の遺構図面・遺構写真などの調査記録資料の整理を行い、資料登録台帳(データのPC入力)などを作成した。

出土遺物の基礎的な整理作業

出土遺物の内、土器類は、通常の遺物収納コンテナ(容量 28 ℥)にして 110 箱である。その他、木器・木製品 5 点、金属製品 2 点、石器・石製品 55 点である。出土遺物の整理は、調査同様に『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006 年 4 月)に準拠して行った。

出土遺物は、応急整理済み(全ての洗浄・一部の注記作業)の物を省いて遺物の分別作業、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業(写真 9)・遺物内容及び点数の台帳登録集計・接合作業(写真 10)を行った。



写真 9 出土遺物(土器)への登録コード注記作業



写真 10 土器の接合作業

主要遺物を対象とした整理作業

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強(写真 11)・復元作業(写真 12)、遺物実測図の作成(写真 13・14)・実測遺物の台帳登録(本書に掲載の「出土遺物一覧」として利用)・遺物実測図のトレース・トレース図のレイアウト(写真 17)・遺物実測図の整理、集計登録データ等入力を行った。



写真 11 遺物充填材による土器の補強作業



写真 12 遺物充填材による土器の復元作業



写真 13 出土遺物の実測図作成(土器)



写真 14 出土遺物の実測図作成(石器)



写真 15 遺物実測図のトレース作業



写真 16 遺物実測図トレース図のレイアウト作業



写真 17 遺構図面のトレース作業

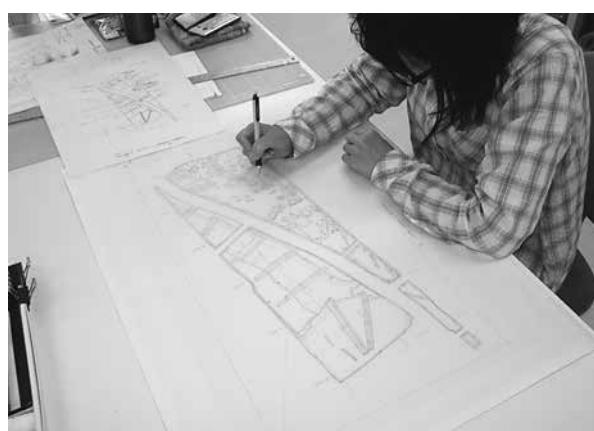


写真 18 遺構図面トレース図のレイアウト作業



写真 19 各種データの PC 入力



写真 20 遺構写真の整理

遺構図面の整理

現地調査の遺構図面は、台帳登録・報告書掲載用図面の作図を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を抽出した。抽出した遺構図面について、トレース作業(写真 17)・レイアウト作業(写真 18)を行った。また、調査報告書の本文原稿の作成に必要なため「検出遺構規模一覧」・「土坑列一覧」(表 4)・「杭列(小穴)一覧」(表 6)を作成し、データの PC 入力作業(写真 19)を行った。

遺構写真の整理

調査現場の記録写真には、 4×5 白黒・カラー、 6×7 白黒・カラー、35mm白黒・カラー、デジタル写真画像、ラジコンヘリを使用した航空写真がある。デジタル写真画像を省く各写真は、調査次毎に写真アルバムに収納し、各写真アルバムの背にタイトルを明示した。デジタル写真画像は、調査時に日付毎、もしくは地区毎にフォルダに纏められている。

デジタル写真画像・航空写真を省く写真に対して写真登録番号を付し、航空写真を省く写真に対して写真内容の記録を記載した(写真 20)。一部のデジタル写真画像については、調査報告書に使用する目的で、掲載用の写真画像の抽出を行った。

出土遺物の内容登録に伴う各層序別遺物数量

出土遺物の内容登録に伴う遺物破片点数の数量化は、大よその時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作業を進めた。土器の種類は、矛盾のない程度に簡素化している(表 3・7)。

時代・時期区分については、大よその時代設定を行い、大きく弥生時代前期・中期、弥生時代後期・終末期、古墳時代、飛鳥・奈良・平安時代、平安時代末～室町時代、江戸時代に区分した。

第3節 調査区の設定

地区割の方法(図 3～5)

調査現場での実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割の基準線は、平面直角座標系(世界測地系)第VI系の座標軸を使用し、数値はm単位で表示している。遺構図面の方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値を使用した。

地区割については、北側の井辺遺跡から和田遺跡までを網羅するよう X=−197.0 km、Y=−72.0 km の交点に基点を設け、この基点から西方と南方にそれぞれ 1 km 四方の区画を 1 単位として大区画を設定した。基点から西方向にはローマ数字の I ・ II で、南方向にはアラビア数字の 1 ・ 2 で表記した(図 3)。これにより、今回の調査範囲は全て大区画 I 2 区に位置することとなる。

この基点から、それぞれ 100m四方の区画を 1 単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット大文字で A～J と、南方向へアラビア数字で 1～10 と表記した(図 3・4)。さらに 4 m 四方の小区画を 1 単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字で a～y と、南方向へアラビア数字で 1～25 と表記した(図 5)。

遺構図面作成や遺物取り上げの際には原則として、4 m四方の小区画で行い、大区画一中区画一小区画を組み合わせて表記して用いた(但し、今回の調査範囲は、第 1 次調査・第 2 次調査

区共に大区画 I 2

区に入るため、本文の記述における大区画の表記は省略した)。

調査区は、2012 年度の第 1 次調査区を便宜上 1 区に、2012・2013 年度の第 2 次調査区を 1 区～4 区に区分した。2 区は、水路によって南北に分断されたため、さらに 2-1 区・2-2 区に区分した。

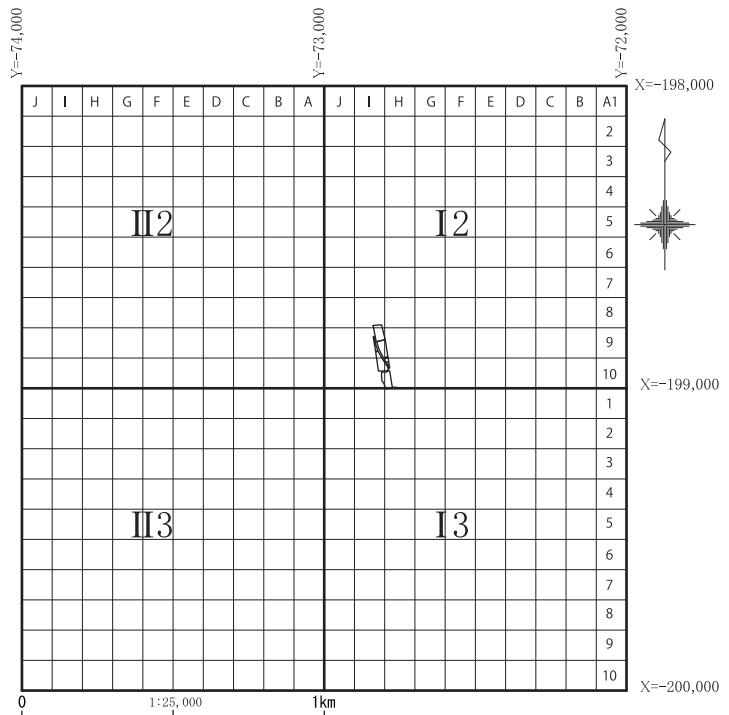


図 3 区画割模式図(1 km区画)

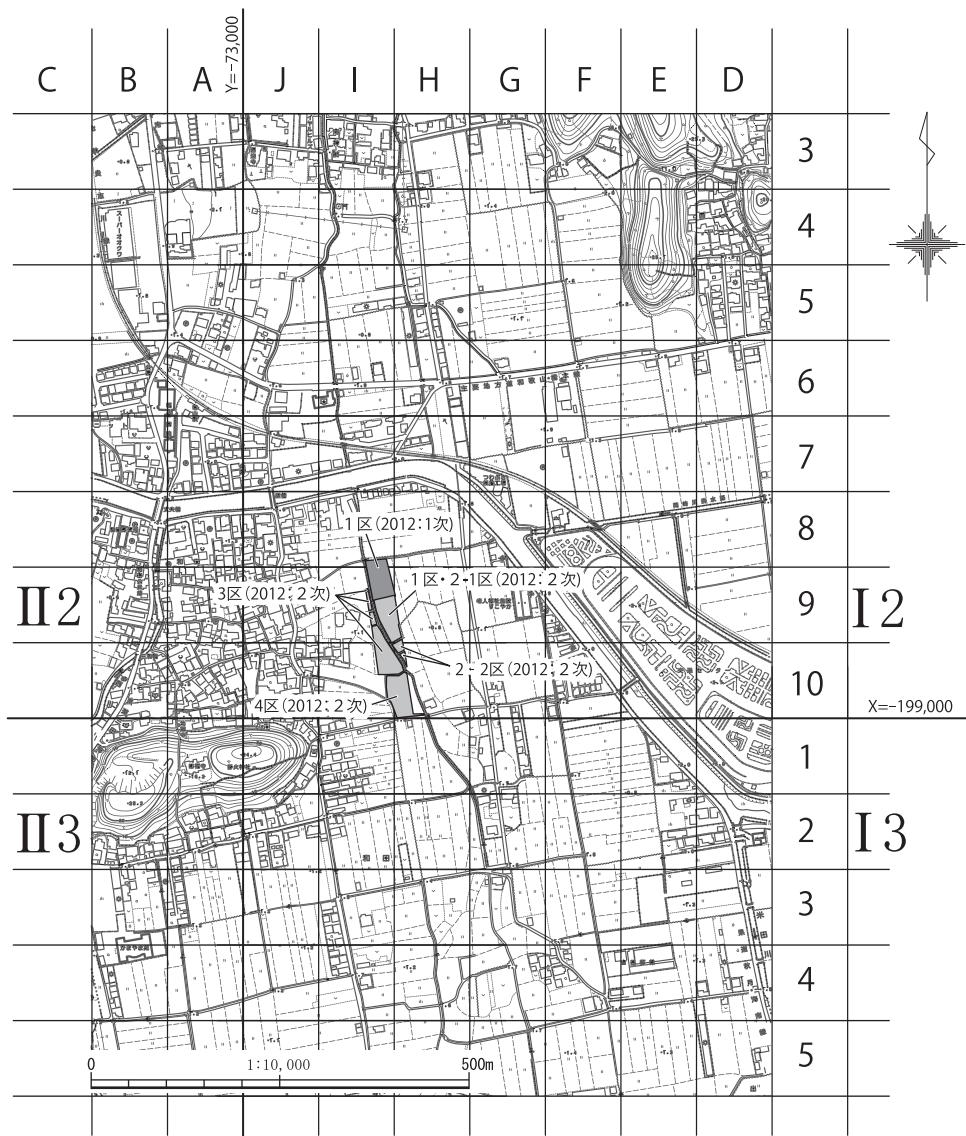


図 4 調査位置と区画割(100 m 区画)

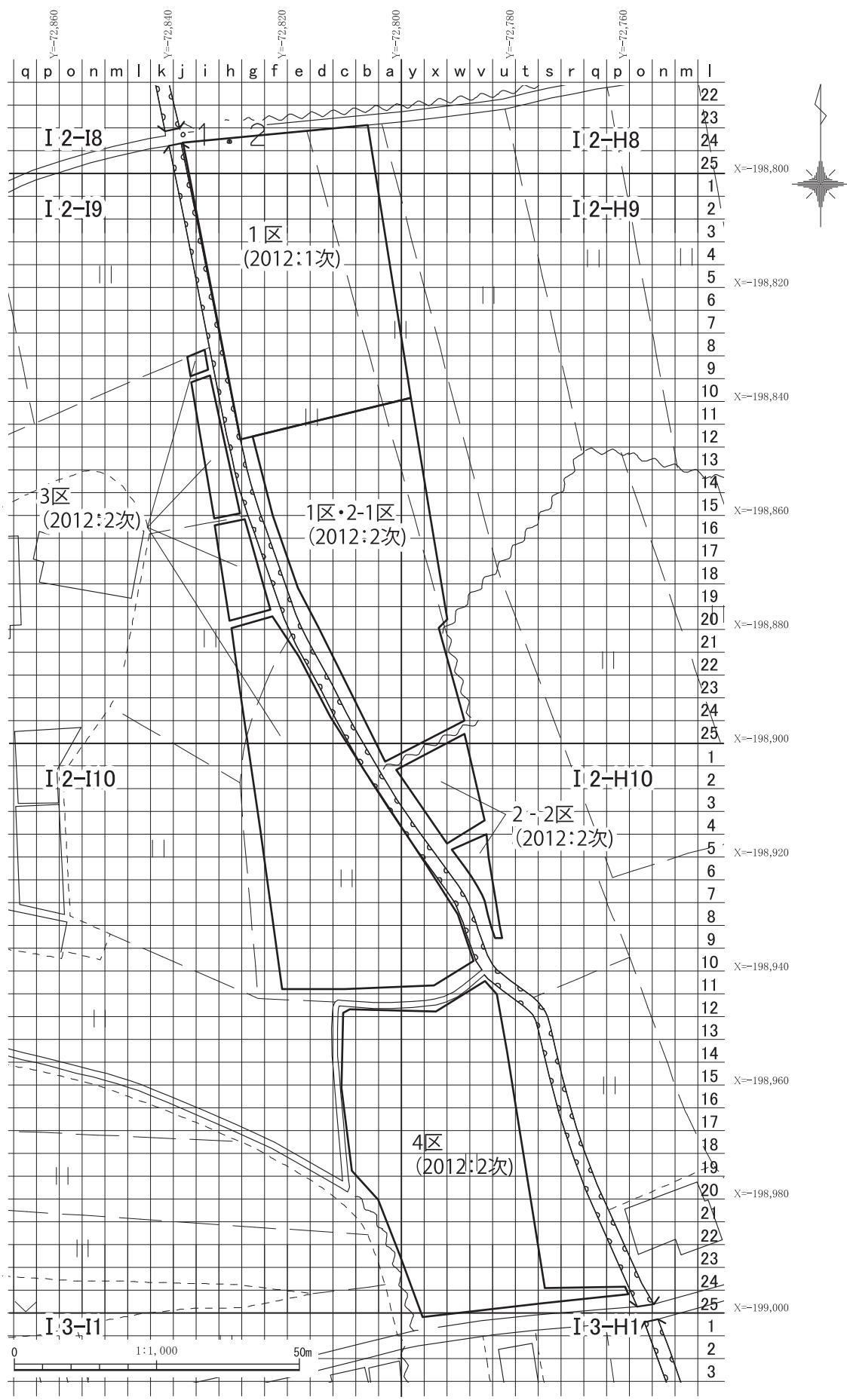


図5 調査範囲と地区割(4m区画)

第IV章 調査成果

第1節 第1次調査の成果

1 第1次調査の概要

第1次調査では、調査区の東側に良好な遺構が残り、西側から南東側にかけて自然流路となる。遺構検出は、第4層と第I層(基盤層)の上面で行った。第1遺構面で検出した主な遺構には、井戸4基・土坑・小穴・溝状遺構数条などが、第2遺構面(第I層・基盤層上面)の主な遺構には、井戸1基・土坑・小穴・自然流路などがある。調査地には既往の調査結果同様に、水田耕作に伴うとみられる植物痕や踏み込みが多数検出された。検出された植物痕や踏み込みからは弥生土器・土師器の細片が見られた。

遺物は、弥生時代前期・中期・終末期の土器・石器、古墳時代、奈良時代の土器が出土した。その他、鎌倉時代、江戸時代の遺物も少量であるが出土した。

2 基本層序と遺構面 (図6・7、写真21・22)

調査前の現況は、水田である。基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土(第1a層)灰色もしくは褐灰色のシルト～細砂と床土(第1b層)明黄褐色のシルト～細砂に細分できる。

第2層：第2層は、近世以降の旧耕作土及び整地土で、灰白色のシルトで粒状に鉄分を多く含む。調査区中央より西側にみられる。

第3層：第3層は、中世の遺物包含層で、耕作土と考えられる褐灰色～灰色のシルトである。また、調査区南側には明褐色のシルトがみられる。

第4層：第4層は、古墳時代の遺物包含層で、黄灰色(第4a層)～灰色(第4b層)の細砂である。第1遺構面を形成すると共に205自然流路の上位層の堆積層となる。

基盤層

第I層：明黄褐色のシルト～細砂である。第2遺構面の基盤層である。

第II層：灰黄褐色のシルト～細砂である。

第III層：灰色のシルト～細砂である。

第IV層：灰色～青灰色の細砂～中砂で湧水層である。

遺構検出面

調査は、遺構面2面を対象に実施し、第1遺構面の第4層上面は、標高約1.0mから約0.9mである。また、第2遺構面の基盤層第I層上面は、標高約0.9mから約0.85mである。

第1遺構面の第4層は調査区西側から南東側にかけて見られ、多くの土器を含み、調査区西側に広がる205自然流路の上位層の堆積土と考えられる。調査区南側では032落ち込み状遺構が検出され、自然流路が埋没した後、掘削されたものと考えられる。第2遺構面の第I層は基盤層で調査区中央から東側にかけて広がる。

近世以降の整地土及び旧耕作土である第2層については、調査区中央から西側に堆積が見られ、南西側に行くにつれ厚く堆積し、瓦器・土師器片がわずかに含まれる。

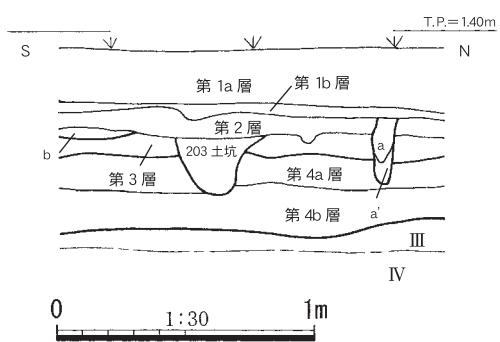


図6 第1次調査の基本層序1(調査区西壁断面土層：I9-i5・6)

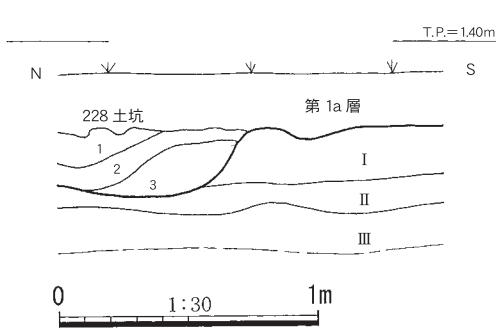


図7 第1次調査の基本層序2(調査区東壁断面土層：H9-a5)



写真21 第1次調査 調査区西壁断面土層(東から)



写真22 第1次調査 調査区東壁断面土層(西から)

3 各遺構の調査成果

以下、主な遺構について古い時代順に記述する。

(1) 第2遺構面の検出遺構 (図8～12・21・22・24、写真図版1～3・17・19)

弥生時代の遺構は、前期の弥生土器が出土した018井戸や、中期の209土坑・037小穴を検出した。また、調査地西側から南側にかけて205自然流路を検出しており、出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代後期にかけて埋没したものと考えられる。

当項では、調査結果により第1遺構面として検出した遺構の内、弥生時代終末期までに該当する時期の遺構について、便宜上第2遺構面での検出遺構として記述する。



図8 第1次調査 第2遺構面 遺構全体平面図

018 井戸 (図9・21、写真図版2・17)

018 井戸は、調査区の東側南寄り I 9-b 6・7 に位置し、短軸南北 2.36m・長軸東西 2.39m のほぼ円形を呈する素掘り井戸である。断面形は、逆台形を呈し、残存の深さは 1.08m を測る。埋土の中位層で炭化物が混じり、残存の深さは約 0.60m で湧水層に達する。埋土は、14 層を検出した。基底部の西側に直径約 10~15cm の杭が 2 本打ち込まれている。埋土の中層で弥生時代前期の土器 83 点、壺(1・2・4・7)、下層で壺(6)5 点が出土した。これらの土器は井戸の廃

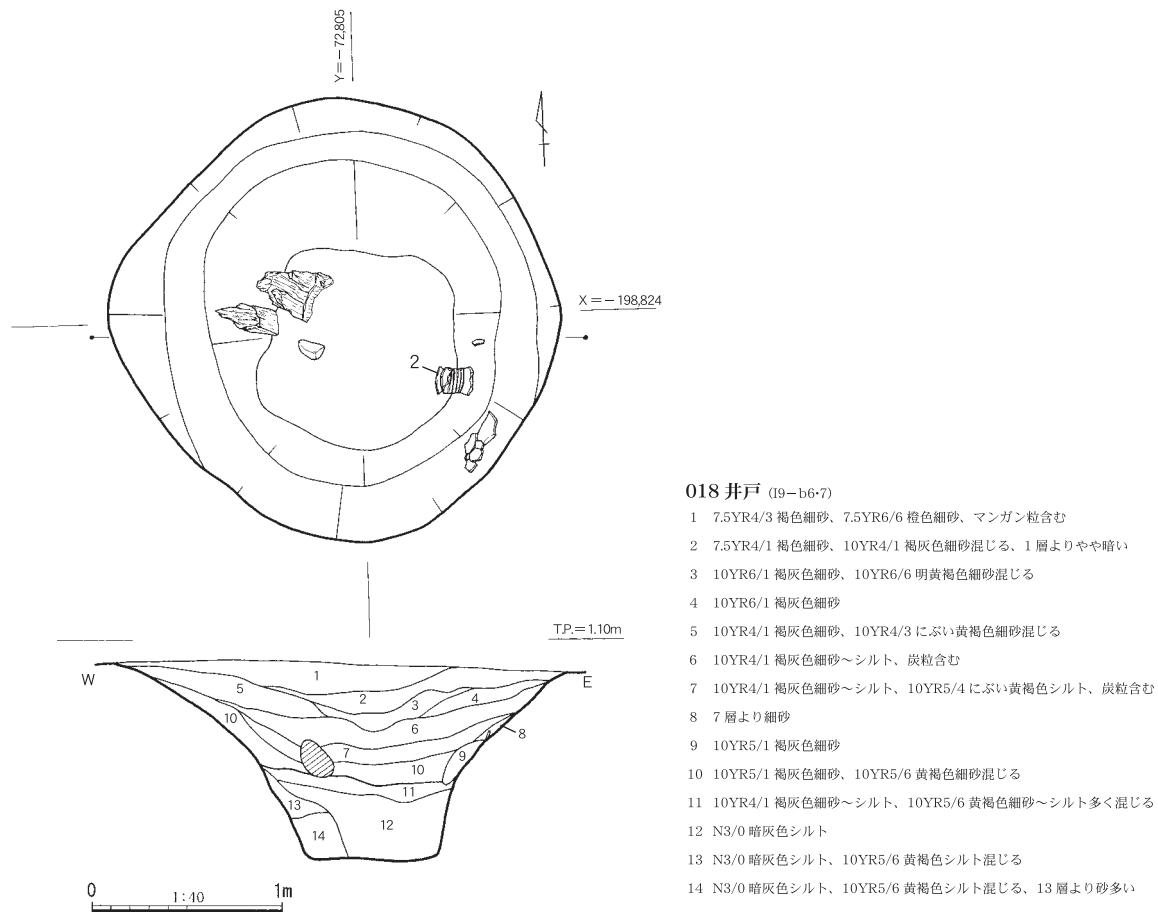


図9 第1次調査 018 井戸実測図

絶時に廃棄されたものと考えられる。その他を含めて、埋土から弥生土器片 157 点が出土した。

これらの遺物から、018 井戸は弥生時代前期の紀伊 I - 3 様式に帰属するものと考えられる。

037 小穴 (図10・21、写真図版2・17)

037 小穴は、調査区の北東隅 I 9-b 1 に位置し、短軸東西 0.26m・長軸南北 0.31 m の楕円形を呈する。断面形は、U 字形を呈し、残存の深さは 0.17m を測る。埋

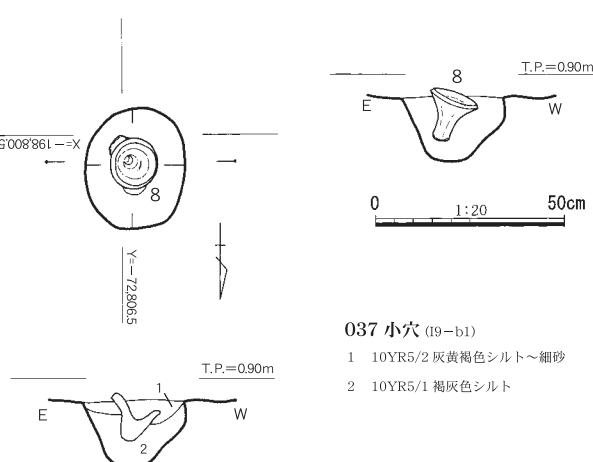


図10 第1次調査 037 小穴実測図

土は、2層を検出した。遺物は、弥生時代中期の紀伊IV-1様式と考えられる高壙脚柱部1点(8)が斜位の状態で出土した。037小穴は、調査時には第1遺構面としているが、出土遺物から第2遺構面と考えられる。

この遺物から、037小穴は弥生時代中期の紀伊IV-1様式に帰属するものと考えられる。

209土坑(図11・21、写真図版2・17)

209土坑は、調査区の中央東寄りI9-d3・4に位置し、東西0.60m・南北0.60mのほぼ円形を呈する。断面形は、歪な箱形を呈し、残存の深さは0.30mを測る。埋土は、6層を検出した。遺物は、弥生時代中期の紀伊IV-1様式と考えられる弥生土器の手捏ね壺1点(9)が出土した。手捏ね壺は、肩部に笠先による刺突文、体部に稚拙で雑な櫛描波状文と直線文が各1条施される。櫛は、草本類の茎状のものを半裁し2本を結束したもの用いたと考えられる。

この遺物から、209土坑は弥生時代中期の紀伊IV-1様式に帰属するものと考えられる。

205自然流路(図8・12・21・22・24、表3、写真図版3・17・19)

205自然流路は、主に調査区の西側から南東側にかけて広がる。第2次調査の2011自然流路と合わせて南北幅員約27mを測る(但し、2011自然流路の時期を示す遺物は古墳時代であるため、正確には205自然流路の上位層にある遺物包含層第4層の堆積時期が2011自然流路と併行する)。深さは、最も深い部分で0.41mを測る。調査時には「落ち込み状遺構」と認識して調査が進められた自然流路である。205自然流路の上位層には、遺物包含層として掘削した第4層が広範囲に埋積する状態にある。

遺物は、自然流路の南東側肩付近に集中して多く見受けられる傾向にあり(図8の「遺物集中」)、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体である。また、遺物の遺存状態は極めて悪く、形状を留めた状態での取り上げは困難であった。205自然流路からは、総計5,069点の遺物が出土した。その内、弥生時代終末期と判断できたものは4,968点(98.0%)、弥生時代前期・中期と判断できたものは82点(1.6%)である。遺物は、弥生時代中期の甕(10・11)、終末期の広口壺(12~15)・二重口縁壺(17・18)・直口壺(19)・甕(20~23)・高壙(24~28)・鉢(29~31)、貞岩製の小型扁平片刃石斧(88)・チャート製の敲石(91)・砂岩製の石皿(92)・砂岩製の砥石(93)、古墳時代の須恵器壙蓋(32)などが出土した。その他、腐朽の著しい多くの木質遺物も出土した。

古墳時代と判断した土師器13点、須恵器壙身3点・壙蓋(32)3点・甕1点は、その遺物量(205自然流路の出土遺物全体の0.4%)から上位層の掘り残しと判断した。

弥生時代終末期を主体としたこれらの出土遺物の組成は、第2次調査の1区・2区で検出した

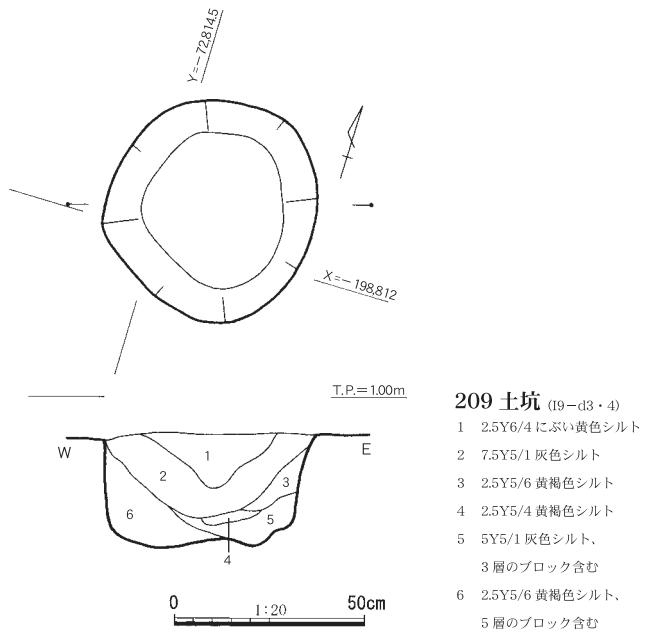


図11 第1次調査 209土坑実測図

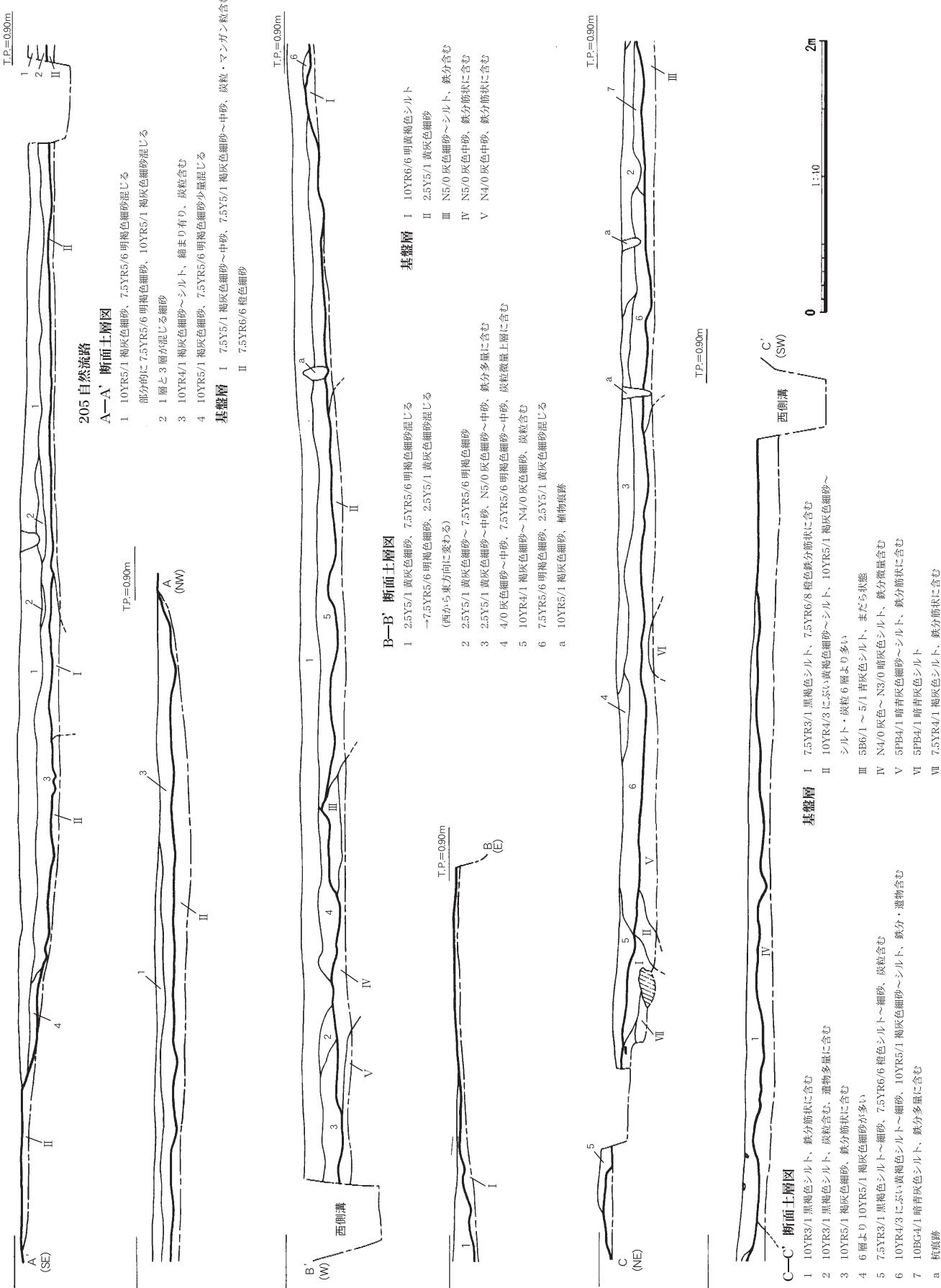


図 12 第1次調査 205 自然流路断面土層図

2010 自然流路中層・上層の出土遺物と類似する傾向にあり、205 自然流路下位層と 2010 自然流路上層の埋没過程が併行するものと考えられる。

(2) 第1遺構面の検出遺構 (図 13~20・22・23、写真図版 4~6・18・19)

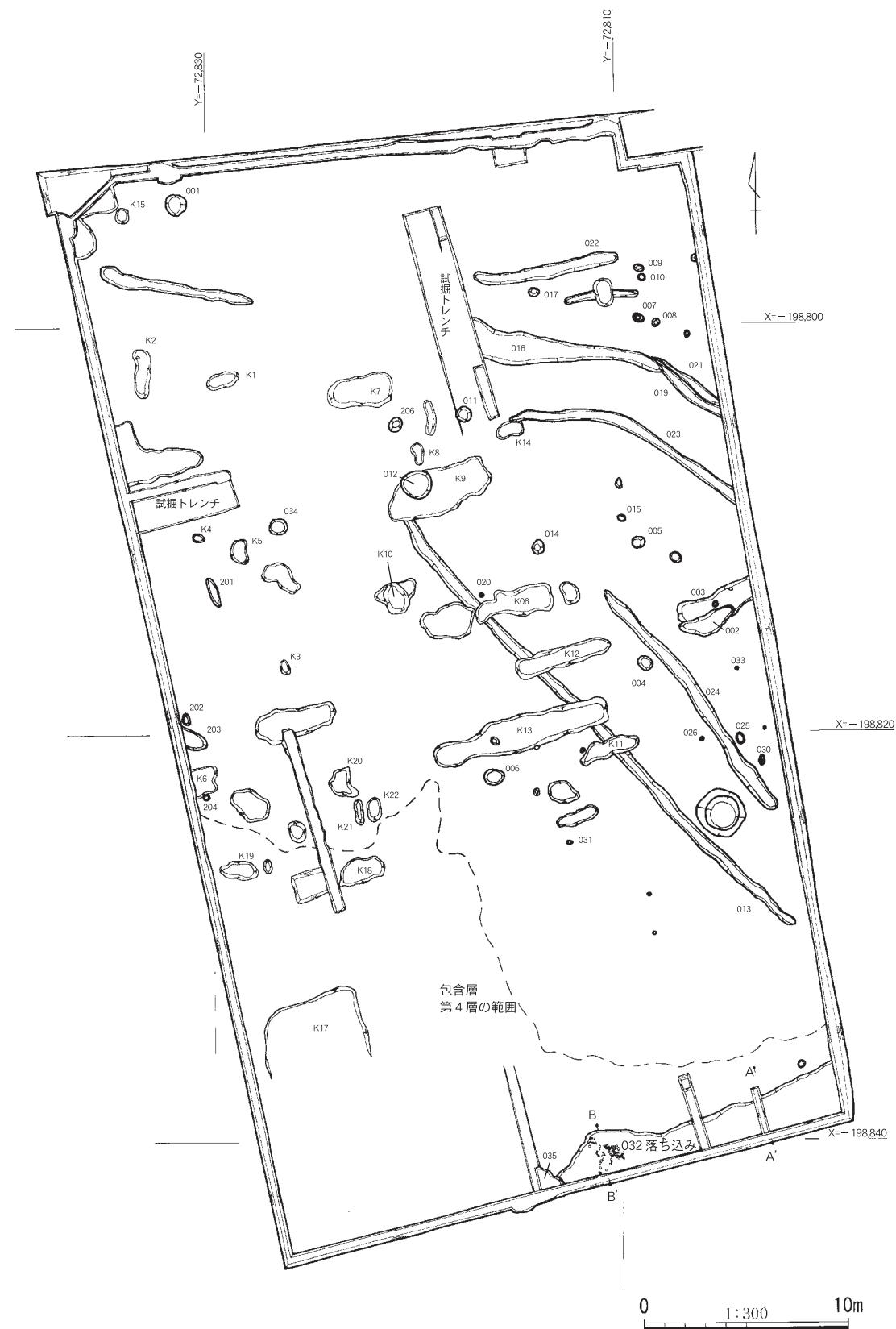


図 13 第1次調査 第1遺構面 遺構全体平面図

古墳時代の遺構は、井戸や土坑・溝状遺構を検出した。第1遺構面の032落ち込み遺構は第2遺構面の205自然流路の埋没後に掘削されたものと考えられ、須恵器坏身、土師器高坏・製塩土器が出土した。その他、遺物包含層第4層から滑石製臼玉や有孔円盤などが出土した。古代の遺構は、木枠組みの001井戸があり、遺物の埋設状況から井戸の廃絶に伴う祭祀を行ったものと考えられる。

当項では、調査結果により調査区北東にかけて検出した遺構は、基盤層第I層上面に形成されるものであるが、便宜上第1遺構面での検出遺構として記述する。

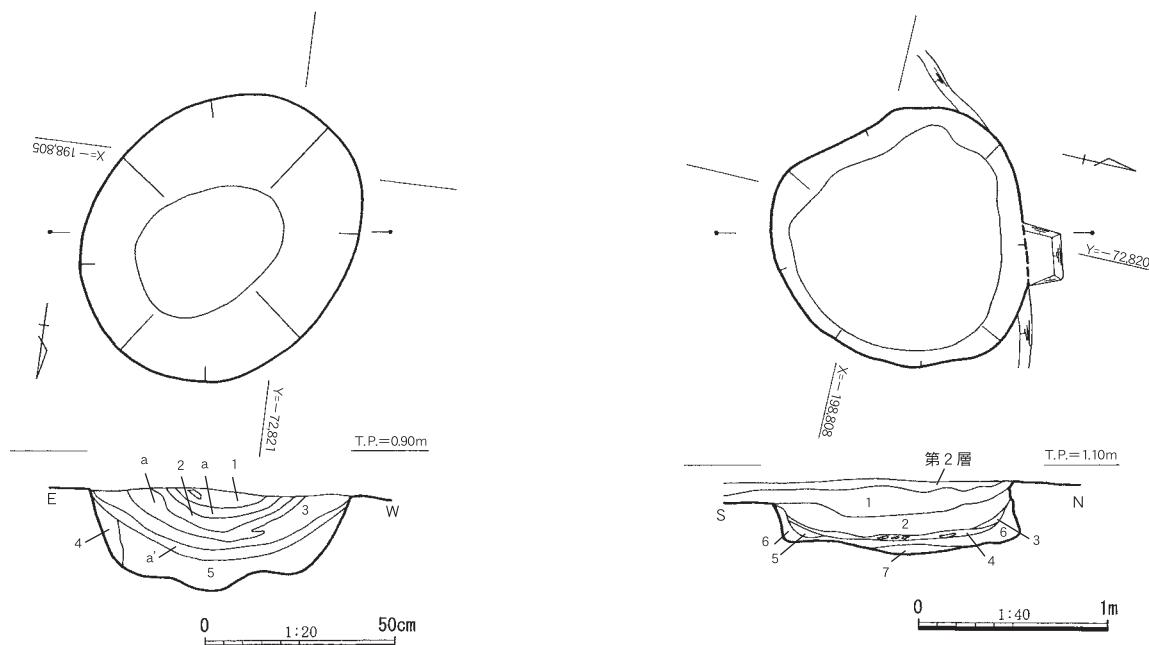
206 土坑（図14、写真図版5）

206土坑は、調査区の北側中央I9-f2に位置し、短軸北西-南東0.65m・長軸北東-南西0.80mの楕円形を呈する。重複関係から、205自然流路より新しい。断面形は、歪なU字形を呈する。埋土は、レンズ状に堆積し、約10cm毎にa層もしくはa'層が3層分堆積し、残存の深さは0.28mを測る。埋土は、5層を検出した。遺物は、弥生時代終末期もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器微細片10点が出土した。図化できる遺物はなかった。

これらの遺物から、206土坑は205自然流路の埋没過程での弥生時代終末期もしくは古墳時代に帰属するものと考えられる。

012 土坑（図15、写真図版5）

012土坑は、調査区の北側中央I9-e・f2・3に位置し、短軸東西1.39m・長軸南北1.41mの歪な円形を呈する。重複関係から、205自然流路より新しい。上部をK9遺構により削平される。断面形は、中央がやや深めの方形を呈し、埋土の下位層(4層)で大量の炭化物と土器片



206 土坑 (I9-f2)

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細砂、10YR5/1 褐灰色シルト～細砂混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、マンガン粒含む
- 3 10YR5/1 褐灰色細砂～シルト、10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂混じる
- 4 10YR5/1 褐灰色細砂
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂、マンガン粒含む
- a 5Y7/1 灰白色ぎみの 5B7/1 明青灰色細砂混じりシルト
- a' 5B7/1 明青灰色細砂混じりシルト

図14 第1次調査 206 土坑実測図

012 土坑 (I9-e・f2・3)

- 1 N4/0 灰色細砂、炭粒含む (K9 土坑)
- 2 10YR6/6 明黄褐色細砂、10YR5/1 褐灰色細砂混じる、マンガン粒含む
- 3 2層より 10YR5/1 褐灰色細砂多い
- 4 板状に土器、炭粒含む
- 5 2層よりシルト
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト、やや細砂、10YR4/4 褐色シルト混じる
- 7 10YR5/1 褐灰色細砂、10YR5/6 黄褐色細砂、炭粒含む

図15 第1次調査 012 土坑実測図

が混じり、残存の深さは0.39mを測る。埋土は、7層を検出した。埋土の下位層で弥生時代終末期もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器細片11点が出土した。図化できる遺物はなかった。

これらの遺物から、012土坑は弥生時代終末期もしくは古墳時代に帰属するものと考えられる。

遺物包含層 第4層関係（図22・24、表3、写真図版18・19）

「包含層4層」の遺物は、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体で、接合率が低い。遺物は、弥生時代終末期の壺・甕・高坏、古墳時代前期（布留式併行期）の土師器高坏、古墳時代の土師器高坏（36）、須恵器坏身（37）・壺、滑石製白玉（87）などが出土した。その他、奈良時代の須恵器蓋（39）1点が出土したが、その遺物量（遺物包含層第4層関係の出土遺物全体の0.05%）から上位層の掘り残しの混入と判断した。

また、「包含層4層落ち込み」・「4層205落ち込み」の遺物も、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体で、接合率が低い。遺物は、弥生時代の紀伊I様式或いはII様式の紀伊形甕、サヌカイト製の凹基無茎式石鏸（84）、弥生時代終末期の広口壺（33）・甕（34）・高坏（35）、古墳時代の須恵器坏身（37）・高坏脚台部（38）などが出土した。その他、奈良時代の須恵器蓋（39）、鎌倉時代の土釜1点・瓦器椀3点、滑石製の温石（89）1点などが出土したが、その遺物量（遺物包含層第4層関係の出土遺物全体の0.6%）から上位層の掘り残しの混入と判断した。これらの遺物内容から、「包含層4層落ち込み」・「4層205落ち込み」は、「包含層4層」と時期差の無いものと判断した。遺物包含層第4層関係からは、総計1,821点の遺物が出土した。

弥生時代終末期及び古墳時代を主体としたこれらの出土遺物の組成は、第2次調査の1・2区に広がる遺物包含層第2層の出土遺物と類似する傾向にある。

011井戸（図16・22、写真図版5・18）

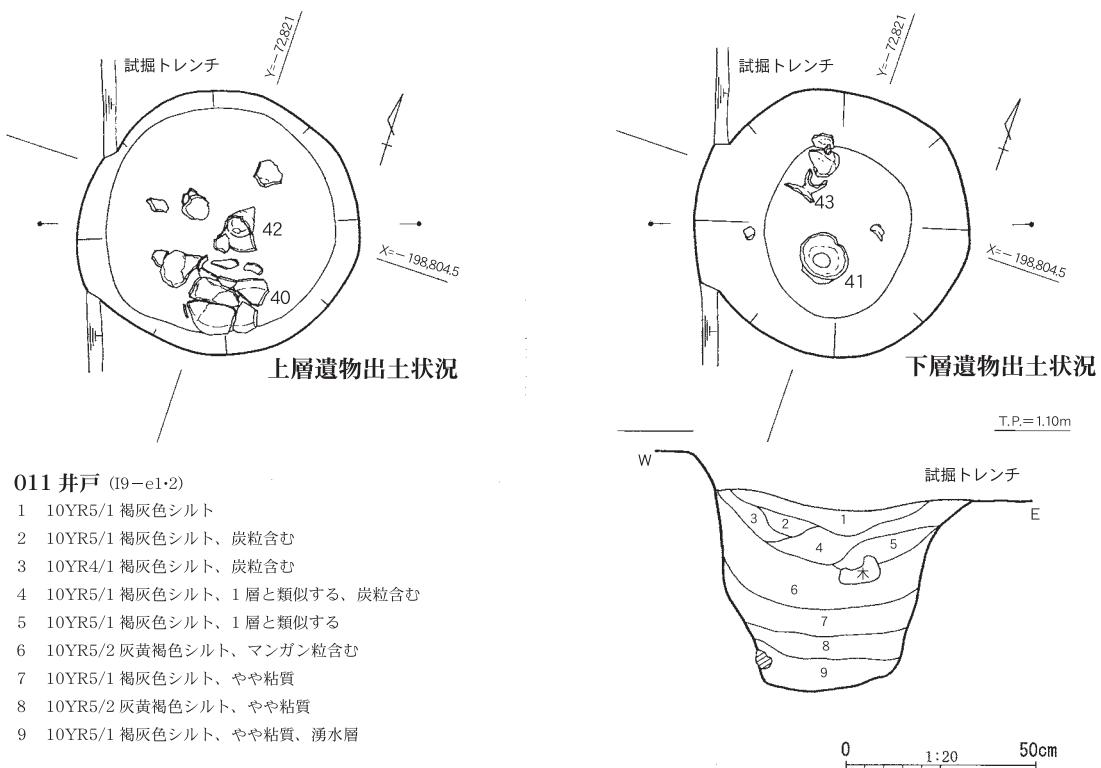


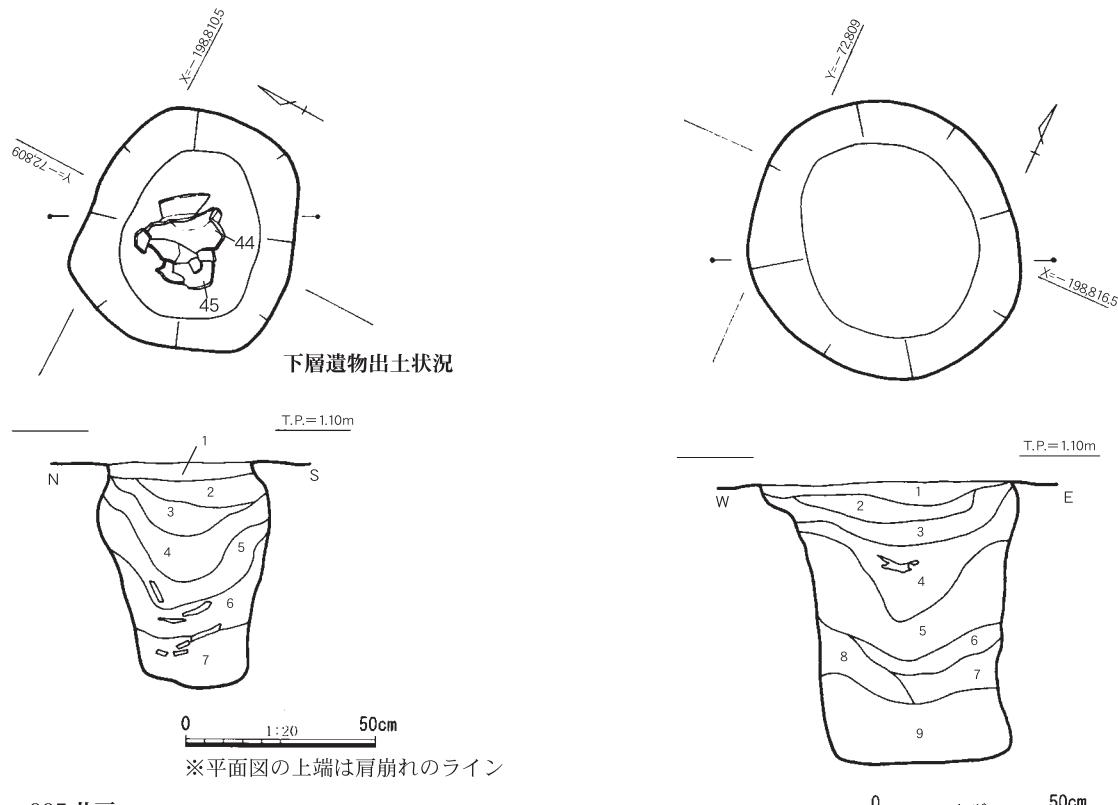
図16 第1次調査 011 井戸実測図

011 井戸は、調査区の北側中央 I 9-e 1・2 に位置し、短軸南北 0.70m・長軸東西 0.74m のほぼ円形を呈する。大半が試掘トレーニで削平される。断面形は、深い U 字形を呈し、埋土の上位層で炭化物が混じり、残存の深さは 0.65m で湧水層に達する。埋土は、9 層を検出した。埋土の上層で古墳時代の土師器甕(40)・高坏(42)、下層で古墳時代の土師器甕(41)・高坏(43)が出土した。井戸の廃絶に伴い土器が廃棄されたものと考えられる。その他を含めて、埋土から古墳時代の土師器片 101 点が出土した。古墳時代の須恵器は、出土していない。その他、層位不明から奈良時代の須恵器蓋 1 点が出土したが、混入と判断した。

これらの遺物から、011 井戸は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。

005 井戸 (図 17・22、写真図版 5・18)

005 井戸は、調査区の東側中央やや北寄り I 9-c 3 に位置し、短軸南北 0.56m・長軸東西 0.65m のやや歪な楕円形を呈する。005 井戸の図 17 の平面形は、肩崩れの状態を示す。断面形は、深い U 字形を呈し、残存の深さは 0.60m で湧水層に達する。埋土は、7 層を検出した。埋土の中層から下層にかけて、古墳時代の土師器甕(44・45)が重なるような状態で出土した。井戸の廃絶に伴い土器が廃棄されたものと考えられる。その他を含めて、埋土から古墳時代の土師器片



005 井戸 (I9-c3)

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、炭粒含む
- 4 10YR3/3 暗褐色シルト～細砂
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂、炭粒含む
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト、10YR5/3 にぶい黄褐色シルト混じる
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト

図 17 第 1 次調査 005 井戸実測図

004 井戸 (I9-c5)

- 1 N5/0 灰色細砂～シルト、2 層混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂～シルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰色細砂～シルト
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂、木片含む
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト～細砂
- 8 10YR3/1 黑褐色シルト～細砂
- 9 10YR3/1 黑褐色シルト～細砂、湧水層

図 18 第 1 次調査 004 井戸実測図

68点が出土した。須恵器は出土していない。

これらの遺物から、005井戸は古墳時代後期に帰属するものと考えらえる。

004井戸（図18・22、写真図版6・18）

004井戸は、調査区の東側中央I9-c5に位置し、短軸東西0.72m・長軸南北0.76mのほぼ円形を呈する。断面形は、深いU字形を呈し、埋土の上位層に炭化物が混ざり、残存の深さは0.75mで湧水層に達する。埋土は、9層を検出した。遺物は、埋土の上層から古墳時代の土師器高杯(46)・甕、その他を含めて、弥生時代終末期もしくは古墳時代の土器片26点が出土した。須恵器は出土していない。

これらの遺物から、004井戸は古墳時代に帰属する可能性が考えられる。

032落ち込み（図19・23、写真図版6・18）

032落ち込みは、調査区の南東端H9-y10～I9-d11にかけて位置する。検出幅員1.2～2.7m・検出延長14.5m、東側と南側は調査地外に延びるため全容は不明である。また、南側の第2次調査1・2-1区での対応する遺構は、不明である。埋土は、最上位に遺物包含層第3層が緩やかに落ち込む。その下位の埋土の中層でまとまりのある遺物が出土した。基底部では、緑泥片岩を主体とした直径5～10cm前後の円礫(川原石)70個ほどが敷き詰められたような状態で出土した。その円礫の中に、石器・石製品は認められない。

遺物は、剥離・磨滅が極めて著しく細片が主体で、接合率が低い。この状況から、破碎した土器を廃棄したものと考えられる。遺物は、弥生時代終末期の二重口縁壺(47)・甕(50・51)・高坏(52・53)・甕(55)、古墳時代前期(布留式併行期)の土師器二重口縁壺(48)・高坏(54)・製塩土器脚台3式(56～59)25点、古墳時代後期の須恵器高坏脚部・壺などが出土した。032落ち込み遺構からは、総計1,758点の遺物が出土した。

これらの遺物から、032落ち込みは弥生時代終末期(庄内式併行期新段階)の遺物を含みつつ古墳時代後期にかけて埋積したものと考えた。下位層の遺物包含層第4層の最も新しい段階の埋積と然程時間を置かない堆積と考えられる。

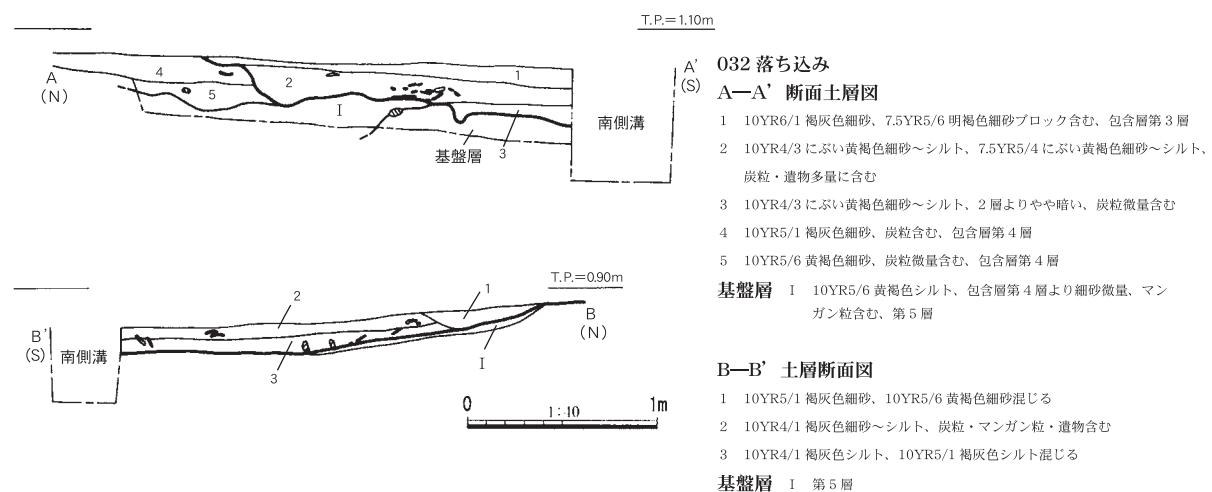


図19 第1次調査 032 落ち込み断面土層図

001井戸（図20・23、表3、写真図版6・18）

001井戸は、調査区の北西隅I8-h24に位置し、掘形東西0.90m・南北1.00mの歪な隅円

方形状を呈する。四隅に直径 10cm ほどの杭を打ち込み、各辺 3 枚の板材を縦位に組んで井戸枠としている。井戸側は、東西 0.60m・南北 0.65m を測り、杭材と共に腐朽が著しく軟弱化し、板材として取り上げることができなかった。埋土は、7 層を検出し、残存の深さは 0.51m である。下層では粗砂となり湧水層に達する。上層の埋土に、20~40cm 大の緑泥片岩・砂岩の板石 6 枚が重なり埋没していた。それらを取り除くと奈良時代の土師器壺(60)に 7 × 8 cm 大の長石の円礫 1 点を入れた状態で埋設されており、井戸の廃絶に伴い祭祀を行ったものと考えられる。その他、井側内埋土から土師器甕 1 点(61)・製塩土器(62) 4 点・須恵器壺(63) 1 点・平瓶(64) 1 点、桃核 3 点などが、裏込めから土師器甕 1 点・製塩土器 3 点が出土した。表 3 の層序要素 9 「第 1 遺構面検出遺構」の奈良時代の遺物の大半が 001 井戸からの出土である。

これらの遺物から、001 井戸は奈良時代の平城Ⅲ段階に帰属するものと考えられる。

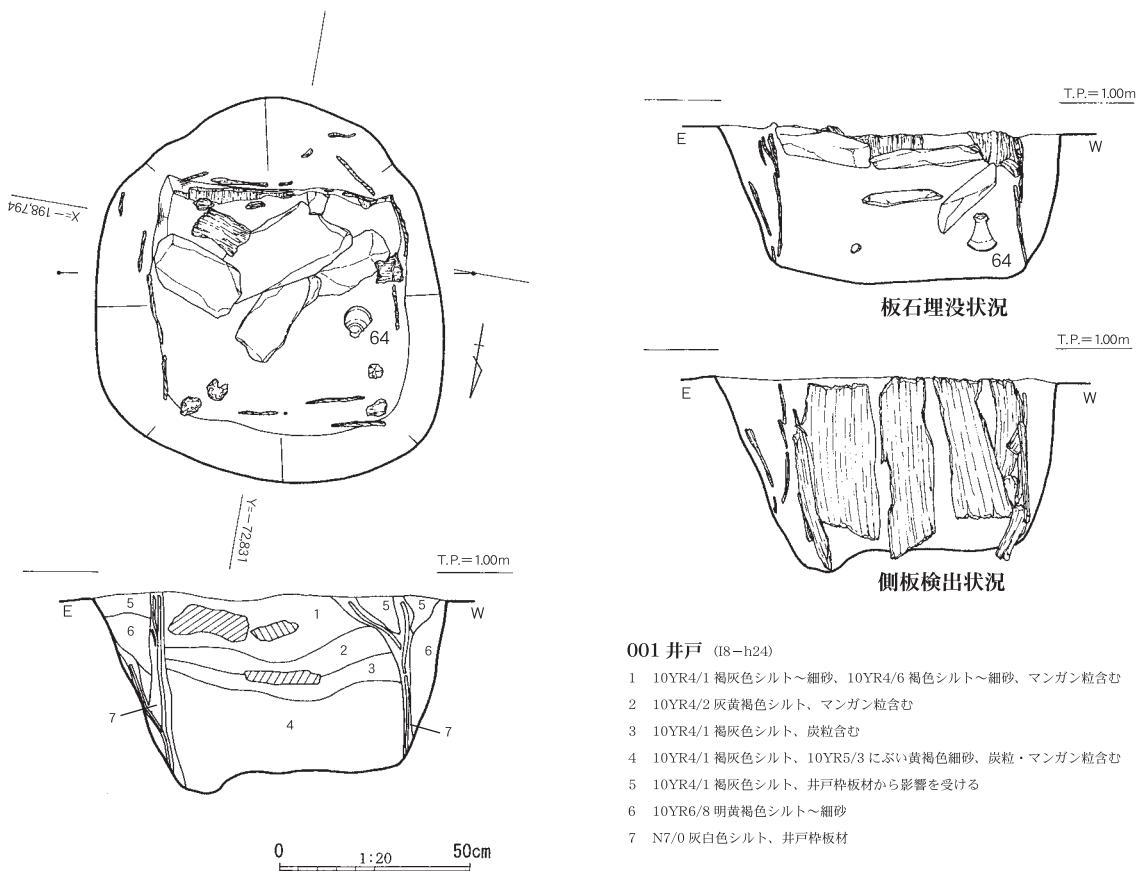


図 20 第 1 次調査 001 井戸実測図

その他の第 1 遺構面検出遺構と出土遺物（図 23）

柱穴・小穴 調査区東側で複数検出した。I 8-c25 の 007 小穴や I 9-b5 の 033 小穴などは柱穴と考えられる堆積状況である。周辺では建物を構成する柱穴は検出されていないが、調査区東側の微高地上に何らかの建物が存在した可能性が考えられる。

K 遺構（図 23、表 3） K 遺構は、現地調査において攪乱と言う扱いで処理された不整形な土坑である。第 1 次調査区において 23 基検出した。遺構の規模は様々で、基底部は凹凸が著しい。埋土の土質は、第 2 層由来の灰白色シルト質土からやや粘質ものである。

しかし、出土遺物の検討の結果、遺構 K015 と調査区北西隅の攪乱が近現代の陶磁器・瓦を

含むのみである。その他のK遺構からは、下位層の弥生時代前期の遺物から終末期、古墳時代、奈良時代の遺物を含みつつ、最も新しいと判断できた遺物は、瓦器椀(70)・瓦器小皿(71)・瓦質甕・東播系須恵質捏鉢などの鎌倉時代に帰属するものである。

機械掘削・側溝掘削土（図23、写真図版19）

機械掘削及び側溝掘削土からは、多くの弥生時代終末期の弥生土器・敲石(90)、古墳時代の土師器・須恵器坏蓋(67)・高坏(64)・有孔円盤(86)、奈良時代の土師器甕(65)、室町時代の白磁皿(69)と共に近世の多くの遺物が出土した。側溝から出土した遺物は、総計731点である。

南壁側溝掘削時に出土した遺物は、大半が弥生時代終末期の弥生土器で、僅かに古墳時代の土師器・須恵器が混じって出土した。側溝の位置と第1遺構面の032落ち込み遺構もしくは第2遺構面の205自然流路と合致することから、この何れかの遺構に帰属するものと考えられる。

遺物包含層 第3層関係（図23、表3、写真図版19）

遺物包含層第3層関係は、「包含層3層」・「包含層3層落ち」等の記載で認識され、遺物の取り上げが行われている。遺物包含層第3層は、主に第2遺構面の205自然流路に重複する範囲から調査区北側に存在する傾向にある。遺物包含層第3層には、下位層の弥生時代前期の遺物から中期・終末期、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代の遺物を含みつつ、最も新しいと判断できた遺物は、僅かな量7点の近現代の陶磁器(83)・瓦、寛永通宝などである。その遺物量(遺物包含層第3層関係の出土遺物全体の0.5%)から、近現代の遺物は上位層の掘り残しの混入とし、「包含層第3層」・「包含層3層落ち」は最も新しい鎌倉時代に形成された堆積層と考えた。

遺物は、弥生時代中期の直口壺(72)、サヌカイト製の凸基無茎式石鏸(85)、弥生時代終末期の各器種、古墳時代の土師器壺(73)・高坏(74)・製塩土器脚台3式(75・76)、須恵器坏身(79)・坏蓋(77・78)・無蓋高坏(80)・壺・甕、飛鳥時代の須恵器坏身(82)・平瓶(81)、鎌倉時代の瓦器椀・瓦質甕・東播系須恵質捏鉢などが出土した。包含層第3層関係からは、総計1,419点の遺物が出土した。

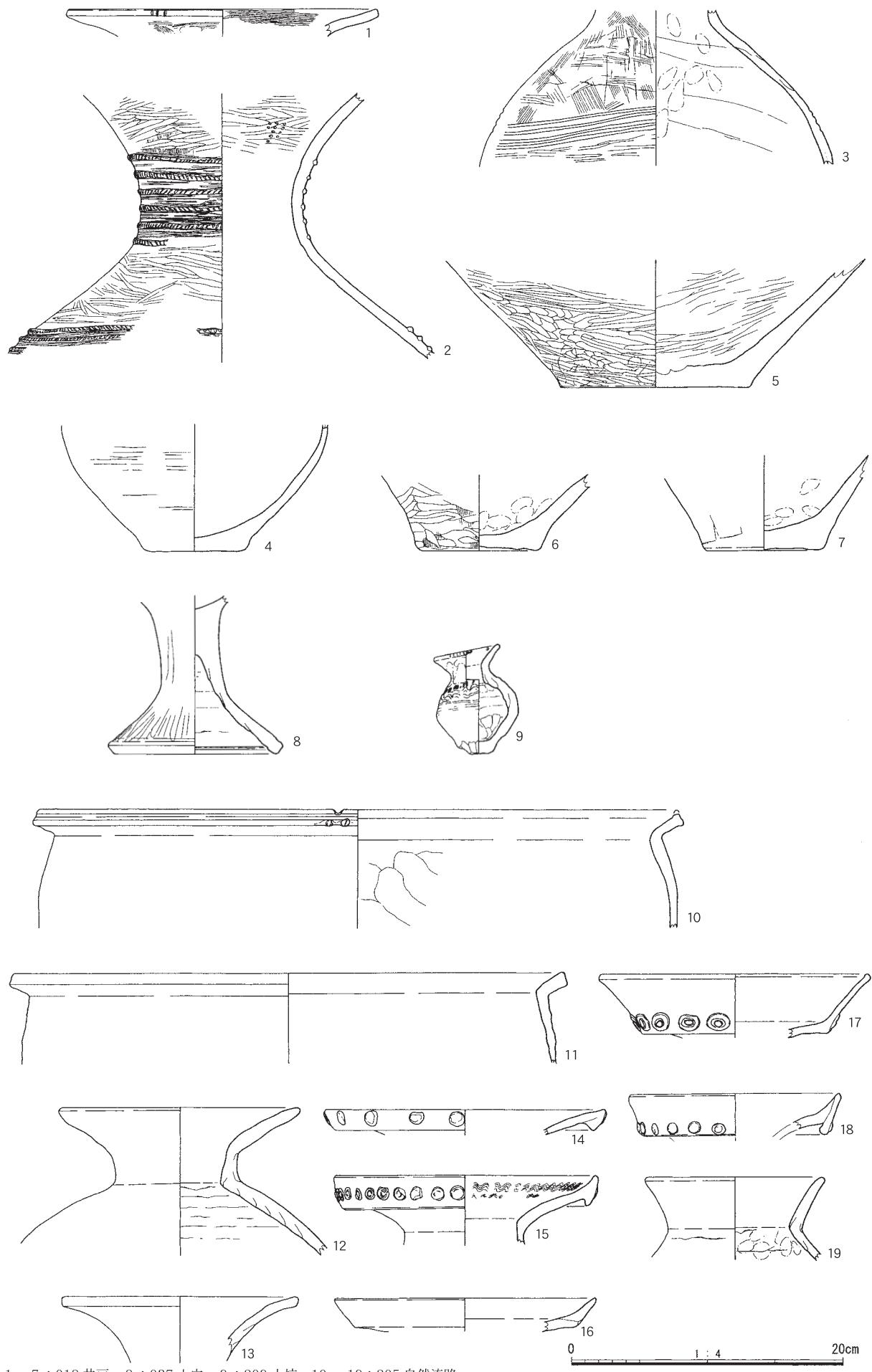
4 小結

第1次調査は、遺物包含層第4層と基盤層第I層の上面を対象に遺構検出を行った。平成9年に実施された調査と同様にイネ株とみられる植物痕が多数見られ、河南条里に伴う水田開発以降、連綿と水田として利用されてきたと推測される。調査地の北東から東側にかけては微高地が広がっており、この微高地上で弥生時代から中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、前期の土器が出土した018井戸や中期の037小穴・209土坑を検出した。また、調査地西側から南東側にかけて205自然流路を検出しており、出土遺物から弥生時代終末期～古墳時代前期にかけて埋没したものと考えられる。古墳時代の遺構は、井戸や土坑・溝状遺構を検出した。032落ち込みは、205自然流路の埋没後に掘削されたものと考えられる。古代の遺構は、木枠の001井戸があり、遺物の埋設状況から井戸の廃絶に伴う祭祀を行ったものと考えられる。中・近世の明瞭な遺構は確認できなかった。

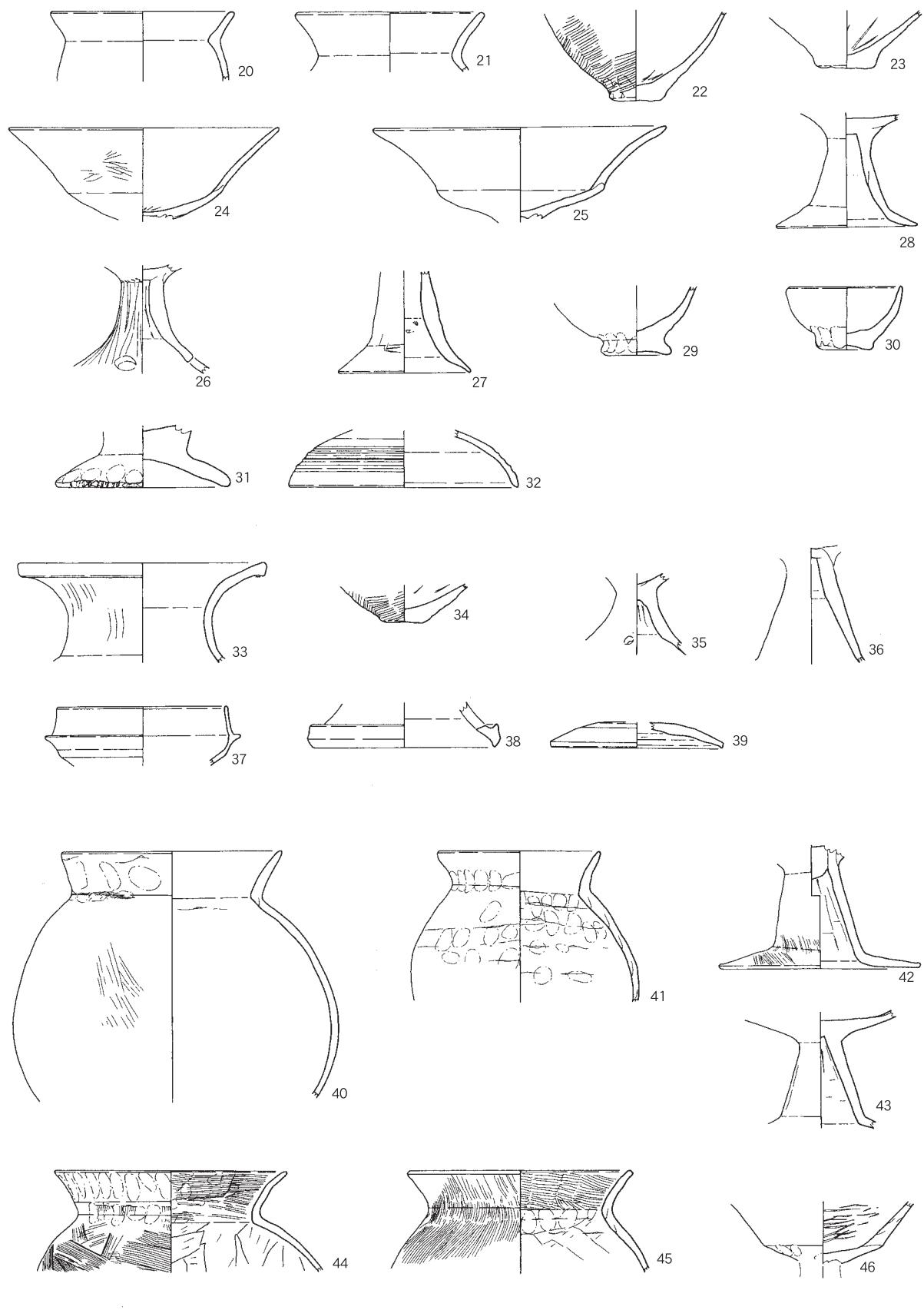
これらの状況から、第1次調査地は僅かな微高地にも拘らず弥生時代前期から奈良時代にかけて生活の営みがあったものと考えられる。また、遺物包含層第3層関係の形成は、和田遺跡周辺においても耕地開発が鎌倉時代後半期であったものと判断できるものである。

表3 第1次調查 各層序別遺物數量



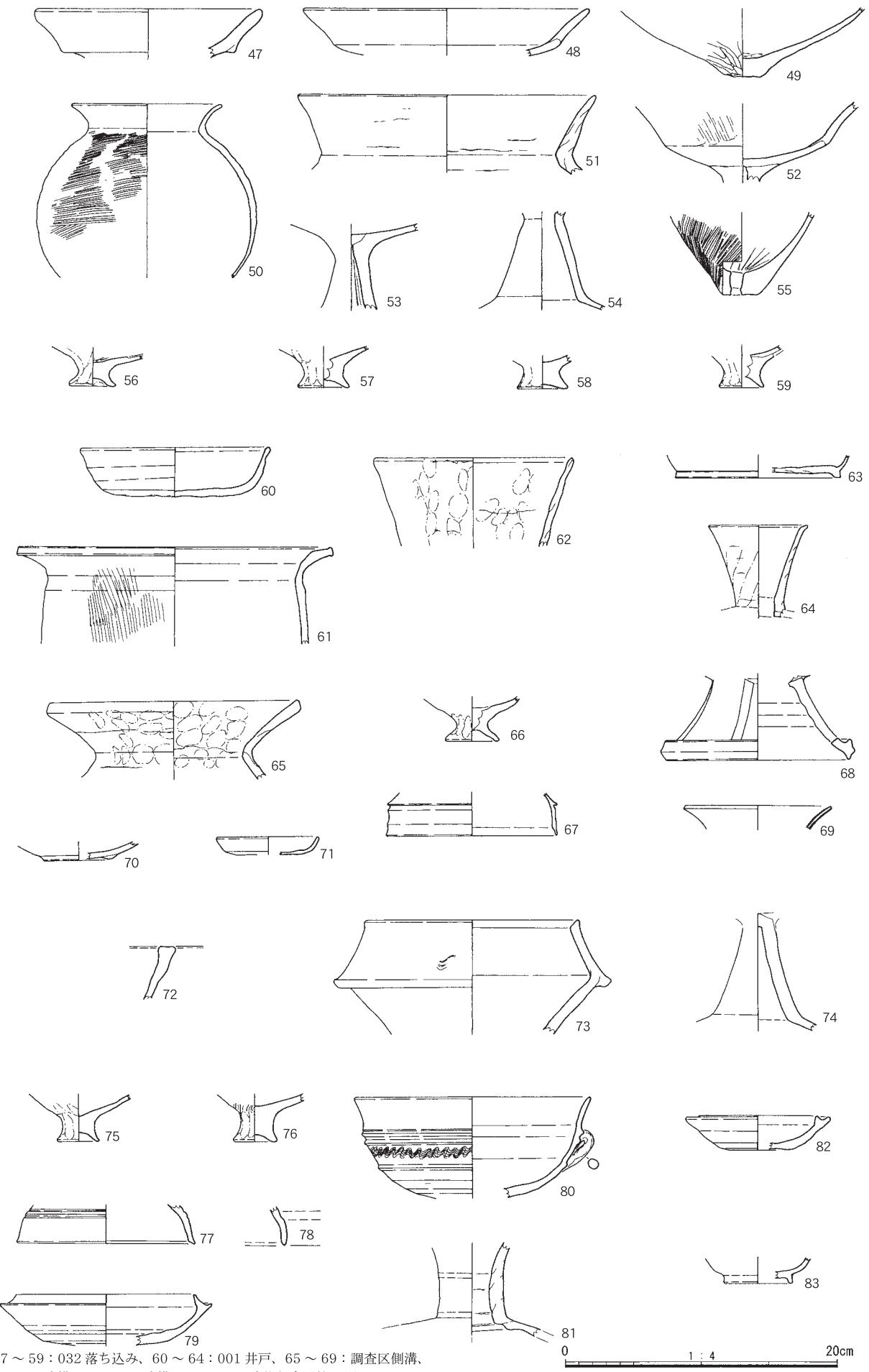
1～7：018 井戸、8：037 小穴、9：209 土坑、10～19：205 自然路

図 21 第 1 次調査 出土遺物実測図 1



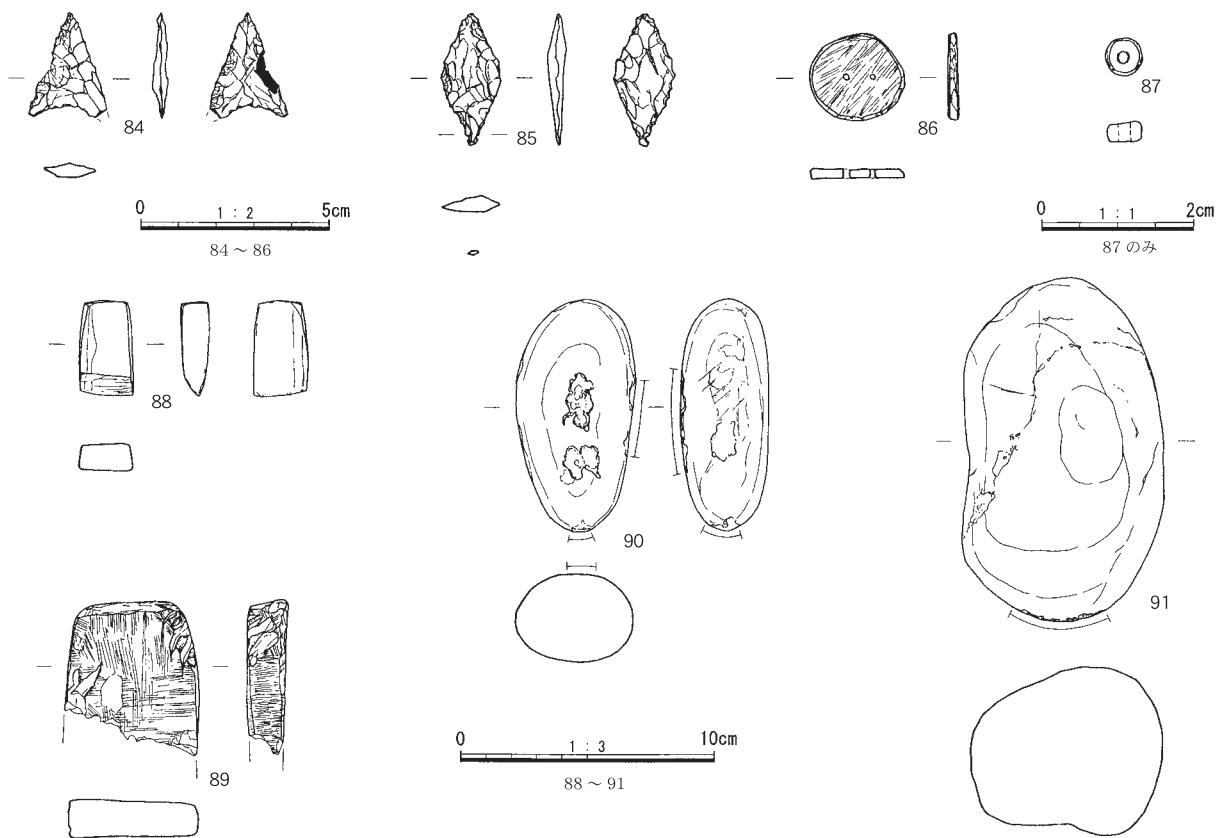
20～32：205 自然流路、33～39：遺物包含層第4層、40～43：011 井戸、
44・45：005 井戸、46：004 井戸

図 22 第1次調査 出土遺物実測図 2



47～59：032 落ち込み、60～64：001 井戸、65～69：調査区側溝、
70：K7 遺構、71：K11 遺構、72～83：遺物包含層第3層

図 23 第1次調査 出土遺物実測図 3



84・87・89：遺物包含層第4層、85：遺物包含層第3層、
86・90：調査区側溝、88・91～93：205自然流路

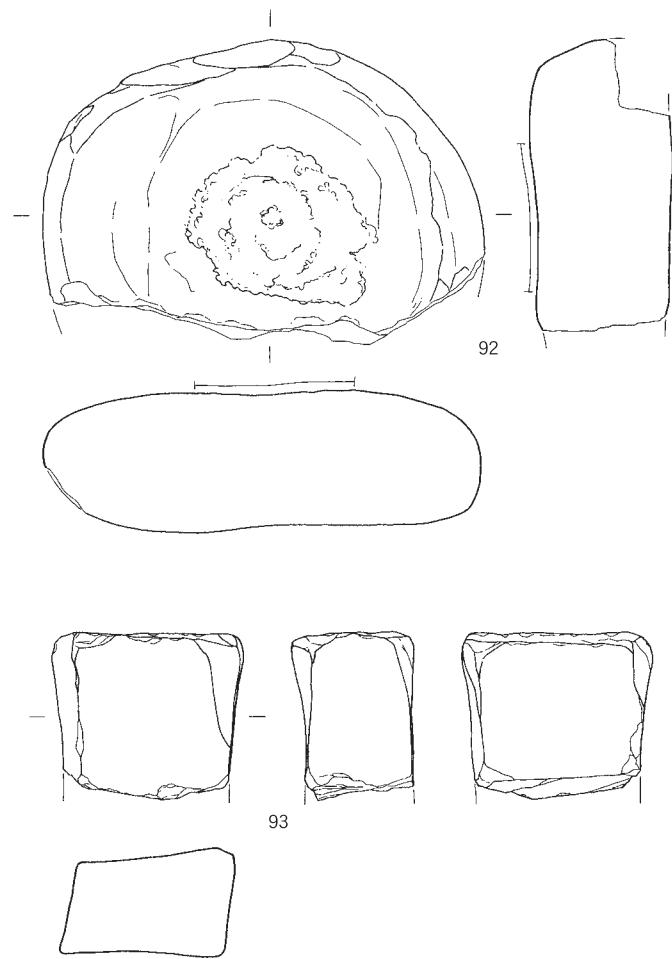


図24 第1次調査 出土遺物実測図4

第2節 第2次調査の成果

調査前の現況は、水田である。この水田の中央を流れる用水路の北東側を1区・2区、南西側を3区・4区と呼称して調査を実施した。遺構検出に当たっては、一部に遺物包含層も堆積していたが、殆どの範囲において後世の削平を受け消滅したと考えられる。遺構検出面直上の旧水田耕作土(第2層)からは、多くの遺物が出土した。

本調査では調査区の中央に現存の用水路が北から南に流れ、この北東側と南西側では遺構の在り方が大きく異なることが判明した。水路より北東側(1区・2区)では弥生時代～古墳時代にかけての自然流路が検出され、南西側(3区・4区)では弥生時代前期の土器廃棄土坑、弥生時代終末期の素掘り井戸、古墳時代の掘立柱建物・土器埋設土坑、奈良時代の井戸など直接生活に関わる遺構を検出した。なお、遺構全体平面図(図26)は、レイアウトの加減で1区・2区の第2遺構面と3区とを合わせて掲載する。

1 1・2区

(1) 調査の概要 (図26)

調査面積は、1区と2区を合わせて1,504m²である。遺構検出面は、標高約1.0mである。

調査は、2面を実施した。第2遺構面では自然流路を2条検出し、第1次調査で検出した205自然流路や上位層の032落ち込み遺構もしくは遺物包含層第4層に対応すると考えられる。

第1遺構面で検出した主要な遺構には、土坑2基(遺構2003・遺構2005)がある。調査区中央の2010自然流路の上位で2基ともに検出した。また、1区南端・2-2区北端では奈良時代の溝状遺構・土坑列などがある。

(2) 基本層序と遺構面 (図25、写真23)

基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第0層：第0層は、水田耕作土の盛土である。

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土(第1a層)黄灰色のシルト～細砂と床土(第1b層)黄褐色～灰黄色のシルト～細砂に細分できる。

第2層：第2層は、図25及び写真23に出てこないが、ほぼ調査区全域にみられる。調査で



写真23 第2次調査2-1区 調査区西壁断面土層 (東から)

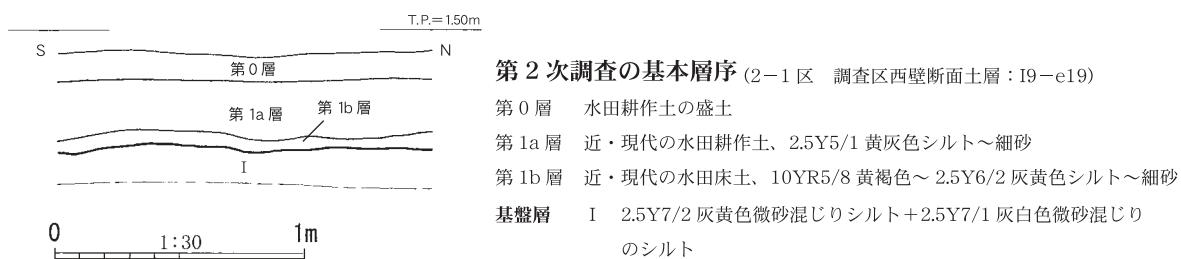


図25 第2次調査2-1区の基本層序 (調査区西壁断面土層: I 9-e19)

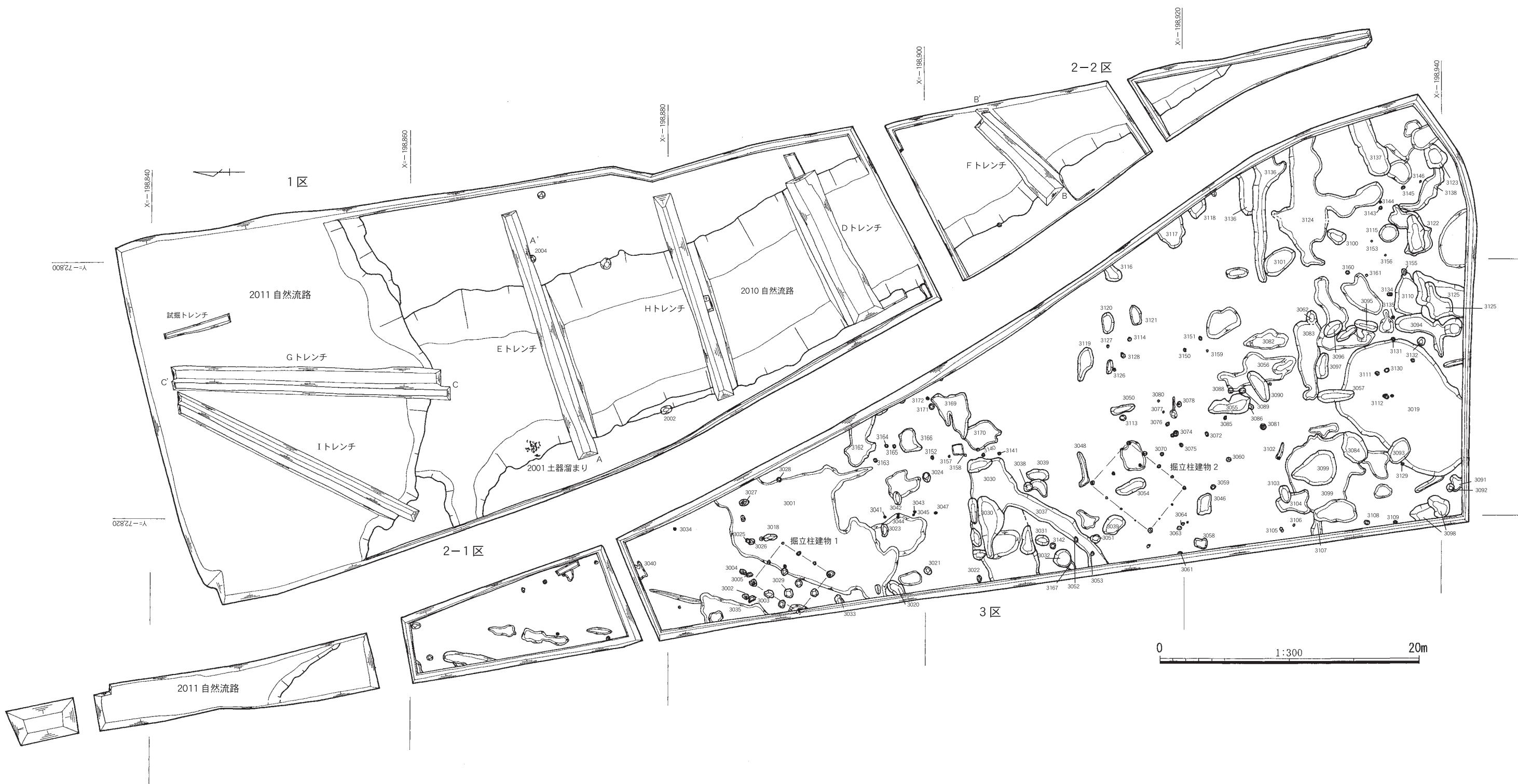


図 26 第2次調査1・2区 第2遺構面、3区 遺構全体平面図

は近世以降の水田耕作土と考えられていた堆積層である。但し、出土遺物は、弥生時代終末期・古墳時代後期の遺物が主体となる。

基盤層

I層：灰黄色+灰白色の微砂混じりシルトである。

遺構検出面（図26）

掘削は、調査区の全域にわたり第2層以外の遺物包含層の存在が僅かしか認められなかつたため、地表面から遺構検出面上の10cmまでをバックホウを用い掘削し、これより下位層は遺構面養生層(第2層)として人力で遺構検出面まで掘り下げた。遺構面養生層掘削後に遺構を検出し、手順に従つて遺構を掘削した。

2条の自然流路を検出した1区・2区については、調査区のほぼ全域に自然流路の範囲が及ぶため、範囲確認及びその下位層の土層堆積状況を確認するためにトレンチを東西方向に4箇所(D・E・F・Hトレンチ)、南北方向に2箇所(G・Iトレンチ)設定して断面土層図を作成した。なお、自然流路より下位層の堆積層確認に至つては、遺構検出面から約1.2m下で砂層となり、崩落の危険を伴うため砂層の上層であるシルト～粘土層で掘削を断念した。

(3) 各遺構の調査成果

以下、主な遺構について古い時代順に記述する。

1) 第2遺構面の検出遺構（図26～28・34・35・37・38、表7、写真図版7・8・20・23）

弥生時代の遺構は、中期及び終末期の弥生土器が出土した2010自然流路を検出した。また、2010自然流路の西側肩口で2001土器溜まりを検出しておらず、出土遺物から弥生時代終末期にかけて埋没したものと考えられる。

2010自然流路（図26～28・34・35・37・38、表7、写真図版7・8・20・23）

2010自然流路は、1・2区のほぼ全域に延びる。検出するに当たって、下位層の確認のため東西方向のトレンチを4箇所(D・E・F・Hトレンチ)、南北方向のトレンチを1箇所(Gトレンチ)設定した。2010自然流路は、2-2区の南東側から1区・2-1区の北北西側に延び、検出延長約68mを測る。北側で2011自然流路と重複し、2011自然流路より古い。幅員11～14.5m、深さ0.33～0.58mを測る。埋土は大きく3～4層を検出した。色調及び土質は、南側(Fトレンチ)では主に5YR5/1～5YR6/1褐灰色シルト質である。肩となる基盤層は10YR7/8黄橙色シルト質である。西側の肩口I9-d18では、狭小な範囲で2001土器溜まりを確認した。

遺物は、最下層・下層と中層・上層で組成が異なる。最下層・下層では弥生時代中期の紀伊IV-1様式が主体となる。それに対して、中層・上層では、弥生時代終末期の遺物が主体となる。下位層・上位層共に、1区南端H9-x・y24・25～I9-a24・25にかけて中期の遺物量が多い傾向にある。また、1区上層において古墳時代の須恵器1点、2-2区上層において古墳・奈良時代の須恵器19点、古墳時代の土師器12点(2010自然流路中層・上層の出土遺物全体の2.0%)、下層においても古墳・奈良時代の須恵器9点(2010自然流路最下層・下層の出土遺物全体の3.1%)が出土したが、上位の第2層や2-2区2021溝状遺構・土坑列の掘り残しと考えられる。

最下層・下層の遺物は、紀伊IV-1様式の広口壺(95～99)・高坏(100)・鉢(103)・把手付鉢(104)・器台(105)、サヌカイト製の石鏸(178)、緑泥片岩製の石庖丁(185)などが出土した。

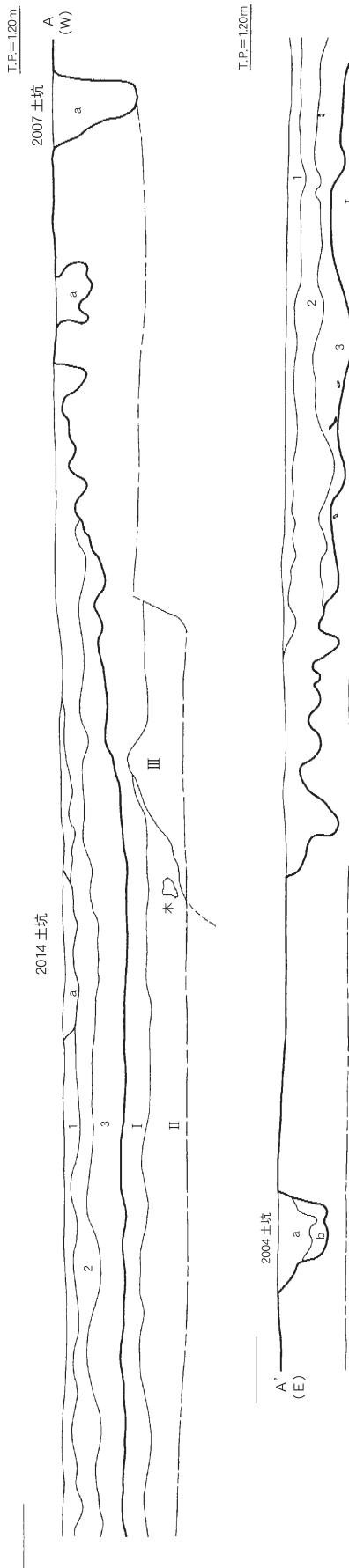


図 27 第 2 次調査 1・2 区 2010 自然流路 E レンチ断面土層図

2010 自然流路

1 5Y5/1 褐灰色シルト～5YR6/1 褐灰色シルト
2 10YR6/1 褐灰色シルトと 10YR8/6 黄褐色シルトの混層
3 N6.5/0 灰色シルト
4 2 層に同じであるが、混層複合が黄褐色シルトの方が多い

基盤層

I 10YR7/8 黄褐色シルト、10YR6/1 褐灰色シルトの 10～15cm 大のブロックを含む
II N6.5/0 灰色シルト～N7/0 灰白色シルト～粘土

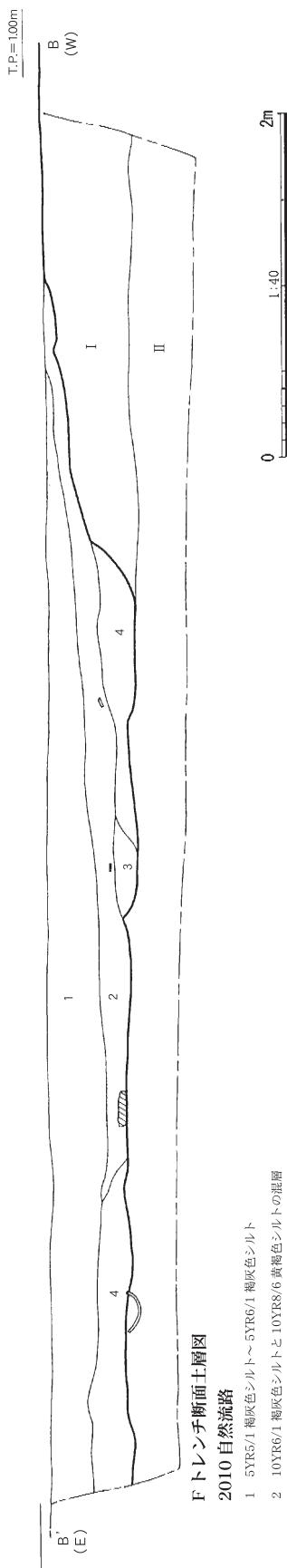


図 28 第 2 次調査 2・2 区 2010 自然流路 F レンチ断面土層図

中層・上層の遺物は、紀伊 I 様式の蓋(117)、紀伊 II 様式の紀伊形甕、紀伊 IV-1 様式の広口壺(107・109)・細頸壺・甕(112～114)・高坏(115・116)、弥生時代終末期の広口壺(108・110)・二重口縁壺(111)・高坏・鉢、サヌカイト製の石鏸(181)・スクレイパー(182)、砂岩製の敲石・凹石(192)、緑泥片岩製の敲石・磨石などが出土した。

さらに、2010 自然流路の堆積層より下位で紀伊 III-3 様式の広口壺(94)が出土した。このことは、調査で明らかにできていないが、2010 自然流路の下位に重複する自然流路の存在を示唆するものである。

2001 土器溜まり(図 26・35、写真図版 8・20)

2001 土器溜まりは、2010 自然流路の北端西肩 I

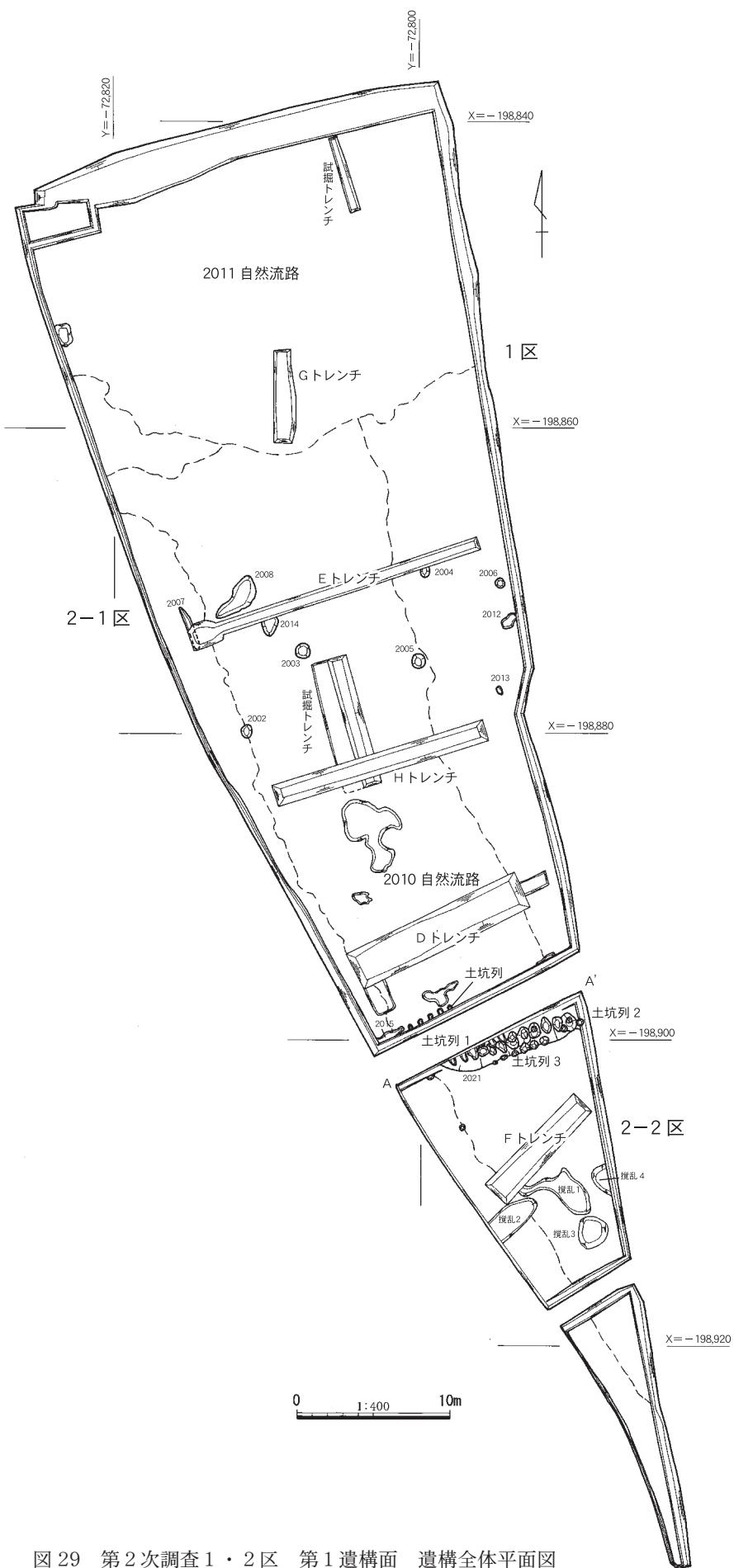


図 29 第2次調査1・2区 第1遺構面 遺構全体平面図

9-d 18 に位置し、東西約 2.0m・南北約 1.0m の範囲に集中する。遺物は、流路の西側から投棄された状態で出土した。遺物には、僅かに弥生時代中期の紀伊IV-1 様式の壺 3 点を含むものの、大半が弥生時代終末期の広口壺(118・119)・甕(120)・高環(121)などの土器(小計 604 点)、敲石(191) 2 点で占められる。

2) 第1 遺構面の検出遺構(図 29・35~38、写真図版 9・10・21~23)

当項では、調査結果により 2010 自然流路の堆積層より上位で検出した遺構について、便宜上第1 遺構面での検出遺構として記述する。

2005 土坑(図 30、写真図版 10)

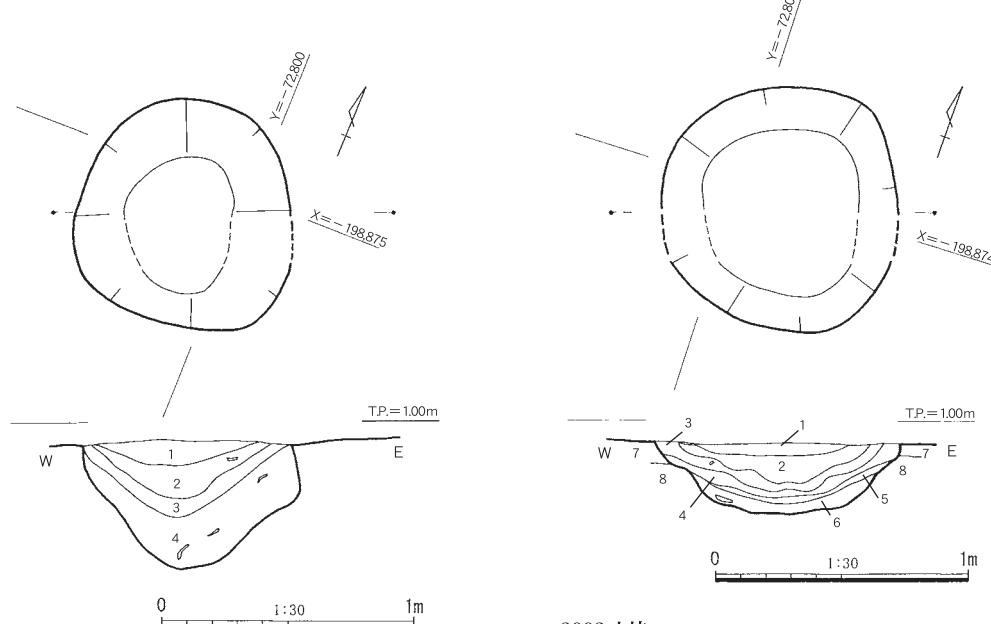
2005 土坑は、調査区の中央東寄り H 9-y19・I 9-a19 に位置し、短軸東西 0.84 m・長軸南北 0.90 m のやや歪な円形を呈する。2005 土坑は、2003 土坑同様に遺物包含層第 2 層の除去面で検出した。2010 自然流路の埋没後に、上位に掘削された土坑である。断面形は、歪な U 字形を呈し、残存の深さは 0.51 m を測る。埋土は、レンズ状に堆積し、4 層を検出した。色調及び土質も 2003 土坑と酷似する。なお、上位から 3 層目に厚さ 8 cm の炭層が堆積し、4 層目に 3~5 cm の長さの炭化物(炭片)が少量入る。一見、弥生時代終末期の竪穴建物の炉跡のような感がある。そのため周辺を精査したが、竪穴建物の炉跡となる確証には至らなかった。遺物は、細片であるが、弥生時代終末期の土器 43 点が出土した。

これらの遺物と 2003 土坑との類似性から、2005 土坑は 2010 自然流路の埋没後、然程時間を置かない弥生時代終末期に帰属するものと考えられる。

2003 土坑(図 31、写真図版 10)

2003 土坑は、調査区の中央 I 9-b・c19 に位置し、短軸東西 0.93 m・長軸南北 1.00 m のほぼ円形を呈する。2003 土坑は、2005 土坑同様に遺物包含層第 2 層の除去面で検出した。

2010 自然流路の埋没



2005 土坑(H 9-y19・I 9-a19)
1 2.5Y6/2 灰黄色シルト、マンガン粒を多く含む、鉄分沈着
2 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト、土器を少量含む
3 2.5Y2/1 黒色粘質土、縮まり弱い、炭化物を多く含む
4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト、縮まり強い

- 2003 土坑(I 9-b・c19)
1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、マンガン粒を少量含む、鉄分沈着
2 2.5Y3/2 黑褐色粘質シルト、縮まりやや強い
3 2.5Y2/1 黑色粘質土、縮まり弱い、炭化物を多く含む
4 2.5Y2/2 黑褐色粘質土、縮まりやや強い
5 2.5Y2/1 黑色粘質土、縮まり弱い、炭化物を多く含む
6 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、縮まりやや弱い
2010 自然流路
7 2.5Y5/6 黄褐色シルト + 10BG7/1 明青灰色シルト
8 10BG6/1 青灰色シルト

図 30 第2次調査1区 2005 土坑実測図

図 31 第2次調査1区 2003 土坑実測図

後に、上位に掘削された土坑である。断面形は、浅いU字形を呈し、残存の深さは0.28mを測る。埋土は、レンズ状に堆積し、6層を検出した。色調及び土質は、全体的に暗灰色～黒褐色を呈し、シルト質～粘質土である。上から3層目と5層目に炭層が認められ、一見、弥生時代終末期の竪穴建物の炉跡のような感がある。2005土坑同様、この土坑の周辺を精査したが竪穴建物に伴う柱穴や壁溝を確認するには至らなかった。遺物は、細片であるが、弥生時代終末期の土器11点、弥生時代終末期もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器5点、縄蓆文のある陶質土器1点、須恵器壺1点が出土した。

遺物の内、縄蓆文のある陶質土器と須恵器は、2003土坑での出土層位が不明である。出土層位が不明とはいえ、縄蓆文のある陶質土器は2011自然流路下層から5点、上層から17点が出土したことと関係を有するものと考えられる。同一個体かどうかは断定し難いが、埋没過程における時間的な併行関係を有するものである。

これらの遺物と層序関係から、2003土坑は2010自然流路の埋没後、然程時間を置かない弥生時代終末期に帰属し、古墳時代前・中期にかけて埋没した可能性がある。

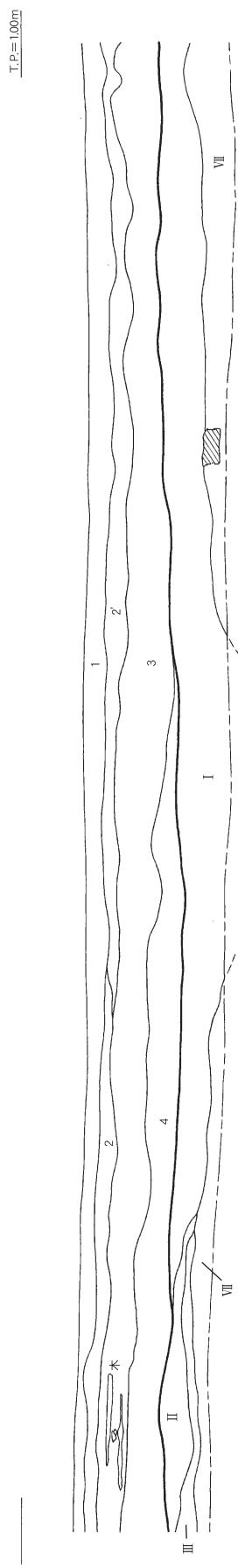
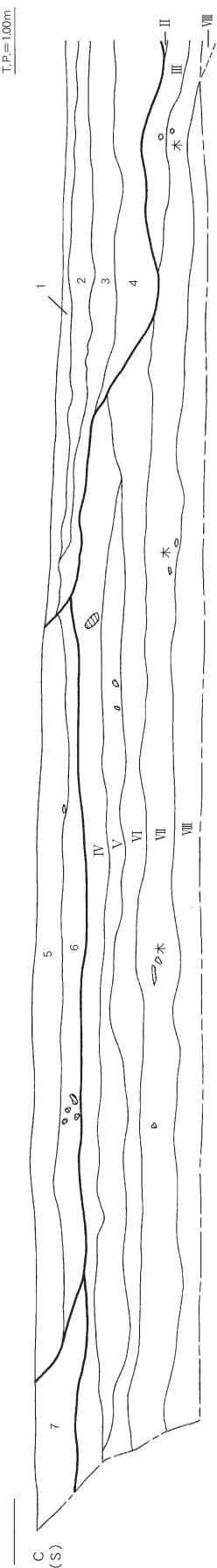
2011自然流路（図32・35～38、表7、写真図版9・21～23）

2011自然流路は、1・2・3区の北端を東西に延びる。検出するに当って、下位層の確認のため南北方向のトレンチを2本(G・Iトレンチ)設定した。第1次調査の205自然流路と繋がるものと考えられ、205自然流路と合わせて南北幅員約27m、残存の深さは最も深い部分で0.55～0.69mを測る。第2次調査では、この南肩を検出したことになる。3区を含めた東西検出延長約38m(205自然流路と合わせて南北検出延長約64m)を測る。埋土は、基本的に3層に分層でき、上層から順に、10YR 6/3にぶい黄橙色シルト(1・2層)、N 5/0灰色粘土(3層)、10G 4.5/1暗緑灰色シルト～粘土(4層)である。平面の検出状況及び断面土層から2011自然流路には、新旧が存在することが判明した。上位(新)の堆積層は1～4層、下位(旧)の堆積層は5・6層となる(図32)。また、新旧の2011自然流路は、重複関係から2010自然流路(7層)より新しい。

遺物は、2011自然流路の新(上層・中層)旧(下層)で組成が異なる。下層では、弥生時代前期・中期の遺物23点(2011自然流路下層の出土遺物全体の4.7%)、多くの弥生時代終末期の遺物159点(同32.8%)と共に古墳時代の遺物303点(同62.5%)が主体となる。その中でも、古墳時代前期・中期が主体となる。上層・中層では、弥生時代前期・中期の遺物26点(2011自然流路上層・中層の出土遺物全体の1.6%)、多くの弥生時代終末期の遺物503点(同31.6%)と共に古墳時代の遺物1,059点(同66.6%)が主体となる。

下層の遺物は、弥生時代の紀伊III-3様式の広口壺(123)、紀伊IV-1様式の直口壺(124)・高坏(129)、弥生時代終末期の甕(126)、砂岩製の敲石(187)、古墳時代の土師器二重口縁壺(125)・甕(127・128)・高坏(130～132)、須恵器高坏(133)などがある。高坏(132)は、搬入品と考えられるが、地域を特定できていない。下層の遺物の内容から判断して、弥生時代終末期以降に、2011自然流路の流向によって下位層の2010自然流路が浸食されたものと考えられる。

中層・上層の遺物は、弥生時代終末期の広口壺(134・135)・二重口縁壺(136)・甕(138・139)・高坏(141・142)、サヌカイト製の石鏃(179・180)・スクレイバー(183・184)、砂岩製の敲石(188)・縄泥片岩製の敲石(190)など、古墳時代の土師器二重口縁壺(137)・甕(140)・高坏(143～147)、須恵器坏身(151)・坏蓋(148～150)・罐(152)・高坏(153)などがある。縄蓆文のあ



Gトレンチ断面土層図

2011自然流路

- 1 10YR6/3にぶい、黄橙色シルトと10YR7/6明黄褐色シルトの混層
- 2 10YR6/3にぶい、黄橙色シルトと10YR6/3にぶい、黄褐色シルトが量的に多い
- 2' 基本的に2層と同じであるが、2層より10YR6/3にぶい、黄褐色シルトが量的に多い
- 3 NS/灰色粘土
- 3' 5PB4/1暗緑灰色微砂混じりのシルト～粘土、基盤層1より暗色
- 4 10G4/1暗緑灰色シルト～粘土
- 5 2.5Y6/6明黄褐色シルトと5Y7/1灰白色シルトの混層
- 6 5層と基本的に同じであるが、5Y7/1灰白色シルトの方が量的に多い、

上層と割合が逆転する

2010自然流路

- 7 NS5/0～6/0灰色シルトと10YR6/6明黄褐色シルトの混層

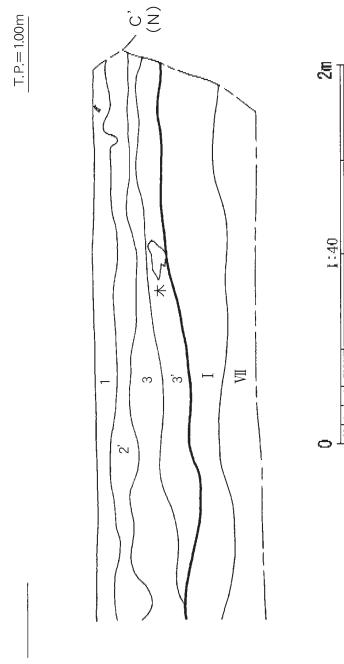


図32 第2次調査2-1区 2011自然流路Gトレンチ断面土層図

る陶質土器は2011自然流路下層から5点、上層から17点が出土した。何れも同一個体の可能性が高い。

2021溝状遺構・土坑列（図33・36、表4、写真図版10・22）

2021溝状遺構は、2-2区の北端に位置し、土坑列と重複する。土坑列は、1・2-1区の南端と2-2区の北端に位置する。遺構の重複関係から、2021溝状遺構が古く、土坑列が新しい。遺物（表7-層序要素7）は、飛鳥時代から奈良時代にかけての土師器・須恵器が442点、黒色土器（161）・瓦器梶（162）が19点出土した。調査では明確にできていないが、黒色土器・

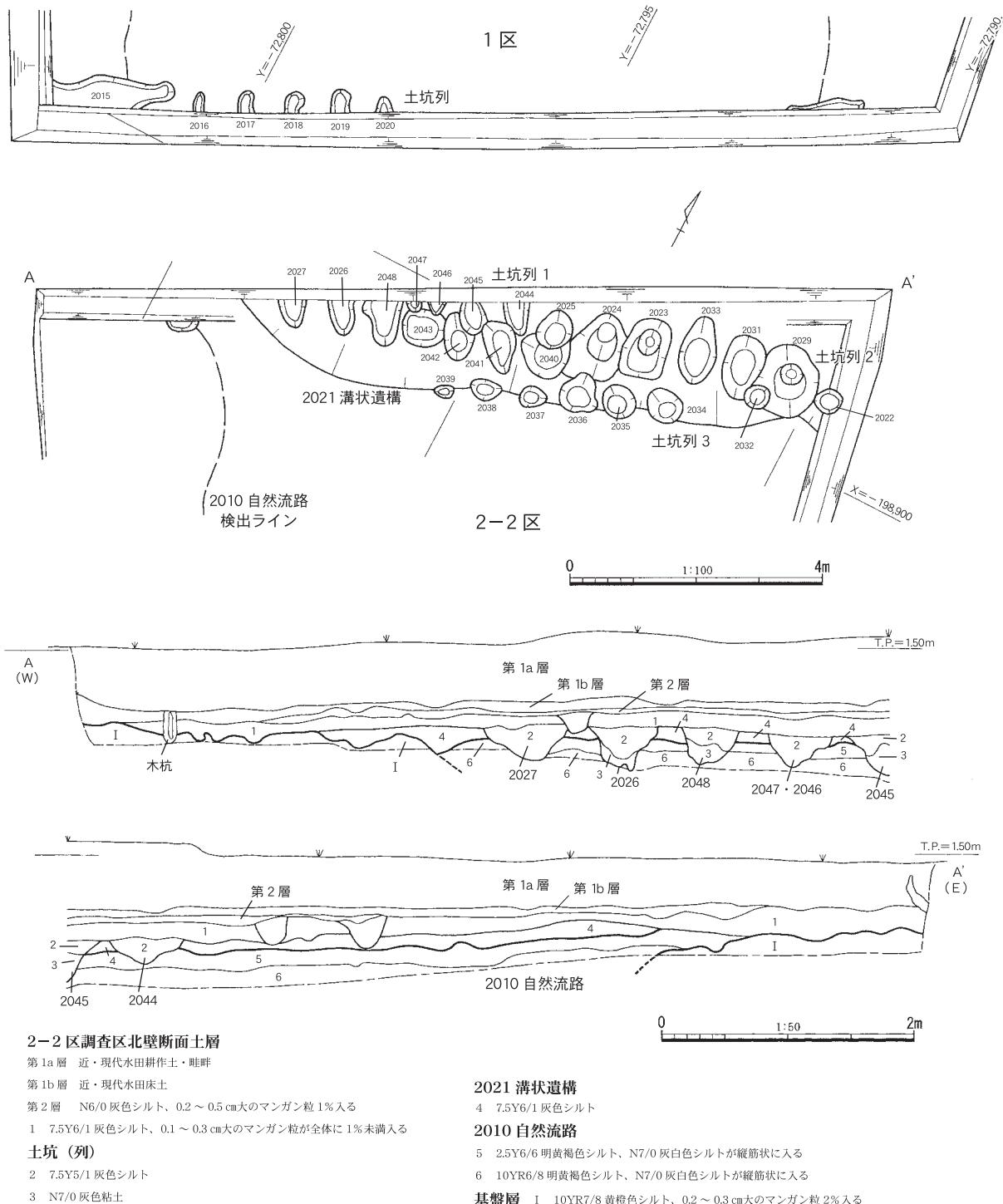
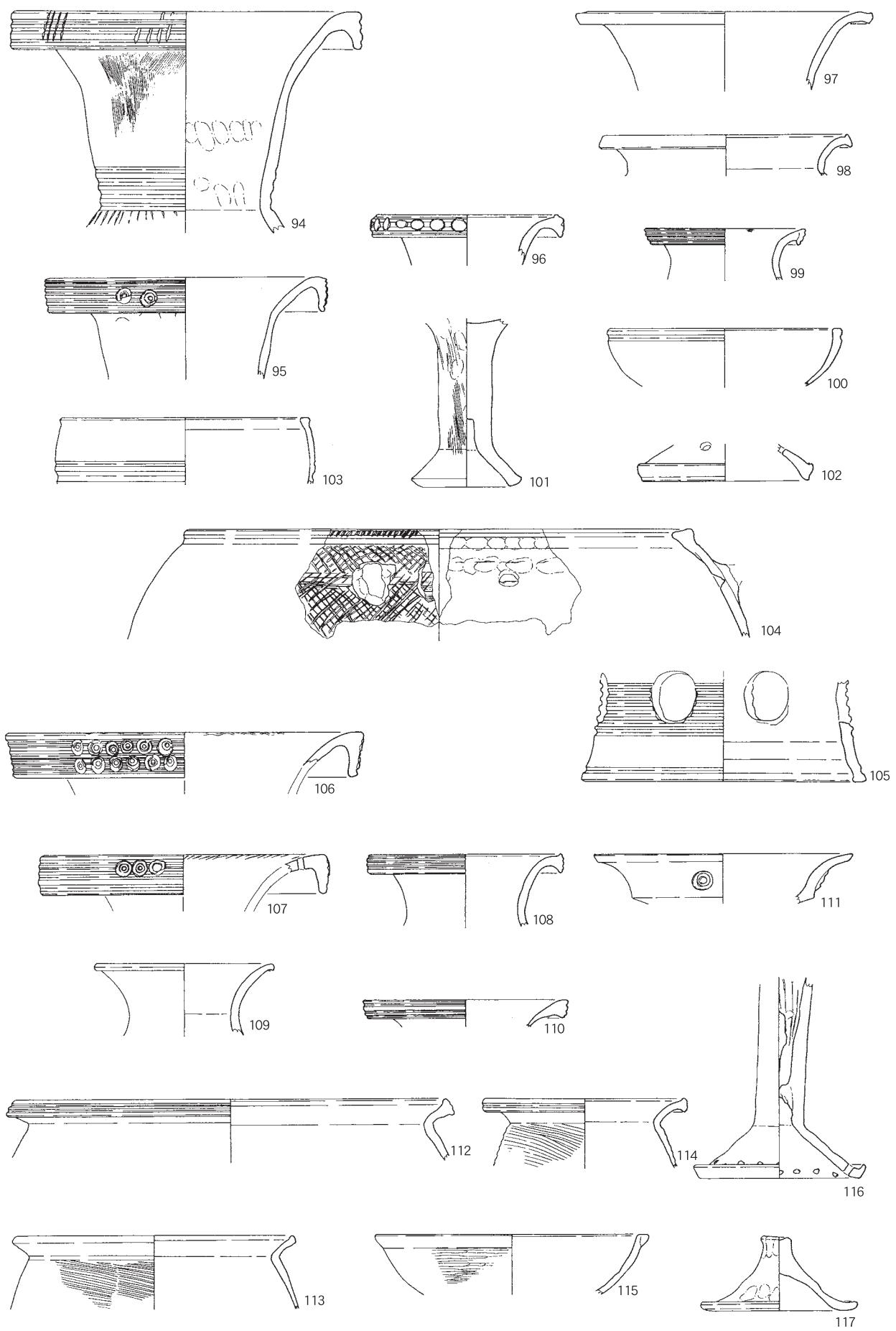


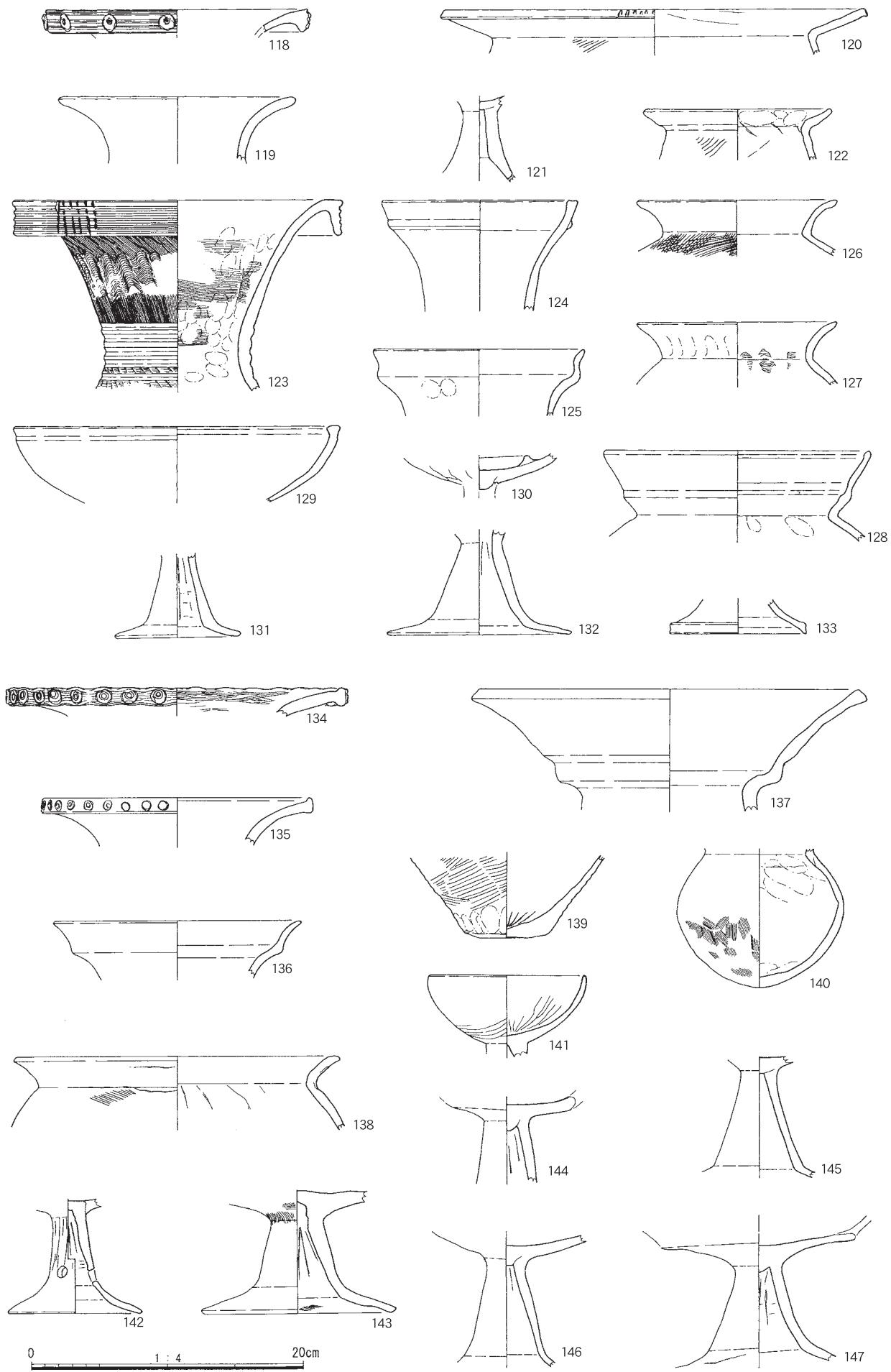
図33 第2次調査1・2-2区 2021溝状遺構・土坑列実測図



94 : 2010 自然流路より下位層、95 ~ 105 : 2010 自然流路下層、
106 : 2010 自然流路中層、107 ~ 117 : 2010 自然流路上層・層位無し

0 1 : 4 20cm

図 34 第2次調査1・2区 出土遺物実測図 1



118～121：2001 土器溜まり、122：2005 土坑、123～133：2011 自然流路下層、134～147：2011 自然流路上層・層位無し

図 35 第2次調査1・2区 出土遺物実測図2

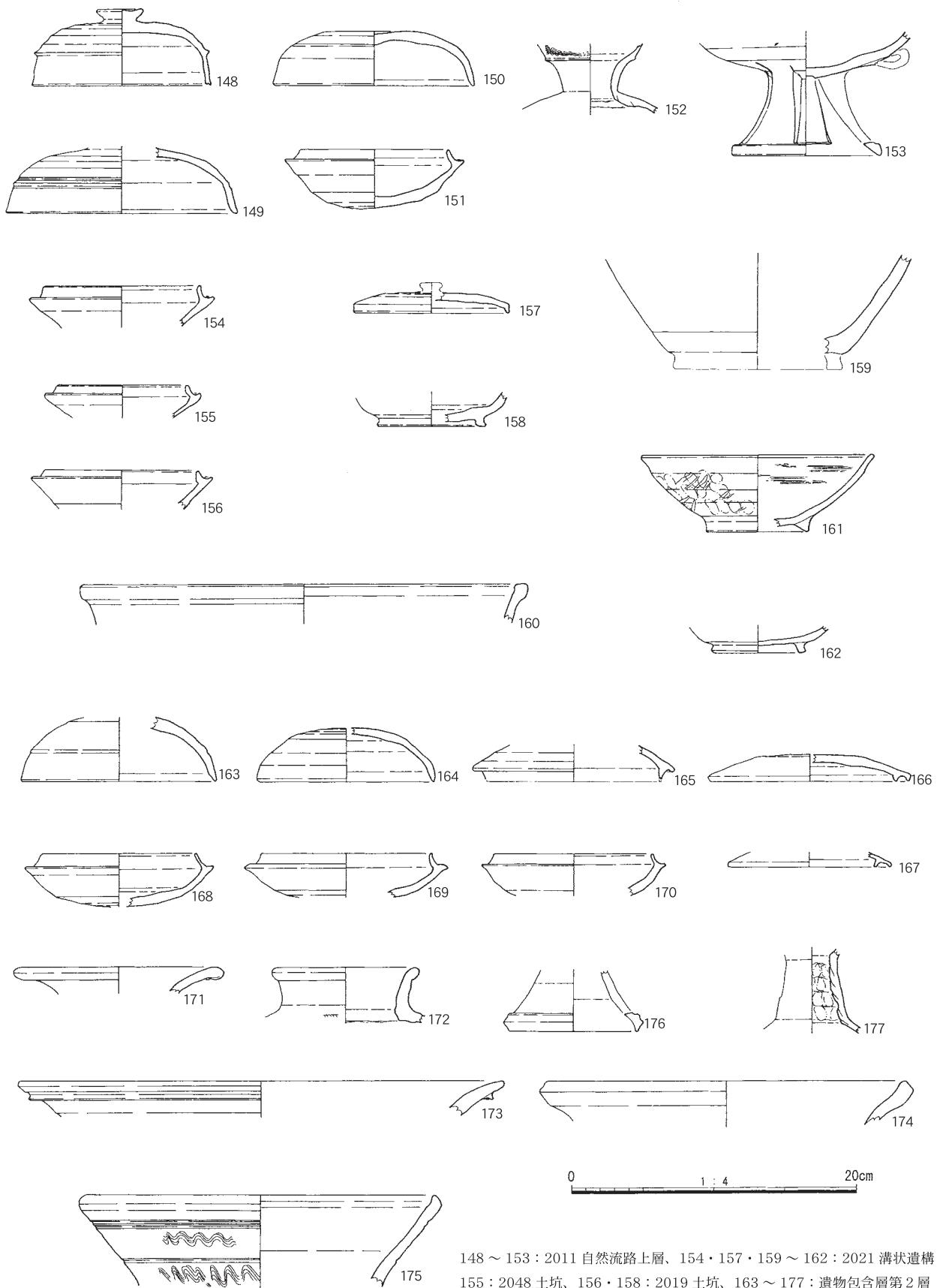


図 36 第2次調査1・2区 出土遺物実測図3

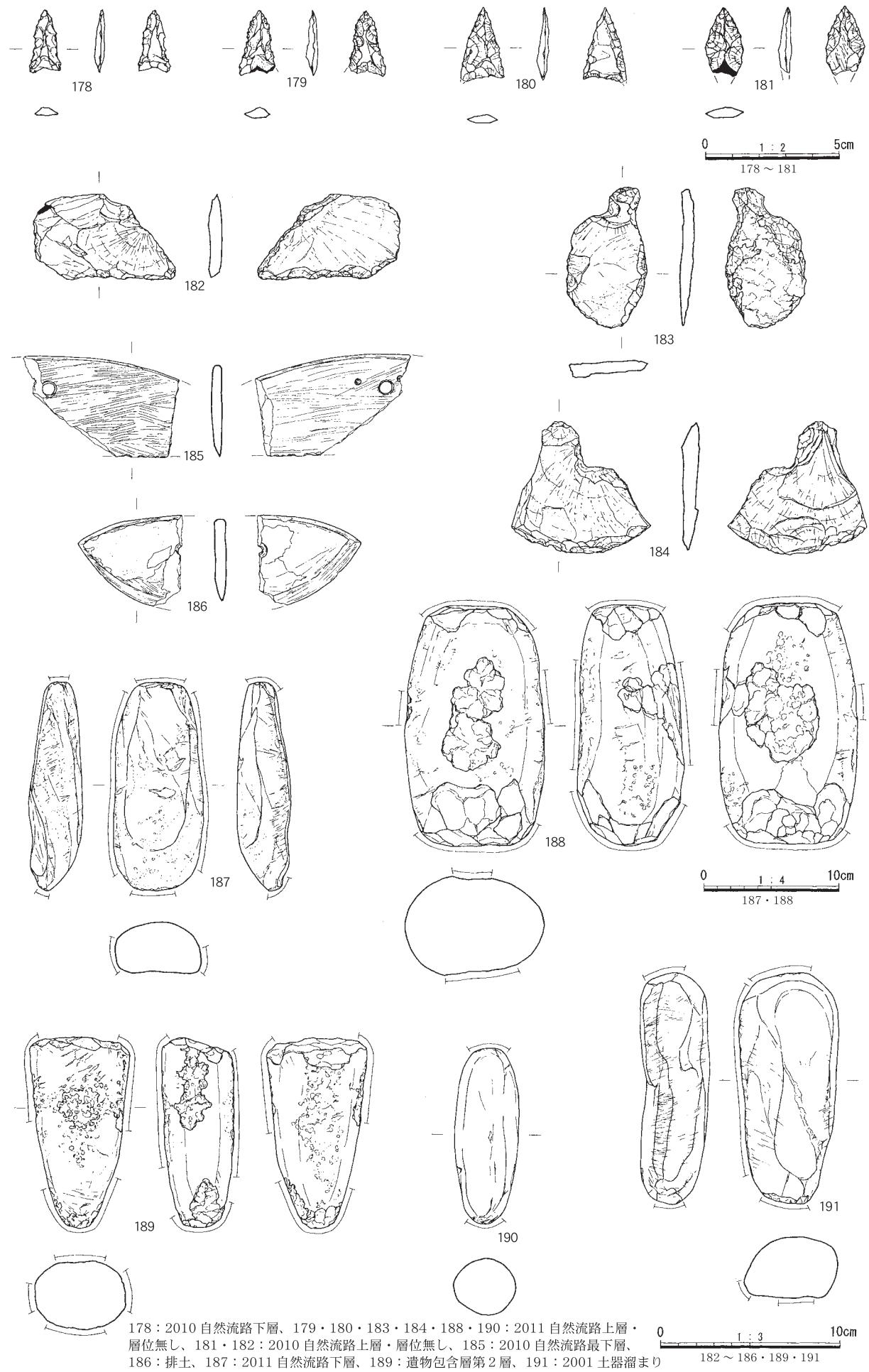


図37 第2次調査1・2区 出土遺物実測図4

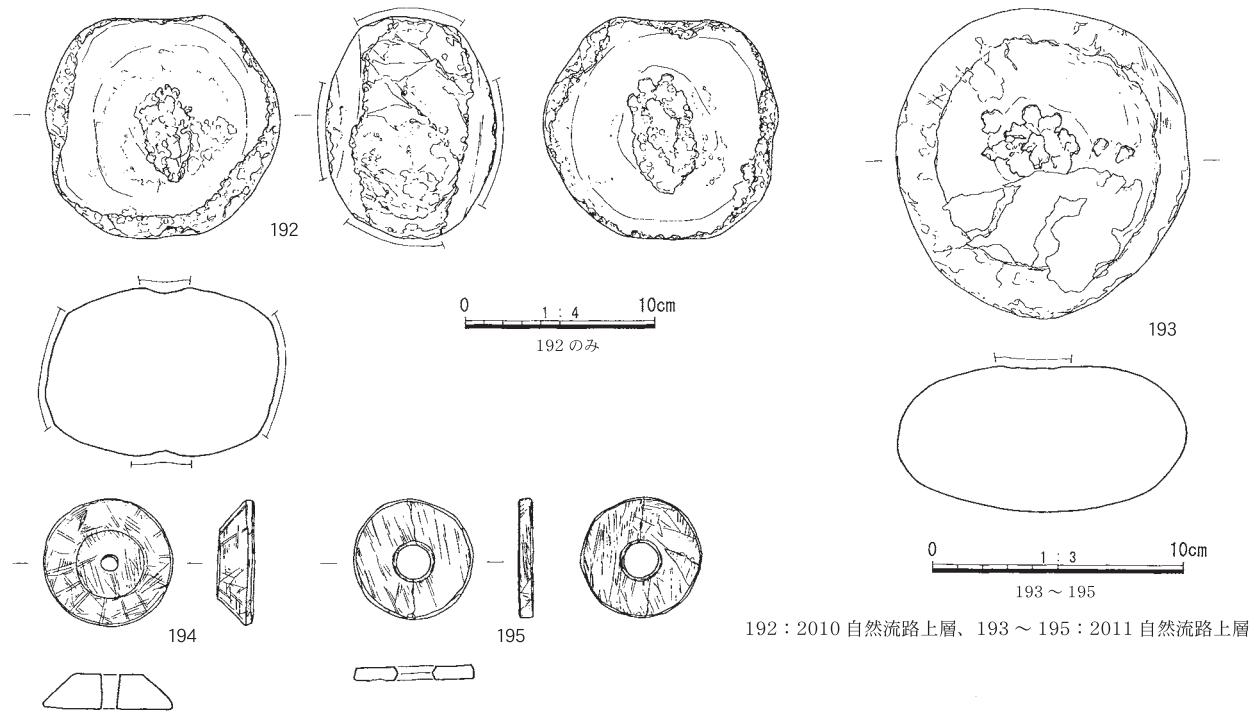


図 38 第2次調査1・2区 出土遺物実測図5

表4 第2次調査1・2-2区 土坑列一覧

遺構番号	地区			土坑(小穴)番号	平面形と特徴	断面形と特徴	規模(m)				備考 (遺構の重複関係・埋土等)	
		中区画	小区画				最小	最大	深さ	検出延長		
土坑列	1区	H9 I9	y25 a25	2016~2020 (西) (東)	歪な楕円形	断面図なし 不明	0.20 × 0.35以上	0.35 × 0.40以上	0.07~0.14	3.30	東北東 — 西南西	南側は側溝で不明、調査地外に延びる。
土坑列1	2-2区	H9 H10	x25 x · y1	2025 · 2026 · 2027 (東) (西) 2044~2047 · (2048?)	ほぼ円形~ 歪な楕円形	断面図なし 不明	0.21以上 × 0.26	0.53 × 0.62	0.04~0.20	4.20	東北東 — 西南西	北側は側溝で不明、調査地外に延びる。 2048は、南北に大きいため、土坑列2の方にも入る可能性有り。 土坑列1 · 2 · 3の深さは、各遺構検出面レベルからの深さ。
土坑列2	2-2区	H9 H10	w · x25 w · x · y1	2028 · (2029) · 2031 · 2033 · 2023 · (東) 2024 · 2040~2043 · (2048?) · (西)	歪な円形~ 歪な楕円形	皿形 逆台形	0.55 × 0.68	1.01 × 1.15	0.11~0.31	6.70 (7.50)	東北東 — 西南西	2028年内に2029がある。 2048は、南北に大きいため、土坑列1の方にも入る可能性有り。 土坑列1 · 2 · 3の深さは、各遺構検出面レベルからの深さ。 層位は1層、土色は異なる。
土坑列3	2-2区	H9 H10	w · x25 w · x · y1	(2022 · 2032?) · 2034~2039 (東) (西)	(ほぼ円形) ~ 歪な楕円形 歪な五角形	断面図なし 不明	0.30 × 0.36	0.63 × 0.68	0.36~0.68	4.10 (6.40)	東北東 — 西南西	2022 · 2032は、土坑列の並びから少し離れているため、土坑列3に入る可能性有り。 (6.40m)は、2022 · 2032を含んだ場合の延長。 2034~2039は、2021の南側上端の肩に土坑の南側がかかる。

瓦器碗は、上位層からの混入と考えられる。

遺物包含層 第2層関係 (図 36 · 37、表 7、写真図版 22 · 23)

遺物包含層第2層関係の堆積層は、調査区1 · 2区のほぼ全域に認められる。遺物(小計2,150点)は、弥生時代前期 · 中期31点(14.4%)、終末期804点(37.4%)、古墳時代1,297点(60.3%)、飛鳥 · 奈良時代11点(0.5%)、鎌倉時代5点(0.2%)、江戸時代2点(0.1%)である。遺物の主体は古墳時代後期であり、須恵器坏身(168~170) · 坏蓋(163 · 164) · 高坏(176) · 甕(173 · 175)などがある。他に、飛鳥 · 奈良時代の須恵器坏蓋(165~167) · 甕(174)などがある。

2 3区

(1) 調査の概要 (図 26、写真図版 11)

3区も調査前の現況は、水田である。調査面積は $1,549\text{m}^2$ である。遺構検出面は、1・2区同様に標高約1.0mである。

1区・2区と南北の水路を隔てた3区では、弥生時代前期の土器廃棄土坑、終末期の素掘り井戸、古墳時代の掘立柱建物・土器埋設土坑、奈良時代の井戸などを検出した。今次の調査全体を通して最も遺構密度の高い地区である。

基本的に現床土直下が遺構検出面となるが、一部にN7/0灰白色微砂混じりシルト層の堆積が確認できる箇所もある。

(2) 基本層序と遺構面 (図 39、写真 24)

基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土及び畦畔に係る盛土(第1a層)黄灰色のシルト～細砂と床土(第1b層)灰黄色のシルト～細砂に細分できる。

第2層：一部でN7/0灰白色微砂混じりシルト層の堆積が認められるが、層厚を成さない程度である。

第3層：遺物の取り上げの中に第3層と記述されたものが少数存在する。弥生時代から古墳時代の遺物を主体とするが、その性格・範囲等は明確でない。

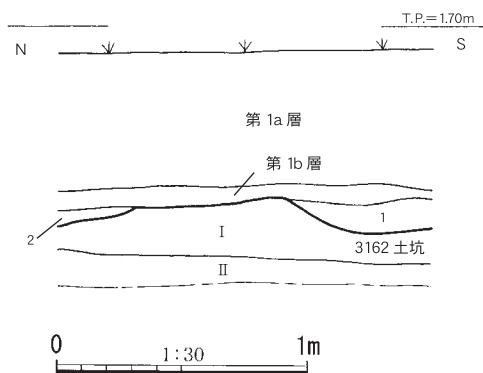
基盤層

第I層：青灰色のシルト～細砂である。一部において10YR7/8黄橙色微砂混じりシルトの範囲も認められる。

第II層：青灰色の細砂～シルトである。



写真 24 第2次調査 3区 調査区東壁断面土層(西から)



第2次調査の基本層序 (3区 調査区東壁断面土層 : I 9-c24)

第1a層 近・現代の水田耕作土・畦畔、2.5Y5/1 黄灰色シルト～細砂

第1b層 近・現代の水田床土、10YR5/8 黄褐色～2.5Y6/2 灰黄色シルト～細砂

3162土坑 1 N6/0灰色シルト～細砂

土坑？ 2 10Y7/1灰白色シルト～細砂+基盤層IIのブロック含む

基盤層 I 5B6/1青灰色シルト～細砂、2.5Y4/3オリーブ褐色酸化土壤を縦筋状に多量含む

II 5B6/1青灰色細砂～シルト、2.5Y4/3オリーブ褐色酸化土壤を縦筋状に多量含む

図 39 第2次調査 3区の基本層序 (調査区東壁断面土層 : I 9-c24)

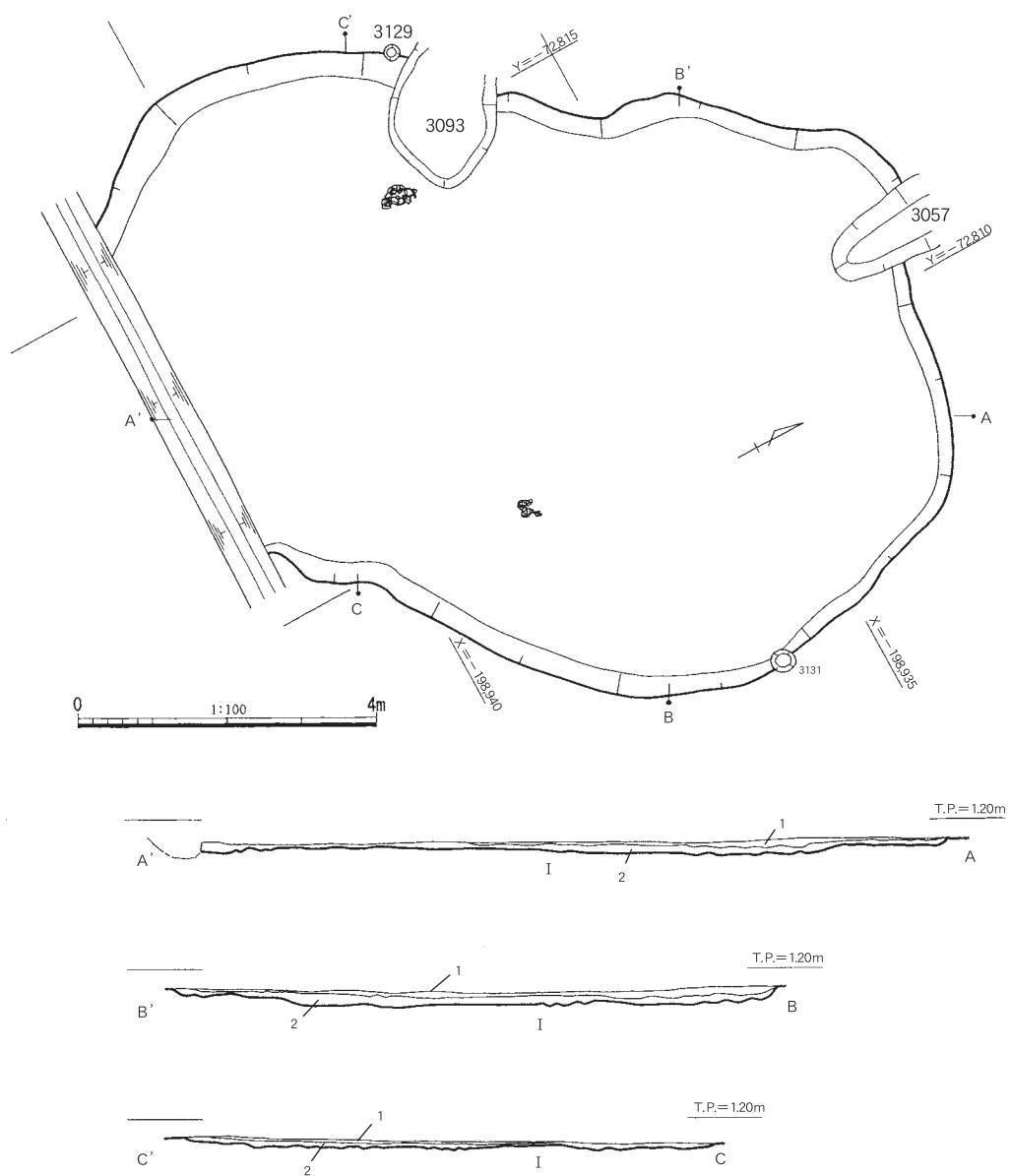
遺構検出面

掘削は、1区・2区同様に調査区の全域にわたり第2層以外の遺物包含層の存在が僅かしか認められなかったため、地表面から遺構検出面上の10cmまでをバックホウを用い掘削し、これより下位層は遺構面養生層(第1b層)として人力で遺構検出面まで掘り下げた。遺構面養生層掘削後に遺構を検出し、手順に従って遺構を掘削した。

(3) 各遺構の調査成果 (図26・40~54、表5・7、写真図版11~14・24~28)

以下、主な遺構について古い順に記述する。

3019土坑 (図40・50、表5・7、写真図版12・24)



3019土坑 (I10-b9・10, c・d8～11, e10・11)

1 10YR8/1 灰白色微砂混じりシルト

2 10YR5/1 褐灰色シルト、10YR8/6 黄橙色シルトの径2～5cm大のブロックをまばらに含む

0.5～2cm大の炭片を微量に含む

基盤層 I 10YR8/6 黄橙色シルトにN8/0 灰白色シルトが縦筋状に入る

図40 第2次調査3区 3019土坑実測図

3019 土坑は、調査区の南端 I 10-c・d 9~11 を中心とした位置で検出した土坑である。短軸北西－南東 7.15~8.15 m・長軸北東－南西 11.95 m 以上の歪な楕円形を呈する。残存の深さは 0.23~0.30m を測り、基底面は若干の凹凸が認められる。埋土は 2 層に分層でき、ほぼ水平気味の堆積をなす。上層は 10 YR 8/1 灰白色微砂混じりシルト、下層は 10 YR 5/1 褐灰色シルトが堆積する。遺物は、上層・下層の区別なく、弥生時代前期の土器が多量に出土した。土器の遺存状況は悪く、器面の剥離・磨滅が著しい。遺物の出土状況から土器廃棄土坑としての性格が窺える。

遺物は、紀伊 I - 2 様式を主体とした広口壺(196~201)・壺肩部(202)・壺底部(204)・変容壺(203)、甕(209~216)・甕底部(217~219)、甑(220)などと共に突帯文系土器深鉢(206~208) 3 点が出土した。弥生土器 1,719 点の内、口縁部・肩体部で文様構成との関係を把握できたものは 117 点である。表 5 に示したとおり、壺の削り出し突帯に伴う籠描沈線文の条数は 1 条に止まる。籠描沈線文のみで構成される壺は、3 条が最多となる。甕の籠描沈線文の条数にはバラつきが認められるが、4 条が最多となる。これらのことと含めて、3019 土坑出土の弥生土器は、県内でも比較的古い段階の紀伊 I - 2 様式の一括資料と判断することができる。

但し、遺物に古墳時代の須恵器 5 点が混在している。

表 5 第 2 次調査 3 区 3019 土坑出土の弥生土器文様構成

器種	壺				甕				深鉢			
	沈線文条数		沈線文条数		沈線文条数		口唇部刻み		突帯条数		口唇部刻み	
削り出し突帯	15	0条	4	0条	23	刻み有り	4	0条	0	刻み有り	0	
削り出し 突帯 + 沈線文	1条	19	1条	6	1条	1	刻み無し	39	1条	3	刻み無し	3
	2条	0	2条	9	2条	11			2条	0		
	3条	0	3条	21	3条	6			3条	0		
	4条	0	4条	0	4条	2			4条	0		
合計		34		40		43		43		3		3
器種合計	120	壺	74	61.7%	甕	43	35.8%		深鉢	3	2.5%	

(※口縁部～体部を主体とした破片集計)

その他の弥生時代前期と考えられる遺構（図 51、表 7、写真図版 25）

その他、出土遺物から弥生時代前期と考えられる遺構には、3038 土坑（遺物点数 11 点）、3048 土坑（8 点）、3050 土坑（34 点）、3054 土坑（48 点）、3086 小穴（2 点）、3093 土坑（73 点）、3099 土坑（35 点）、3104 土坑（15 点）、3135 小穴（6 点）などがある。何れも遺物量は少ないが、突帯文系土器深鉢 3 点を含めて、小計 232 点が出土した。3099 土坑から広口壺（222）、3104 土坑から籠描沈線文間に横位の籠先刺突文を施す甕（223）、3135 小穴から突帯文系土器深鉢（221）などが出土した。甕（223）は、3099 土坑出土土器と接合関係に有る。また、甕（223）と類似する文様構成をもつ土器は、3019 土坑から 4 点出土した。これらのことから、ここに示した土坑・小穴から出土した遺物（表 7 - 層序要素 11）は、3019 土坑から出土した遺物と併行する段階の所産と考えられる。

また、弥生時代前期の遺物そのものは、3 区の中央から南西寄りの古墳時代の遺構の埋土から散在的に出土する傾向にあり、大半が上記した段階と併行するものと考えられる。

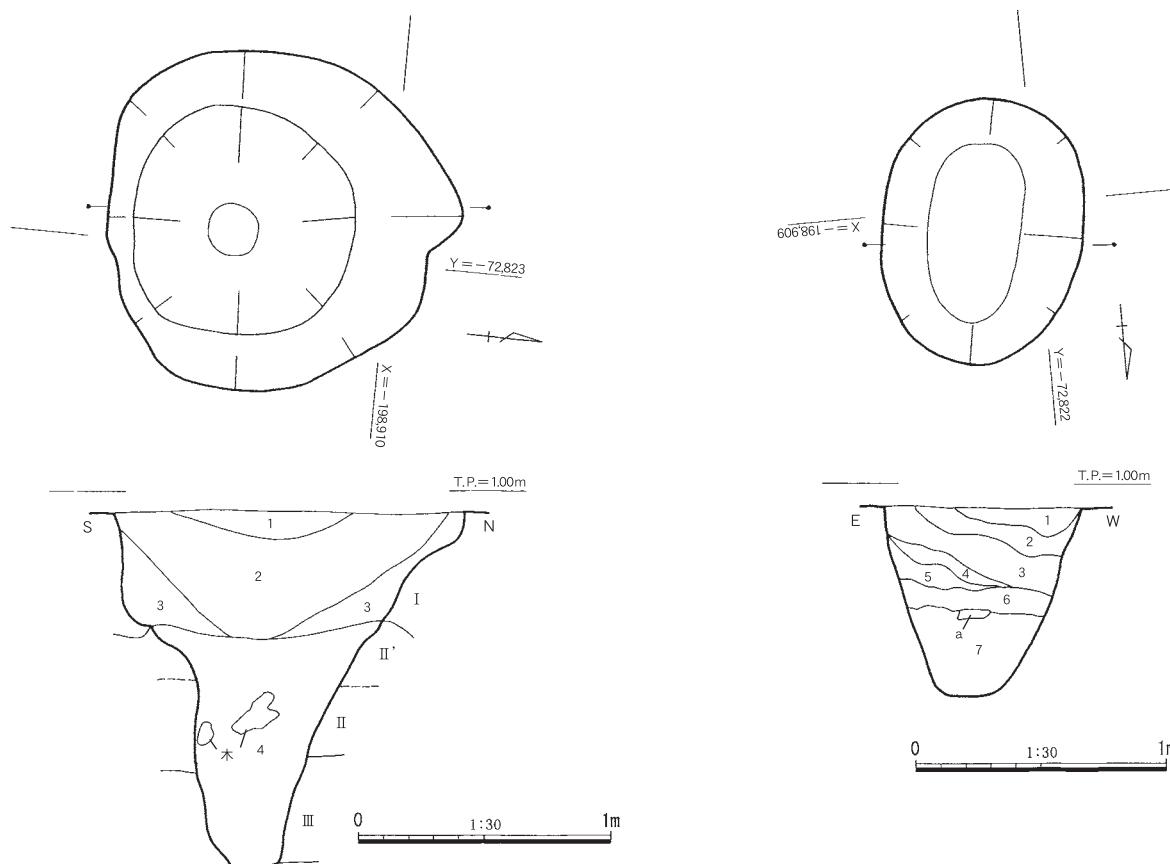
3032 井戸 (図 41・51、写真図版 12・25)

3032 井戸は、調査区の西端南寄り I 10-f3 に位置し、短軸東西 1.35 m・長軸南北 1.40 m の歪な円形を呈する。断面形は、南側面で二段落ちの深いU字形を呈し、残存の深さは 1.38 m を測る。埋土は、4 層を検出し、検出面から中位までは 10 YR 4/1~10 YR 5/1 褐灰色シルトの3層がレンズ状に堆積する。それより下位は、基底部まで N 3.5/0 暗灰色シルト～粘土の単一層で水平堆積をなす。遺物は、弥生時代前期・中期の土器 10 点と共に、弥生時代終末期の広口壺(224~226)・壺体底部(227・228)・甕底部(229)・鉢(230)など 93 点、その他桃核 1 点が出土した。口縁部を欠いた壺(227)は、3032 井戸の基底部に近い部分から出土した。

これらの遺物から、3032 井戸は弥生時代終末期に帰属するものと考えられる。

3031 井戸 (図 42・51、写真図版 12・25)

3031 井戸は、調査区の西端南寄り I 10-f3 に位置し、3032 井戸に隣接する。短軸東西 0.80 m・長軸南北 1.05 m の楕円形を呈する。断面形は、U字形を呈し、残存の深さは 0.75 m を測る。埋土は、7 層を検出し、検出面から中位までは 10 YR 4/1~10 YR 5/1 褐灰色シルトが堆



3032 井戸 (I 10-f3)

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト、0.1 ~ 0.2 cm の厚さでレンズ状に堆積する
 - 2 10YR5/1 褐灰色シルトに 10YR5/8 黄褐色シルト混じる
 - 3 10YR5/1 褐灰色シルト、10YR8/8 黄橙色シルトが 2 ~ 5 cm 大のブロック状に入る
 - 4 N3.5/0 暗灰色シルト～粘土
- 基盤層**
- I 10YR7/8 黄橙色シルト、10Y7/1 灰白色シルト混じり
 - II N5/0 灰色シルト～粘土
 - II' N7.5/0 灰白色シルト～粘土
 - III N4/0 灰色シルト～粘土

図 41 第2次調査3区 3032 井戸実測図

3031 井戸 (I 10-f3)

- 1 10YR4/1 褐灰色シルト
- 2 10YR5/1 褐灰色シルト
- 3 1 層に酷似する
- 4 10YR5/1 褐灰色シルト
- 5 1 層及び 3 層に酷似する
- 6 4 層に酷似する
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト
- a 7.5Y8/1 灰白色シルトのブロック

図 42 第2次調査3区 3031 井戸実測図

積し、東から西に人為的に搔き込んだような状況を呈する。それより下位層は、基底部まで 10 YR 3/1 黒褐色シルトの単一層で水平堆積をなす。遺物は、弥生時代中期の土器 1 点と共に、弥生時代終末期の広口壺(232)・二重口縁壺(231)など 20 点が出土した。広口壺(232)は、阿波式土器の搬入品と考えられる。

これらの遺物から、3031 井戸は弥生時代終末期に帰属するものと考えられる。

掘立柱建物 1 (図 43、写真図版 12)

掘立柱建物 1 は、調査区の西端北側 I 9-f・g 22・23 を中心に位置し、桁行北東－南西 3 間(4.32～4.40 m) × 梁行北西－南東 2 間(3.86～4.00 m)で、総柱建物である。柱の掘形は、遺存状況の良い柱穴で 0.50 ～ 0.70 m を測り、歪な円形から隅円方形ぎみの形状である。桁行方向の柱間は 1.35 ～ 1.54 m、梁行方向の柱間は 1.86 ～ 2.1 m で、若干のばらつきが認められる。桁行主軸方向は、N - 35.5° - E の振れとなる。

遺物は、柱当たりと掘形の区別ができるないが、古墳時代後期と考えられる土師器・須恵器の細片が少量出土したに過ぎない。中には奈良時代の遺物とも判断のつかないものがあり、明確な時期決定が困難である。

掘立柱建物 2 (図 44、写真図版 13)

掘立柱建物 2 は、調査区の南側西寄り I 10-e 5 を中心に位置し、桁行北東－南西 4 間(5.56～5.82 m) × 梁行北西－南東 3 間(4.24～4.30 m)で、現状では側柱建物である。柱の掘形は、遺存状況の良

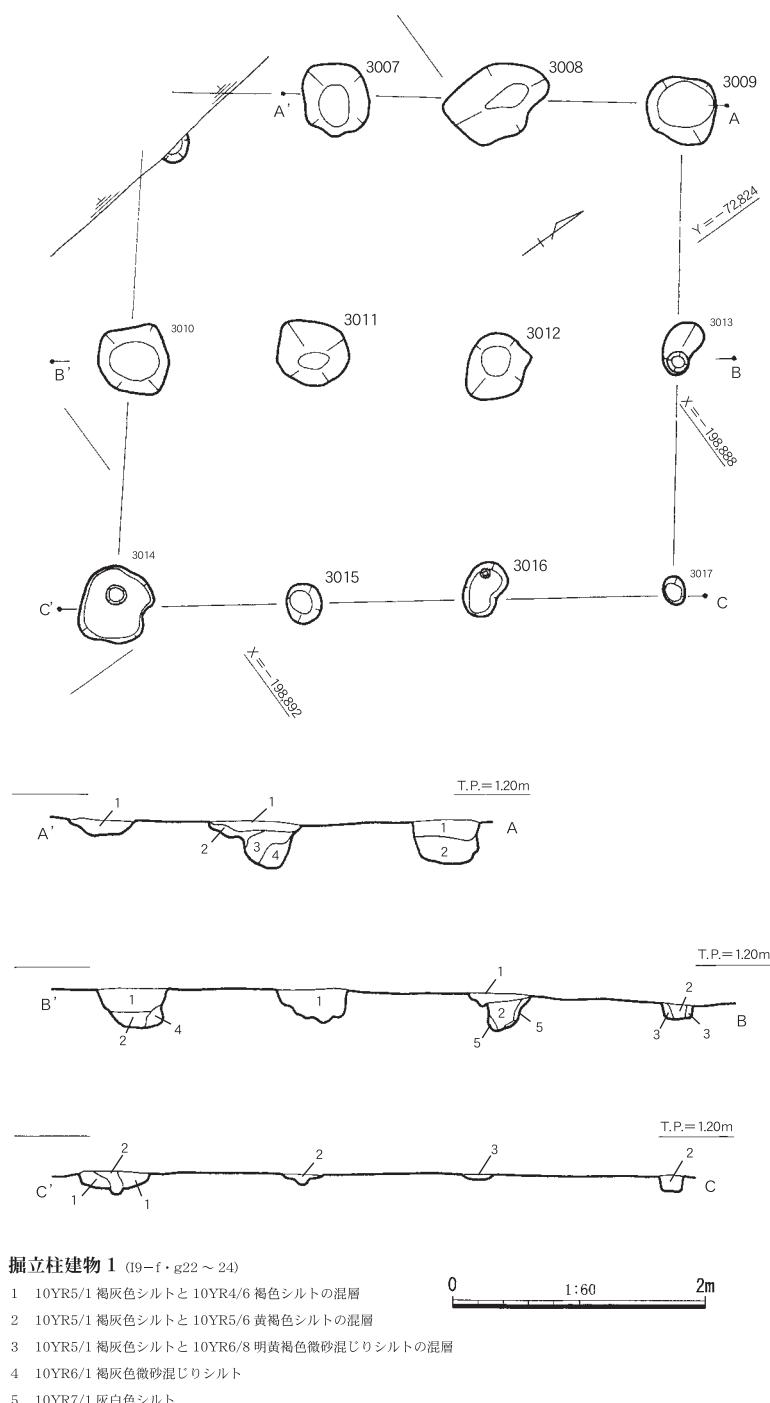


図 43 第 2 次調査 3 区 掘立柱建物 1 実測図

い柱穴で 0.30~0.40 m を測り、円形を呈する。桁行方向の柱間は 1.28~1.62 m、梁行方向の柱間は 1.20~1.64 m で、かなりのばらつきが認められる。桁行主軸方向は、N-41°-E の振れとなる。

遺物は、何れの柱穴からも出土していない。そのため、明確な時期決定が困難である。

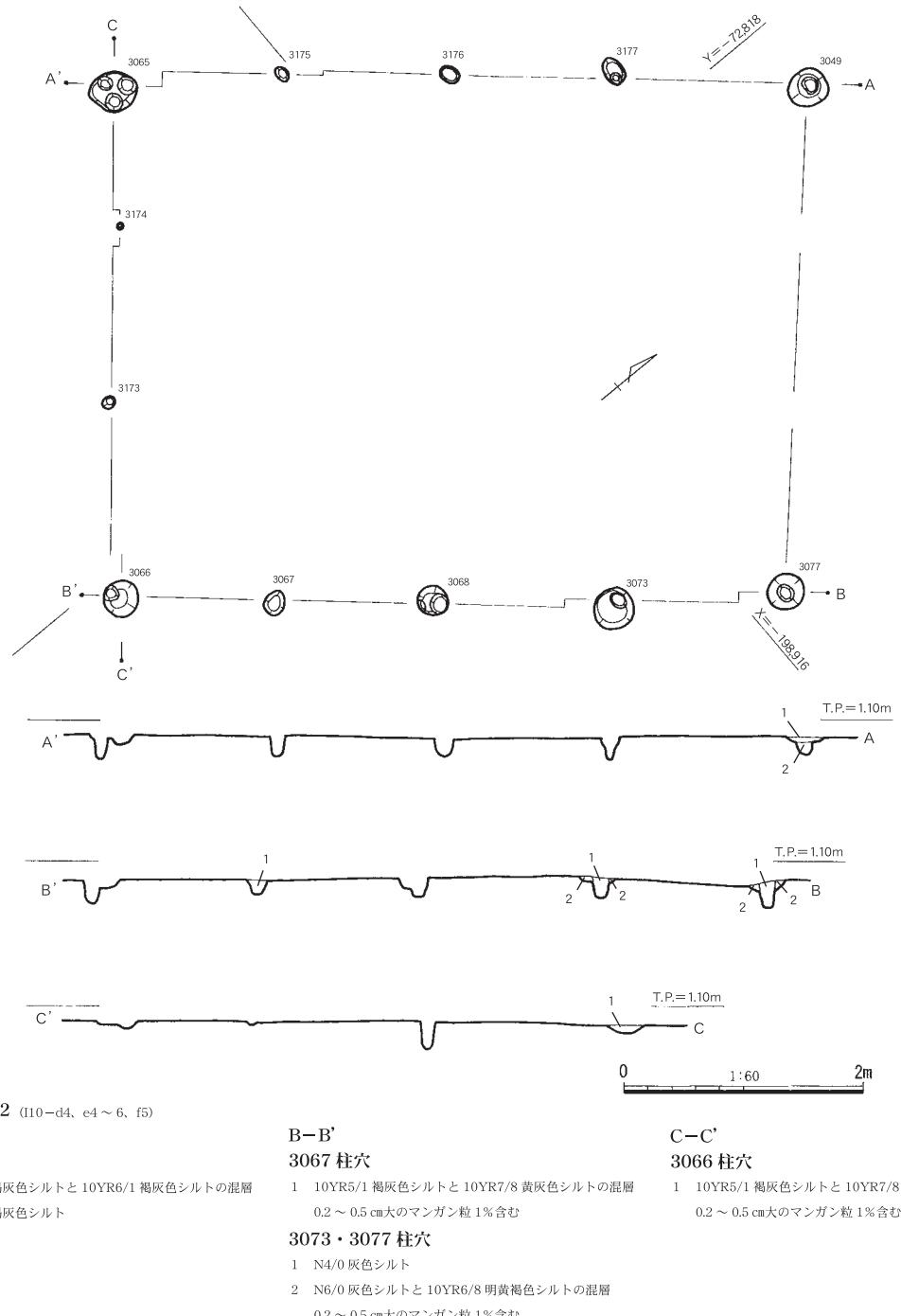


図 44 第2次調査3区 掘立柱建物2実測図

3027 土坑 (図 45・51、写真図版 13・25)

3027 土坑は、掘立柱建物 1 の東側で調査区の北側東寄り I 9-e 22 に位置し、短軸東西 0.51 m・長軸南北 0.58 m のやや歪な円形を呈する。断面形は、U字形を呈し、残存の深さは 0.22 m を測る。埋土は、3 層を検出し、埋設された土器が折り重なった状態で出土した。3 層は、土器を埋設する際に充填したかどうかの情報は得られていない。遺物は、古墳時代後期の須恵器坏身

(233・234) 2個体、土師器手捏ね小椀(236～242) 7個体・把手付深鍋(甕)(235) 1個体が出土した。

これらの遺物から、3027 土坑は古墳時代後期に帰属する土器埋設土坑と考えられる。

3062 土坑 (図 46・51、写真図版 13・26)

3062 土坑は、調査区の南側中央 I 10-b 8 に位置し、短軸南北 0.74 m・長軸東西 0.80 m 以上のやや歪な橢円形を呈する。西側を 3083 土坑に削り取られる。断面形は、深い皿形を呈し、残存の深さは 0.26 m を測る。埋土の情報は、不明である。土坑の基底部から約 10～15cm 浮いた状態で土器が出土した。遺物は、古墳時代後期の土師器壺(243・244) 2個体と細片の土師器甕 1点・弥生時代終末期の土器 3点が出土した。

これらの遺物から、3062 土坑は古墳時代後期に帰属する土器埋設土坑と考えられる。

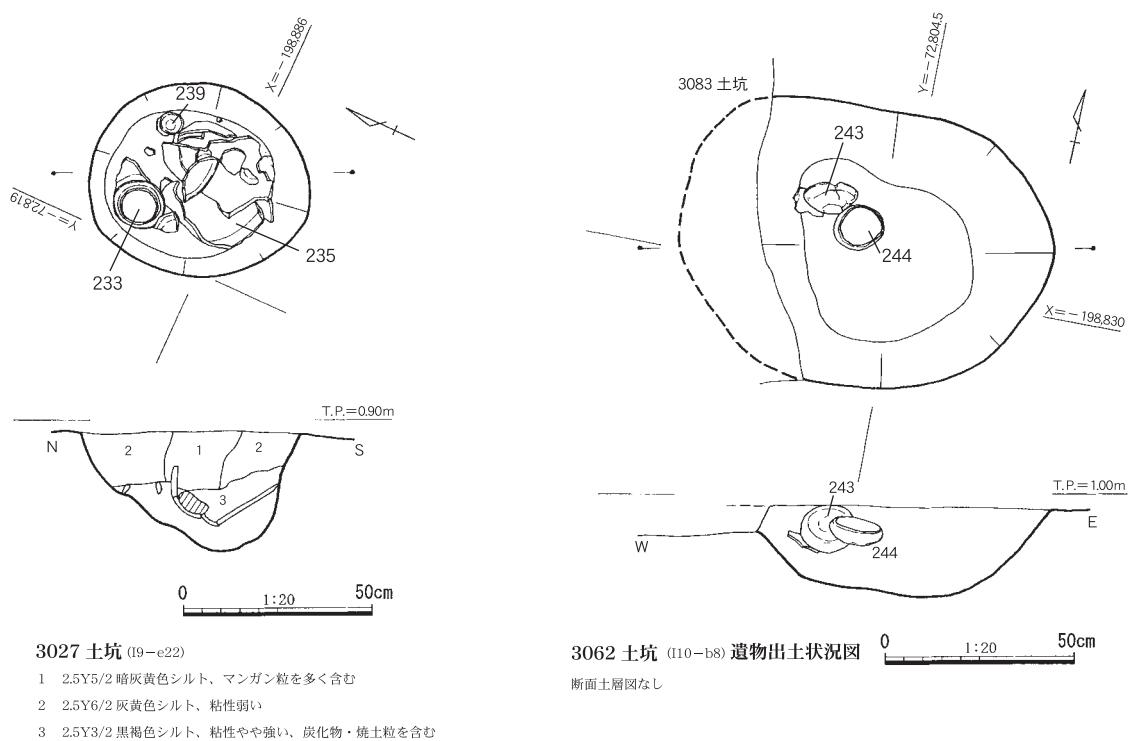


図 45 第2次調査3区 3027 実測図

図 46 第2次調査3区 3062 土坑実測図

3039 土坑 (図 47、写真図版 13)

3039 土坑は、掘立柱建物 2 の北西側で調査区の西端南寄り I 10-f 4 に位置し、短軸北東－南西 1.20 m・長軸北西－南東 1.80 m のやや不整形な形状を呈する。断面形は、箱形を呈し、残存の深さは 0.38 m を測る。土坑の基底部は、比較的平坦である。埋土は、レンズ状に 7 層が堆積し、中位層の 4 層に炭層が認められる。遺物は、弥生時代前期の土器 17 点・終末期の弥生土器 18 点、古墳時代後期の土師器と考えられる土器 1 点・須恵器壺身 3 点・壺蓋 1 点・甕 1 点が出土した。遺物は、何れも細片で磨滅の著しいものである。

これらの遺物から、3039 土坑は古墳時代後期に帰属するものと考えられる。

3108 土坑 (図 48、写真図版 13)

3108 土坑は、調査区の南西隅 I 10-f 9 に位置し、短軸東西 0.30 m・長軸南北 0.40 m の橢円形を呈する。断面形は、U字形を呈し、残存の深さは 0.16 m を測る。埋土は、レンズ状に 3

層が堆積し、最下層の3層に炭層が認められる。遺物は、弥生時代中期の可能性のある土器1点のみである。

これらのことから、3108土坑は明確な時期決定が困難であるが、303

9 土坑の

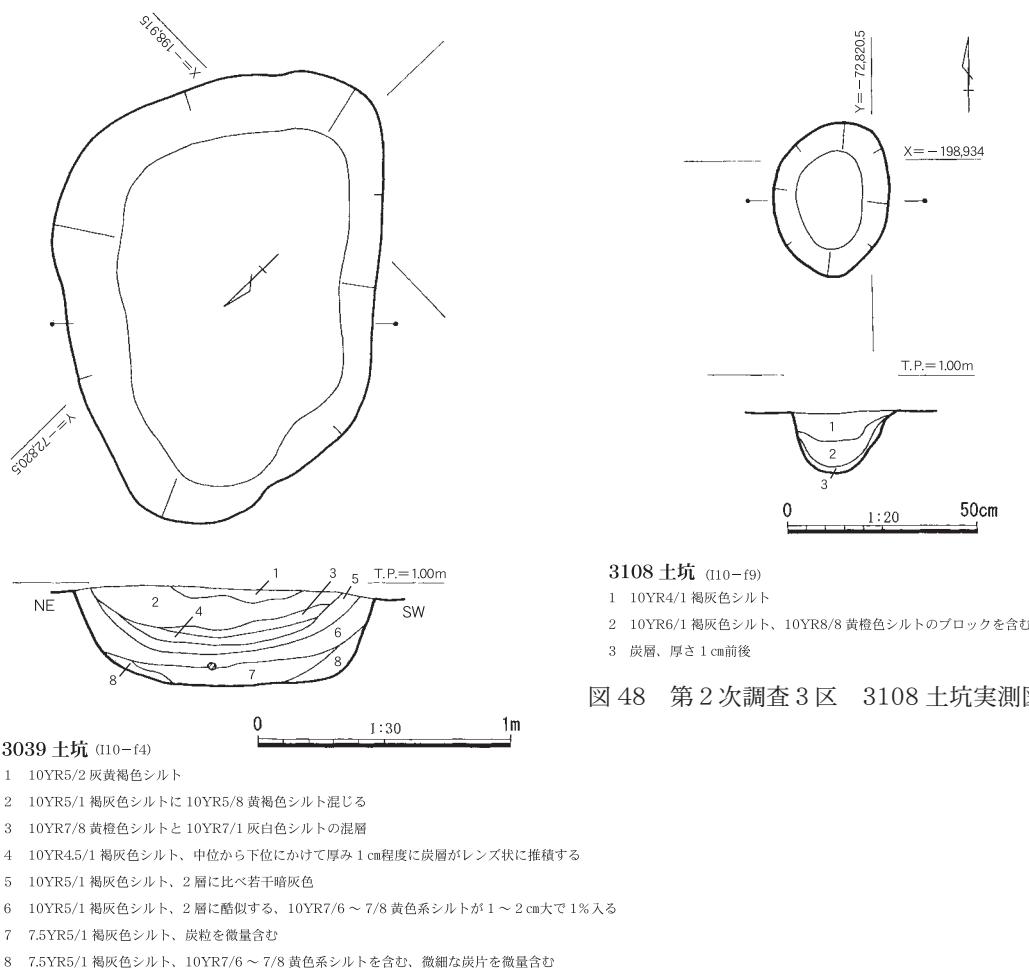


図47 第2次調査3区 3039土坑実測図

炭層の堆積状況との類似性から古墳時代後期の可能性があると考えられる。

その他の古墳時代と考えられる遺構（図52・54、写真図版26・28）

その他、出土遺物から古墳時代と考えられる主な遺構には、3021土坑（図52-254）（遺物点数3点）、3030土坑（245・246・248・255）（117点）、3046土坑（256）（31点）、3094土坑（257・260・262）（83点）、3098土坑（258・265）（57点）、3122土坑（249・250）（111点）、3124土坑（247・251～253・259・261）（83点）、3162土坑（263）（15点）がある。

これらの中、3030土坑は、調査区の中央 I 10-e・f 2を中心位置する不整形な大型の土坑である。遺物は、弥生時代前期（245・246）（75点）・終末期（2点）の土器・石器と共に古墳時代後期の土師器（24点）・須恵器（248・255）（16点）が出土した。3037溝状遺構は、3030土坑から南西側に延びる。3030土坑との重複関係は不明であるが、弥生時代前期の土器1点・古墳時代の土師器5点が出土した。このことから、性格は不明であるが、3030土坑・3037溝状遺構共に古墳時代の遺構と判断した。3124土坑は、調査区の南東隅 H 10-x・y 8を中心位置する不整形な大型の土坑である。遺物は、古墳時代後期を主体とした土師器・須恵器（251～253・259・261）が出土した。このことから、3124土坑は古墳時代の遺構と判断した。

ここに示した土坑から出土した遺物の大半は、古墳時代中期から後期の所産と考えられる。しかし、遺物が示す時期が明確に遺構の時期を反映するとは限らない要素を含んでいることを考慮しなければならない。

図48 第2次調査3区 3108土坑実測図

3115 井戸 (図 49・53・54、写真図版 14・27・28)

3115 井戸は、調査区の南東隅H10-y9・10に位置し、掘形の短軸東西 1.45 m・長軸南北 1.55 m のやや歪な円形を呈する。井戸の掘削は、検出面から 0.70mまでを人力で掘削し、それ以下は危険を伴うため、上部の写真撮影後に重機で断ち割った。掘形の断面形は、逆台形状を呈し、残存の深さは 1.50 m を測る。埋土は、井戸内で 4 層、掘形で 4 層、さらに全体を覆う状態で 1 層を検出した。井戸には木製井戸側が遺存していた。井戸側は 1 本の丸太を縦に 2 等分し、刳り抜き、それに柄穴を穿ち、結合して井戸側としている。井戸側の大きさは直径 0.60×0.68 m を測る。また、井戸側の西側には井戸側の崩壊防止のためか、縦 1.2m、幅 0.2m、厚み 0.04 ~ 0.05m の板材が添うように立て掛けられていた。井戸側内の底から奈良時代の遺物がまとまって出土した。

遺物は、奈良時代の土師器皿(266~268) 4 個体・須恵器皿(269) 1 個体・土師器葉壺(270) 1 個体・土師器甕(271~279) 10 個体・須恵器甕(280) 1 点・桃核 1 点などが出土した。その他の細片も含めて土師器 146 点・須恵器 13 点・その他不明 6 点、弥生時代と考えられる緑泥片岩製の凹石(敲石)(289)がある。個々の詳細は、出土遺物一覧に記した通りであるが、これらの中、土師器甕(273・274・276・278・279)は、口縁部を意識的に打ち欠いたのではないかと思われる一定の共通性が認められる。

これらの遺物から、3115 井戸は奈良時代の平城 II ~ III 段階に帰属するものと考えられる。

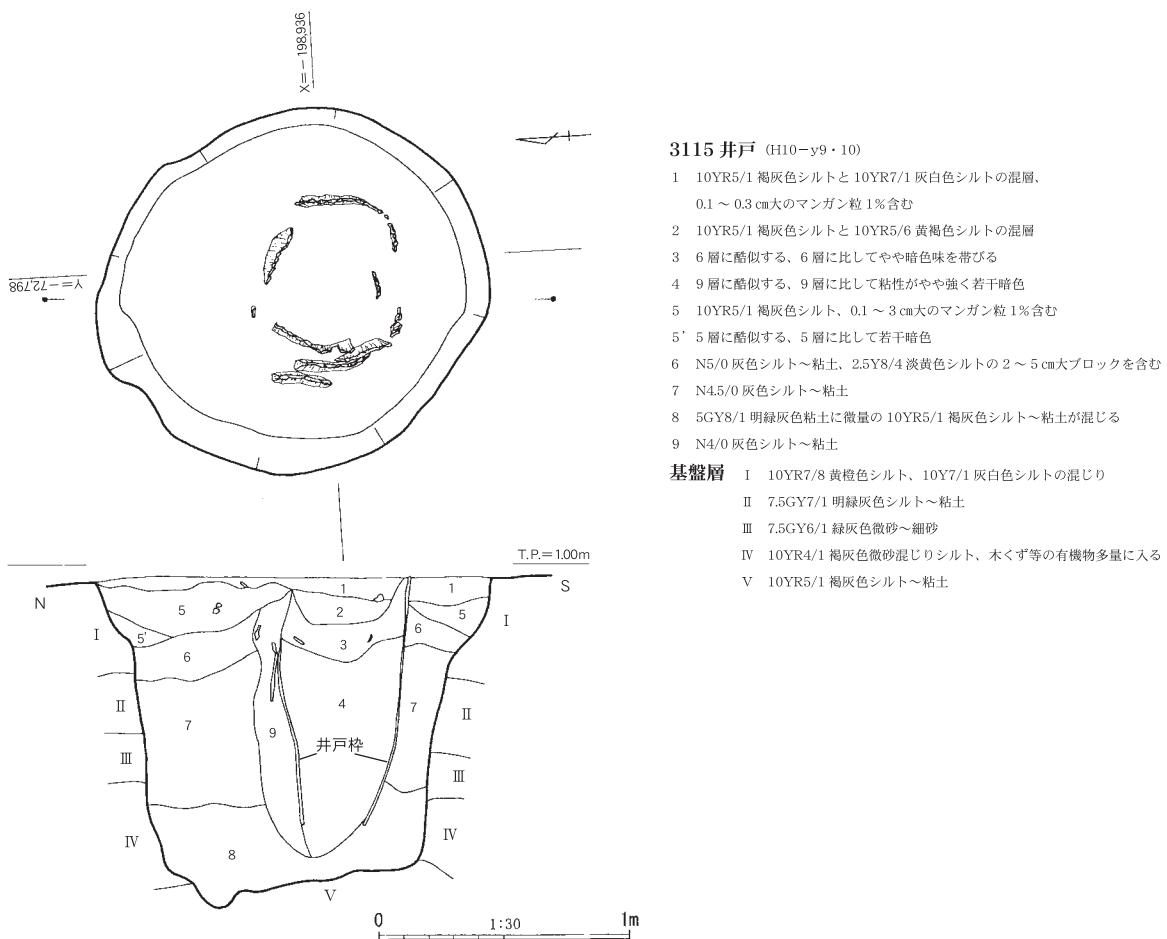


図 49 第2次調査3区 3115 井戸実測図

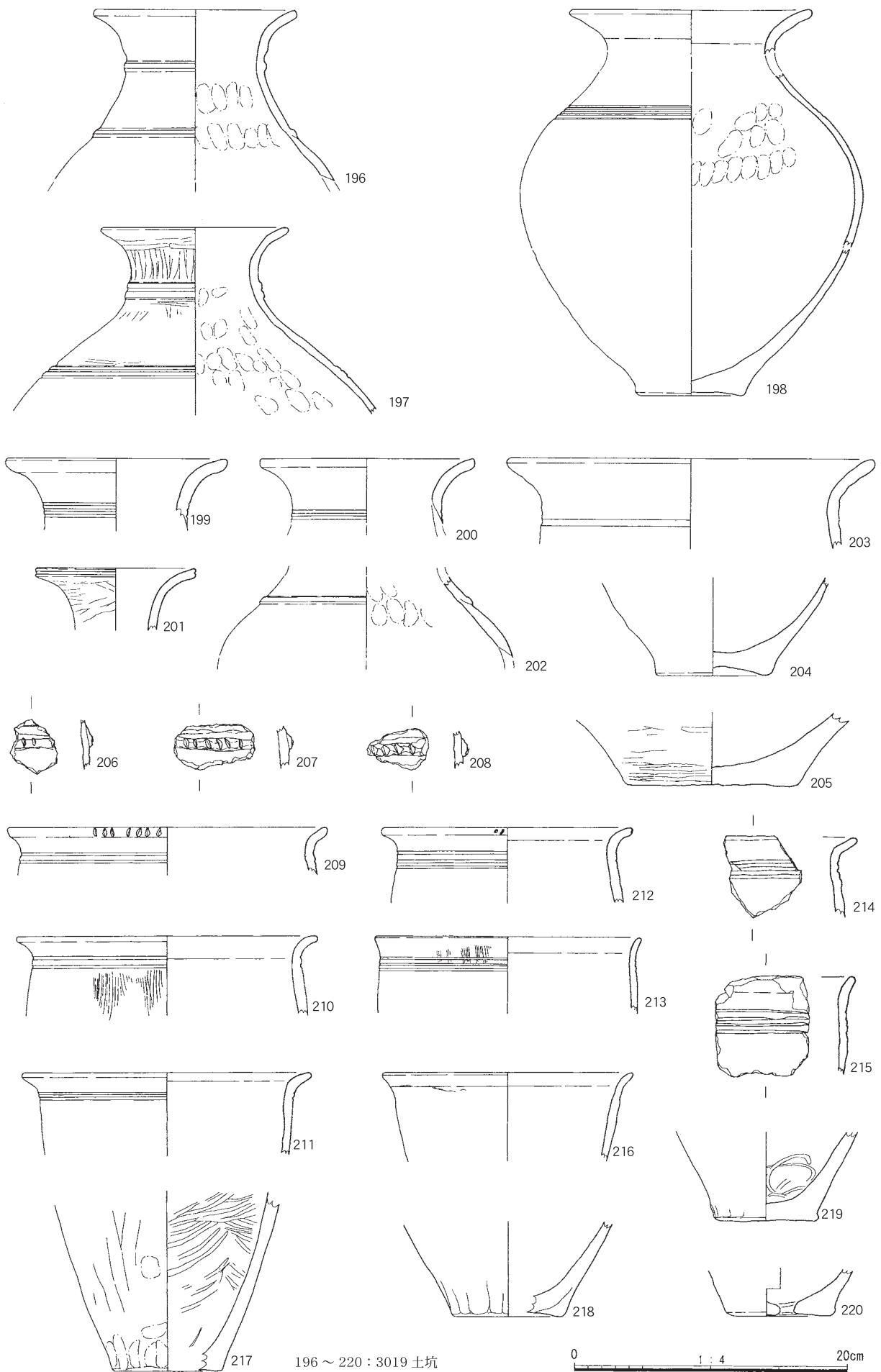
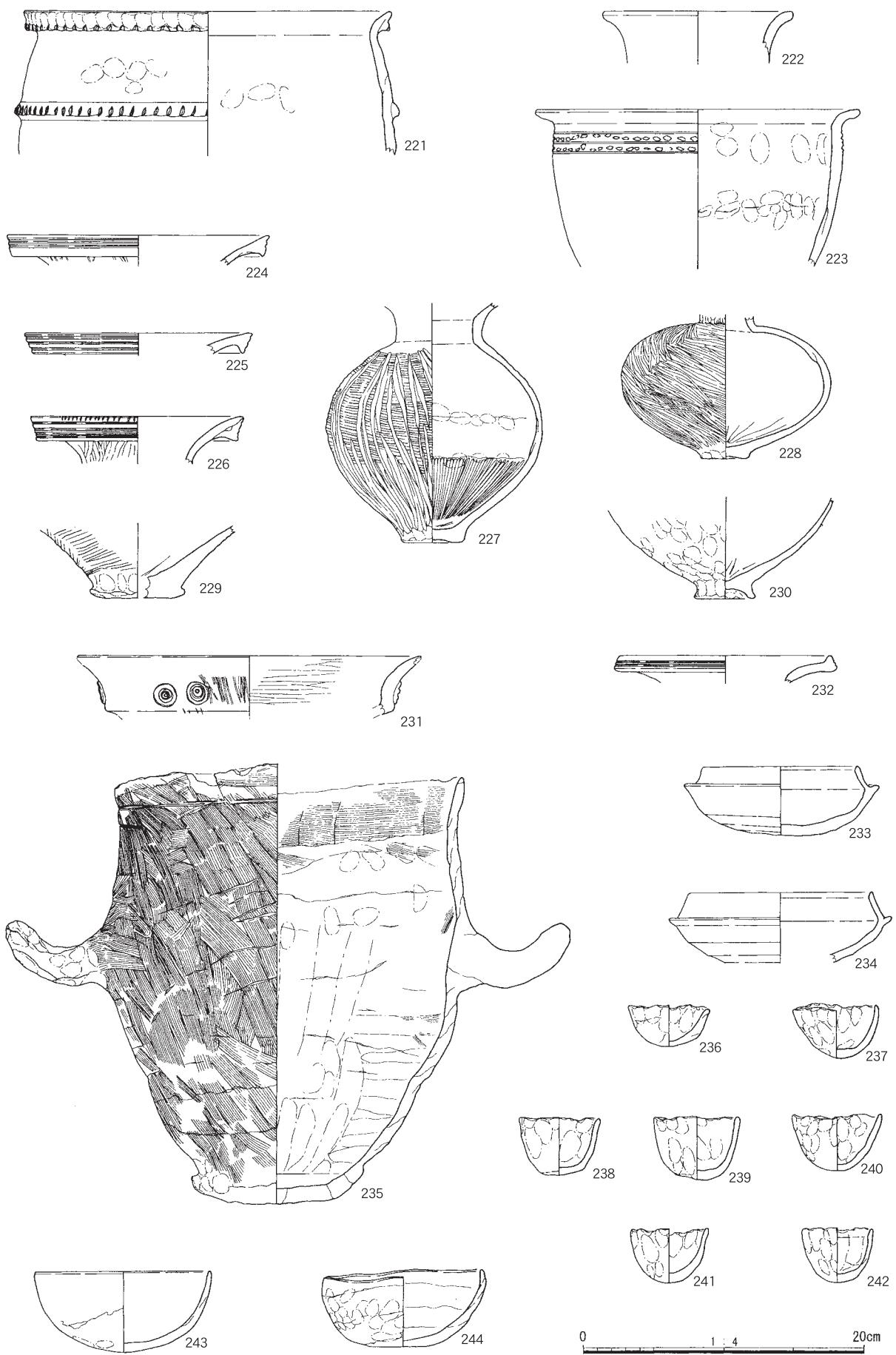
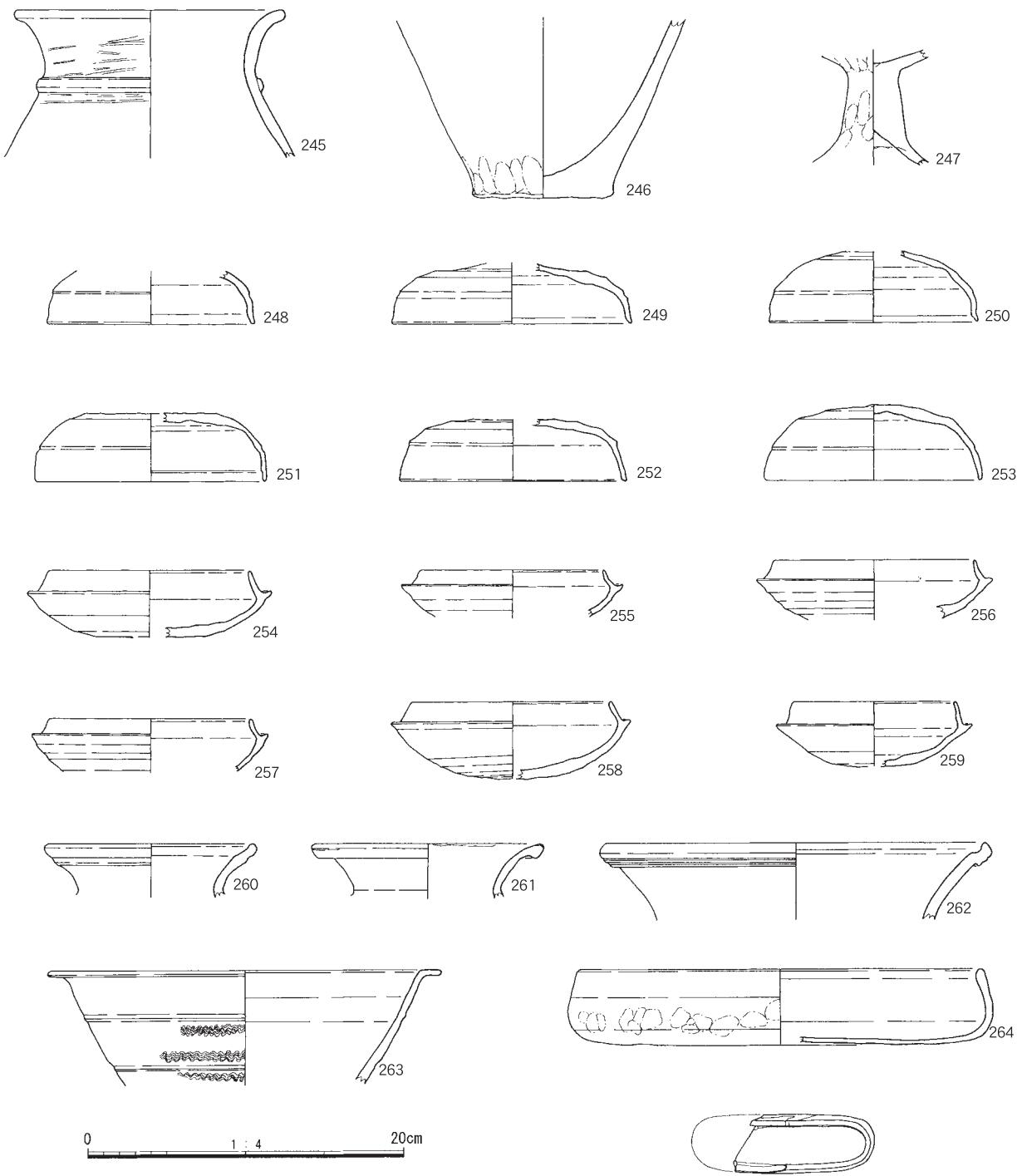


図 50 第2次調査3区 出土遺物実測図 1



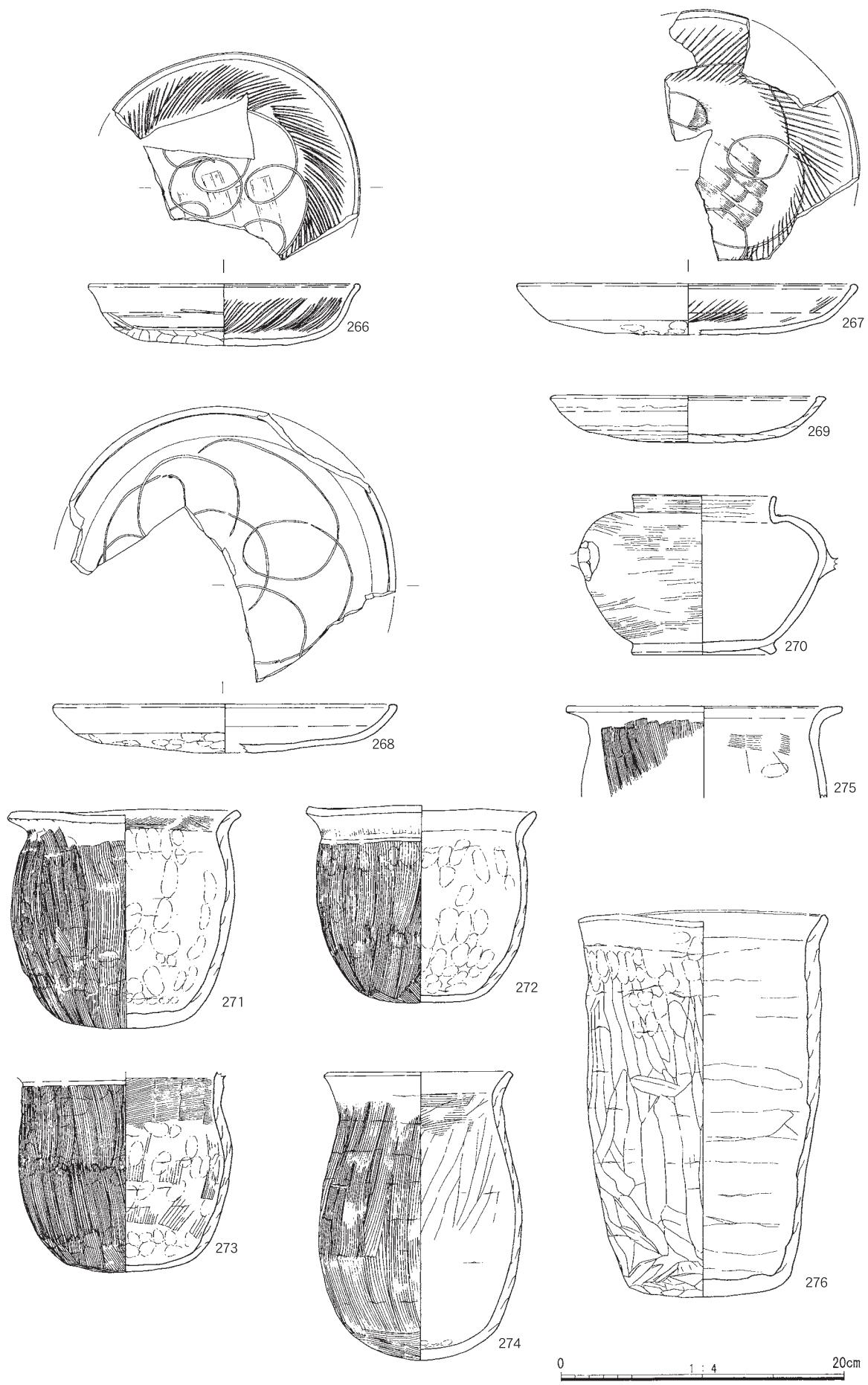
221: 3135 土坑、222: 3099 土坑、223: 3104 土坑、224～230: 3032 井戸、
231・232: 3031 井戸、233～242: 3027 土坑、243・244: 3062 土坑

図 51 第2次調査3区 出土遺物実測図2



245・246・248・255：3030 土坑、247・251～253・259・261：3124 土坑、
249・250：3122 土坑、254：3021 土坑、256：3046 土坑、257・260・262：3094 土坑、
258・265：3098 土坑、263：3162 土坑、264：3091 土坑

図 52 第 2 次調査 3 区 出土遺物実測図 3



266～276：3115 井戸

図 53 第2次調査3区 出土遺物実測図4

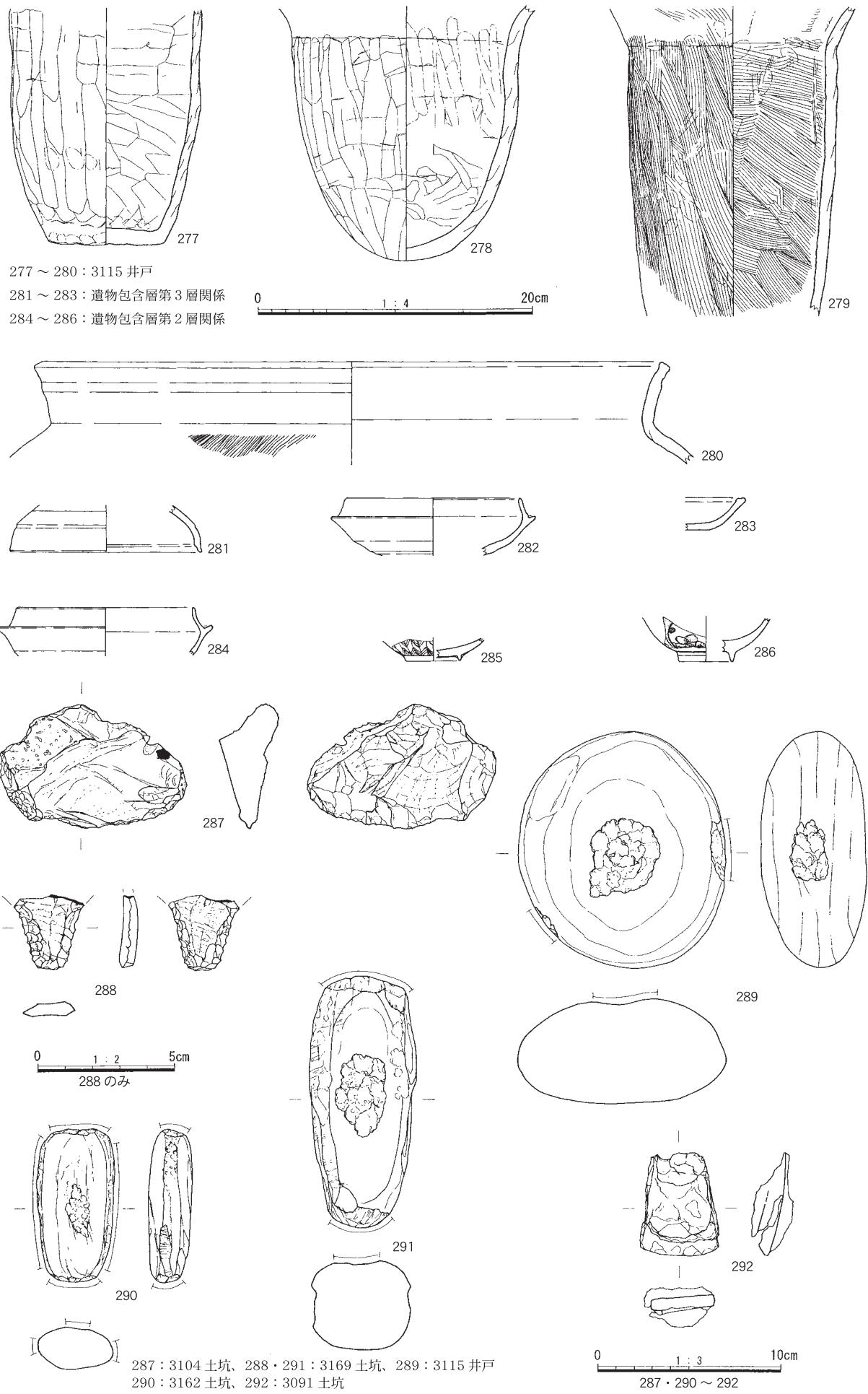


図 54 第2次調査3区 出土遺物実測図5

3 4区

(1) 調査の概要 (図 56、写真図版 15)

4区も調査前の現況は、水田である。調査面積は 1,495m²である。遺構検出面は、他地区と同様に標高約 1.0m である。北側から続く現有の水路は、本調査区の東側に位置する。

4区では、古墳時代を中心とした溝・土坑、飛鳥・奈良時代と考えられる杭列、鎌倉時代の可能性のある土坑・溝などを検出した。3区と同様に遺構の密度は高いが、遺構の構成内容が異なる地区である。また、遺構からの出土遺物は少なく、明確な時期決定がし難い状況にある。

基本的に現床土直下に近世の遺物包含層が形成され、比較的多くの遺物が出土している。

(2) 基本層序と遺構面 (図 55、写真 25)

基本層序を以下のとおり把握した。

基本層序

第1層：第1層は、近・現代の水田耕作土
(第 1a 層) 黄灰色のシルト～細砂と床土
(第 1b 層) 黄橙色のシルトに細分できる。

第2層：近世の遺物包含層(水田耕作土)で
黄灰色のシルト～細砂である。

基盤層

第I層：灰白色のシルトで、黄褐色の酸化
土壌を縦筋状に多量に含む。

第II層：灰白色のシルトで、明黄褐色の酸化土壌を縦筋状に多量に含む。



写真 25 第2次調査4区 調査区東壁断面土層(西から)

第2次調査の基本層序 (4区 調査区東壁断面土層 : H10-t22)

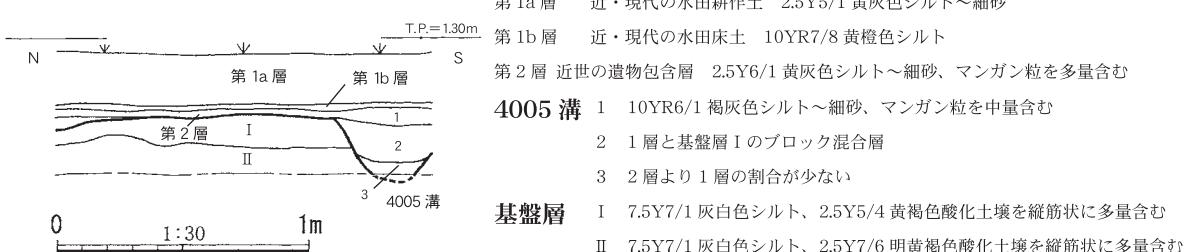


図 55 第2次調査4区の基本層序 (調査区東壁断面土層 : H10-t 22)

遺構検出面

掘削は、第1層をバックホウで掘削し、以下の第2層を人力で遺構検出面まで掘り下げた。その後に遺構を検出し、手順に従って遺構を掘削した。

(3) 各遺構の調査成果 (図 56~58、表 6・7、写真図版 15・16・29)

以下、主な遺構について古い順に記述する。

4040 土坑 (図 57・59、表 7、写真図版 16・29)

4040 土坑は、調査区の北側中央西寄り I 10-a 16 に位置し、短軸南北 0.60~0.80 m・長軸

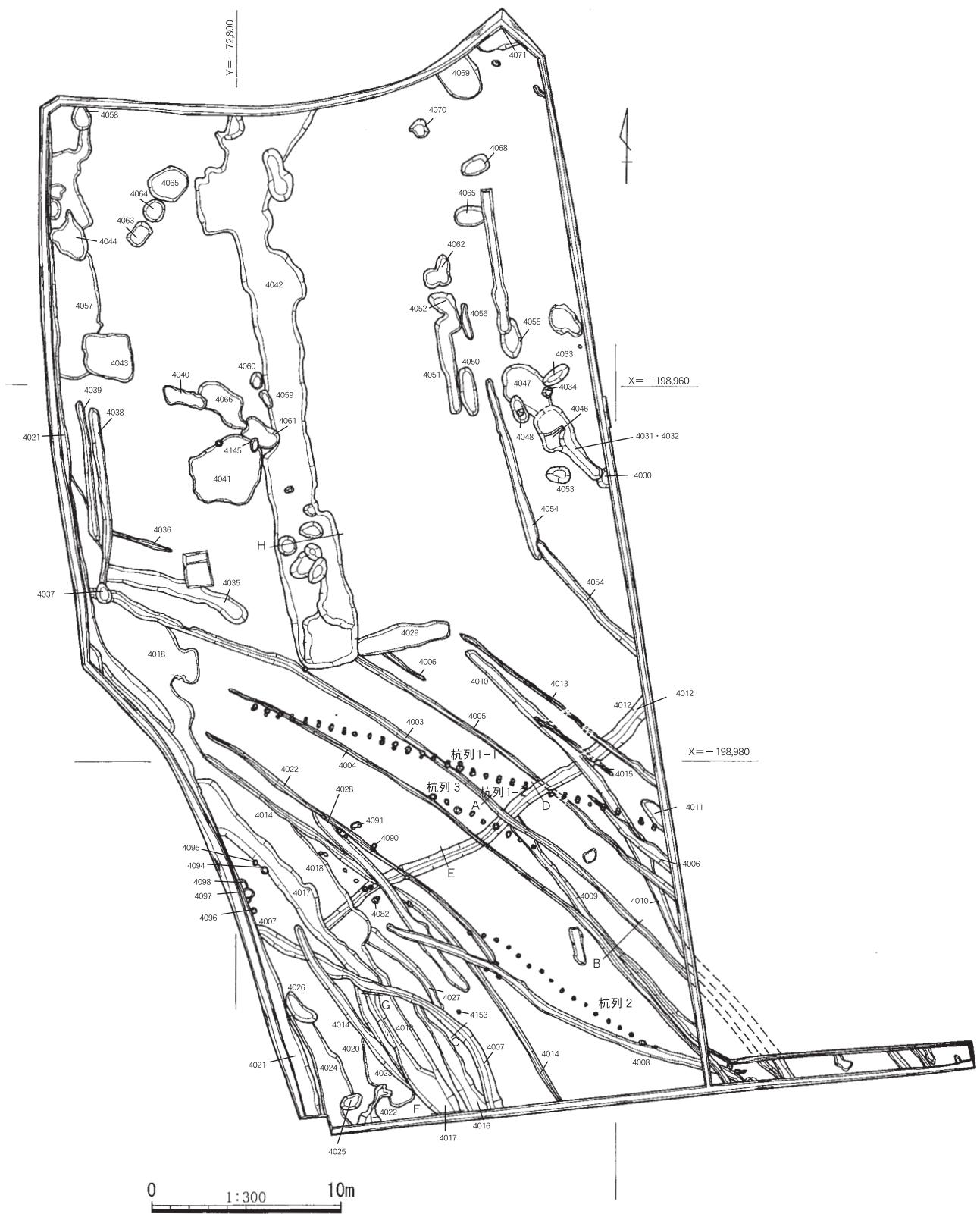


図 56 第2次調査4区 遺構全体平面図

東西 2.30 m の不整形な長方形状を呈する。残存の深さは 0.09 m を測り、基底面はほぼ平坦である。埋土は、単一層である。遺物は、古墳時代の遺物と共に弥生時代終末期の土器が多量に出土した。細

片化し土器の遺存状態は悪く、器面の剥離・磨滅が著しい。遺物の出土状況から土器廃棄土坑と考えられる。

遺物は、弥生時代中期のサヌカイト製の石鏸(321) 1点・終末期の弥生土器各器種(1,834 点)・碧玉製の管玉(325) 1点(土坑から出土した弥生時代遺物の割合: 98.9%)、古墳時代の土師器(遺物点数 16 点)高坏(293~295)・須恵器(5 点)(古墳時代遺物の割合: 1.1%)がある。

また、4040 土坑の東側に位置し、4040 土坑と重複関係にある 4066 土坑からは、剥離・磨滅の著しい弥生時代終末期の土器 37 点、古墳時代と考えられる土師器 322 点・須恵器 16 点の細片が出土した。これらの遺物の内容から、4040 土坑は弥生時代終末期の所産とせず、古墳時代に帰属するものと判断した。

溝・溝状遺構 (図 58・59、写真図版 15・16)

溝群は、調査区の南側で検出した。北東側から順に遺構 4054・4013・4010・4005・4003・4009・4004・4022・4008・4014・4007・4017 である。これらの溝は、大よそ調査区の北西から南東方向に延びる。特に、4013・4005・4003・4004・4022 溝は一定の間隔を置いて位置する。これらの溝は、削平が著しいと思われ、残存の深さは 0.04~0.10m と浅く、検出幅は 0.40~0.95m である。これらの溝からは、弥生・古墳時代の遺物が少量ではあるが出土した。

4012 溝 (図 58、写真図版 16)

4012 溝は、調査区の北東から南西方向に緩やかに蛇行して延びる。溝群の中で、唯一方向性の異なる溝である。他の溝と重複関係に有り、何れの溝よりも古い。幅員は 0.80m、残存の深さは 0.20~0.26m、検出延長は 20.7 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、弥生時代前期の土器 11 点、古墳時代の須恵器 3 点が出土した。

4003 溝 (図 58、写真図版 16)

4003 溝は、調査区の北西から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4009 溝より新しく、後述する杭列 1 より古い。幅員は 0.65m、残存の深さは 0.07~0.10m、



図 57 第 2 次調査 4 区 4040 土坑実測図

4040 土坑 (I10-a16)
1 2.5Y5/1 黄灰色シルト、土器含む

検出延長は 45.2 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、弥生時代前期の土器 2 点・中期の土器 7 点、古墳時代と考えられる土師器 10 点・須恵器 1 点が出土した。

4004 溝 (図 58、写真図版 16)

4004 溝は、調査区の北西から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4008・4009 溝より新しく、杭列 1 より古い。幅員は 0.40m、残存の深さは 0.07m、検出延長は 34.0 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、弥生時代前期の土器 2 点・中期の土器 7 点、古墳時代と考えられる土師器 10 点・須恵器 1 点が出土した。

4005 溝

4005 溝は、調査区の中央から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4010・4012 溝より新しく、4042 溝状遺構より古い。幅員は 0.45m、残存の深さは 0.05m、検出延長は 21.1 m を測る。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、古墳時代と考えられる土師器 5 点、室町時代の可能性のある土師器 1 点が出土した。

4017 溝 (図 58・59、写真図版 16・29)

4017 溝は、調査区の西端から南東方向に緩やかに大きく弧を描いて延びる。重複関係から 4018・4021 溝より古い。前述の溝群とは幅員を異にし、0.5~1.5 m となる。断面形は皿形を呈し、埋土は単一層である。遺物は、古墳時代と考えられる土師器 24 点・須恵器 29 点、飛鳥時代の須恵器坏 1 点・壺(296) 1 点が出土した。

これらの溝群は、重複関係から古い順に 4012 溝→4008・4009 溝→4003・4004→杭列 1、4012 溝→4010 溝→4005・4006 溝→杭列 1、4012 溝→4017 溝→4007 溝→4018・4021 溝

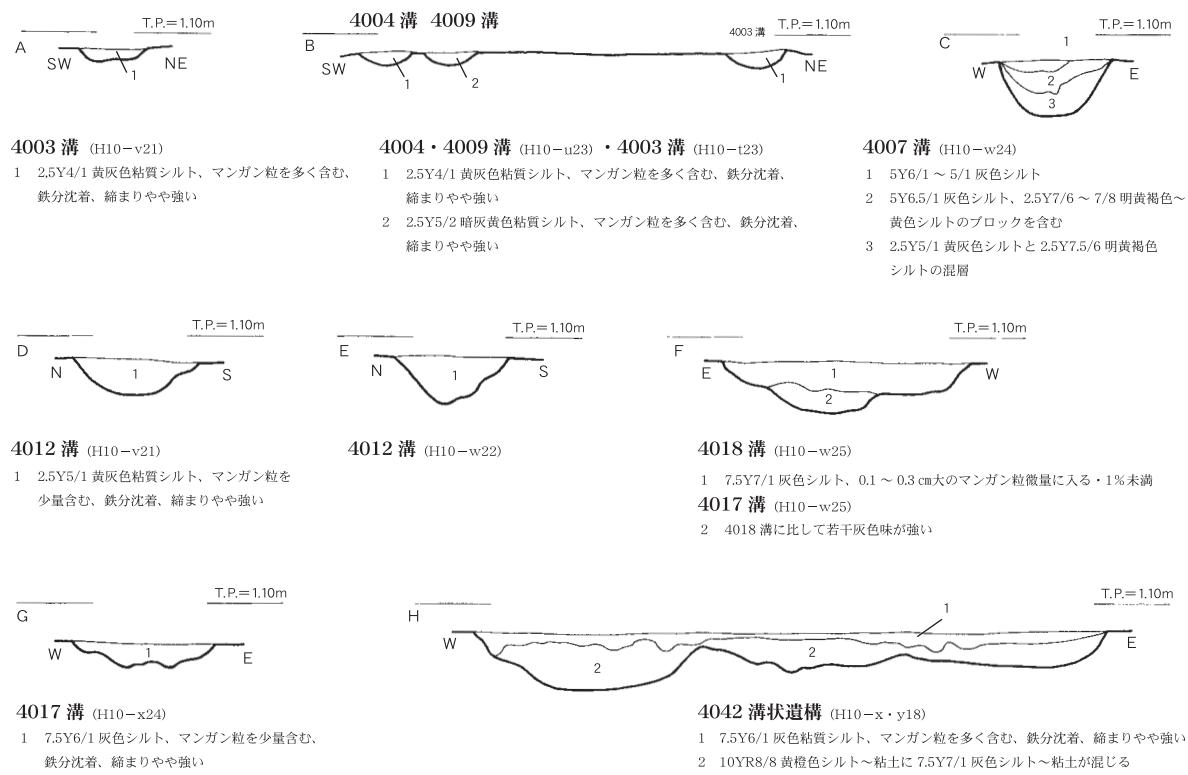


図 58 第2次調査4区 溝・溝状遺構断面土層図

となり、古墳時代の溝群の中では大よそ3段階（時期）の変遷を辿ることになる。但し、出土遺物からは明確な時期差を見出すことができない。

これらのことから、これらの溝群は用水路的な機能を有するものと考えられる。

杭列

杭列は、調査区の南側において3列検出した。重複関係から溝群より新しい。杭列1には新旧が存在する。杭列を構成する小穴の掘形の直径は0.14～0.36mの円形ないし楕円形である。断面形は皿形を呈し、残存の深さは0.01～0.24mを測る。小穴の間隔は大よそ0.30～0.50mで、杭列1は検出延長22.30m、杭列2は12m、杭列3は7mである。遺物は、出土していない。

表6 第2次調査4区 杭列(小穴)一覧

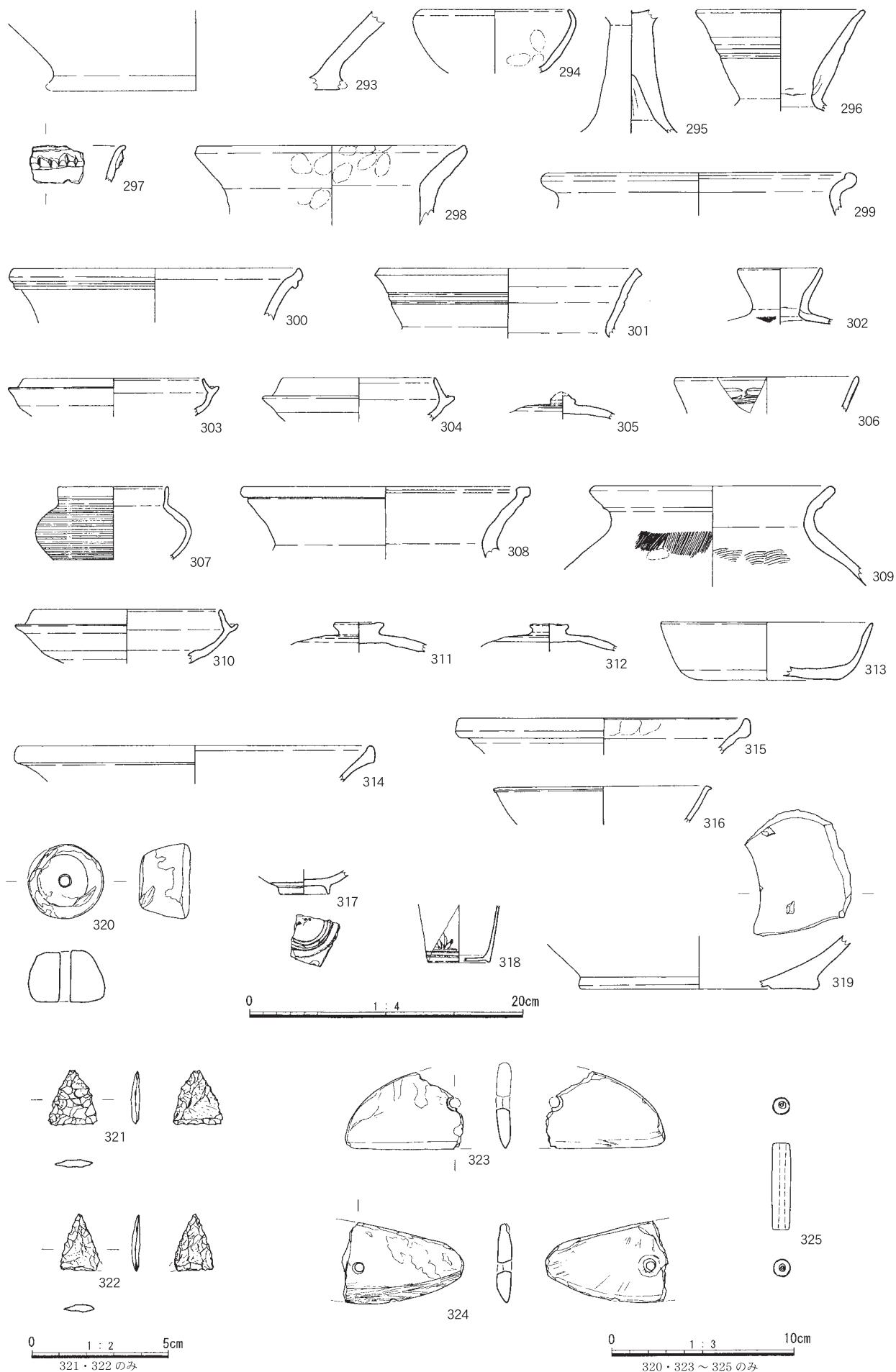
遺構番号	地区	土坑(小穴)番号	平面形と特徴	断面形と特徴	規模(m)					備考 (遺構の重複関係・埋土等)		
					最小	最大	深さ	検出延長	並びの方向			
中区画	小区画											
杭列1-1	4区	H10	(南東) t21・u21・v21・w21 w20・x20・y20 (北西)	4099～4129 (南東)(北西)	円形～ 歪な楕円形	皿形～U字形	0.14 × 0.16	0.28 × 0.34	0.01～0.20	22.30	東南東～ 西北西 緩やかに 蛇行する	4107は、4012の内にあるが、S=1/100図に あり空測図になし。 断面図は、4117・4123の2箇所のみ。 4117は、2層あるが、北(A)と南(B)の杭 でそれぞれ異なる土色が入っている(杭自 体は1層である)。 4103は、2層(AとB)あり、4117のAとBと同 じ土色。
杭列1-2	4区	H10	(南東) t21・u21・v21・w21 w20・x20・y20 (北西)	4099～4129 (南東)(北西)	円形～ 歪な楕円形	皿形～U字形	0.16 × 0.16	0.28 × 0.34	0.01～0.20	22.30	東南東～ 西北西 緩やかに 蛇行する	4103・4111・4120・4121・4123は、南北 2つの杭ではなく1つの杭。 4099から4114まで南が新しい。4115から 4129まで4122以外北が新しい。 溝の方向と異なり、4006・4010・4012・ 4003・4004溝より新しい。
杭列2	4区	H10	(南東) t24・u24・v23・w23 (北西)	4131～4146 (南東)(北西)	円形～ 楕円形	断面図なし 不明	0.14 × 0.18	0.30 × 0.36	0.03～0.24	12.00	南東～北 西 4144で ほぼ西に 屈曲する	4140が2つある。 4008溝より新しい。
杭列3	4区	H10	(南東) u22・v22・v21・w21 (北西)	(4072)・4073～408 (南東)(北西)	円形～ 歪な楕円形	断面図なし 不明	0.18 × 0.23	0.34 × 0.36	0.02～0.13	7.00	南東～北 西	4072は、S=1/100図に有り、空測図に無し。 4009・4012溝より新しい。 4003と4004溝の間をほぼ平行に並ぶ。

遺物包含層 第2層（図59、表7、写真図版29）

遺物包含層第2層は、層厚の差こそあるが、調査区のほぼ全域に広がる。調査時に近世の遺物包含層（水田耕作土）と認識されていた形成層である。遺物は、古墳時代の土師器・須恵器を主体に、1,099点が出土した。その内訳は、弥生時代前期・中期の土器・石器11点（遺物包含層第2層関係に占める割合：1.0%）、弥生時代終末期の土器・石器21点（1.9%）、古墳時代の土師器・須恵器・その他848点（77.2%）、飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器57点（5.2%）、平安時代末～室町時代の土器34点（3.1%）、江戸時代以降の土器・瓦128点（11.6%）となる。これらのことから、遺物包含層第2層は、江戸時代において形成されたものと考えて大過ない。

4 小結

第2次調査では、調査地の中央に現存の用水路があり、この北東側と南西側で遺構の在り方が大きく異なることが判明した。水路より北東側（1区・2区）では弥生時代～古墳時代の自然流路が検出され、南西側（3区・4区）では弥生時代前期の土器廃棄土坑、弥生時代終末期の井戸、古墳時代と考えられる掘立柱建物・土器埋設土坑、奈良時代の井戸などの直接生活に関わる遺構・遺物が検出された。これらのことから、和田遺跡における居住域は、調査地の西側に位置する独立丘陵の雨霧山（通称薬師山）の裾野から放射状に延びる微高地上に求められると考えられる。



293～295・321・325：4040 土坑（土器溜まり）、296：4017 溝、297：4015 溝、298・306：4021 溝、299：4022 溝、300・303：4052 土坑
301：4020 溝、302・305：4018 溝、304：4064 土坑、307～320・324：遺物包含層第2層、322：4061 土坑、323：4010 溝

図 59 第2次調査4区 出土遺物実測図

表7 第2次調査 各層序別遺物数量

地区	層序要素 各層序	大よその時代		縄文		弥生前・中期		弥生後期・終末期		(布留式→)		飛鳥・奈良・平安		平安末・鎌倉・室町		江戸 (近代含む)		合計				
		層構要素 整地層・堆積層	層構層序 第2層関係	縄文土器	石器 小計	発生土器 前期	石器 小計	石器 小計	土器 他	土師器 小計	土師器 瓦器	瓦器 小計	土器 瓦器	土器 瓦器	土器 瓦器	土器 瓦器	土器 瓦器	土器 瓦器	不明	不明		
3区	16 遺物包含層 小計	0	0	1	0	1	2	5	0	53	75	0	108	0	0	0	0	0	1	0	11120	
3区	17 側溝・排水 小計	0	0	1	0	1	2	5	0	53	75	0	108	0	0	0	0	0	1	0	11120	
3区	18 搾乱 小計	0	0	0	0	0	1	0	0	15	2	0	4	0	0	6	0	1	0	314	45	
3区	19 合計	6	0	6	2198	54	23	2275	285	5	290	829	585	1	1415	154	0	22	0	6	1820	33704209
4区	20 各遺構 小計	1	0	1	21	10	9	40	94	0	94	5524	2744	1	829	2	2	7	0	1	124	01857
4区	21 遺物包含層 小計	0	0	1	21	10	9	40	94	0	94	5524	2744	1	829	2	2	7	0	1	124	01028
4区	22 側溝・排水 小計	0	0	1	4	6	11	20	1	21	311	535	2	848	10	0	47	0	0	57	10140	32303491280
4区	23 合計	1	0	1	22	14	17	53	1955	2	1957	935	890	4	1829	12	2	58	0	1	73142845364	4164
1~4区	総合計	7	0	7	2344	584	96	3027	5825	18	5843	3827	2307	12	6146	388	12	334	0	7	74146953740	16081

第V章 まとめ

今回の和田遺跡の調査では、大きく第1次調査・第2次調査1区・2区と第2次調査3区・4区の中で南北方向もしくは東西方向の自然流路を挟んでいることが判明した。南北方向もしくは東西方向の自然流路の流向は、2箇所の生活域を分断する状態に位置する。

和田遺跡周辺は、従来の地理的な理解では低湿なラグーン性低地(図1)という生活域の存在の可能性が低いものであった。しかし、今回の和田遺跡の調査では、弥生時代前期から奈良時代にかけて断続的に続く生活痕跡が明らかとなった。また、地理的な理解の中で読み解かれたと考えられる南北方向の自然流路も検出された(第1次調査 205 自然流路・第2次調査 2010・2011 自然流路)。

多くの生活痕跡が存在することから考えれば、度重なる自然流水に悩まされながらも集落を営んでいたことは想像に難くない。現在においても和田川周辺は、度重なる冠水に見舞われる地域である。また、鎌倉時代以降の土地開発によって多くの生活痕跡が削平を受け、本来の遺物包含層が水田耕作土として土壤化していったものと考えられる。

弥生時代前期の土器

出土遺物の中で特に目を引くものが、弥生時代前期の紀伊I-2様式に位置付けが可能な土器群である。第2次調査の3区3019土坑と周辺部に散在する古墳時代の遺構から出土した資料である。その資料は、本文中において紀伊I-2様式に位置付けた要素を表5において示した。

現在のところ、当該期に位置付けの可能な土器群は、和歌山県内では和歌山市神前遺跡の溝、御坊市堅田遺跡の土坑、日高郡みなべ町徳蔵地区遺跡の土坑・旧河川、西牟婁郡白浜町瀬戸遺跡の土坑、西牟婁郡すさみ町立野遺跡の自然流路などに認められる。但し、神前遺跡資料は、混在資料群の中から古い段階の遺物を抽出する必要がある。今後も資料の増加が期待されるところである。

今次の調査で後続する資料群は、第1次調査の018井戸資料となり、県内でも多くの資料群が認められる段階である。

検出された主な遺構(図60)

ここでは、検出された主要な遺構について、その位置付けを簡潔に示していきたい。

弥生時代前期の紀伊I-2様式段階の遺構・遺物の多くは、第2次調査の3区の南西部に位置する3019土坑を中心として散在的に存在する。本文で触れることができなかったが、2010自然流路の西肩に接して2007土坑が単独で位置する(遺物点数67点)。紀伊I-3様式段階では、第1次調査の南東側に僅かながら1基の井戸が存在するのみである。これらのことから、弥生時代前期の生活域は、調査地内では南側から北側に移動しながら変遷を辿ることになる。

弥生時代中期の紀伊III-3様式の遺構・遺物の内容は、第2次調査の2010自然流路より下位層や2011自然流路下層からの出土遺物のみで、その生活域を明確に推し量ることは難しい。紀伊IV-1様式段階では、第2次調査の2010自然流路最下層・下層、2011自然流路下層出土資料によって調査地に近接して生活域が営まれていたことは確実であるが、遺構が少なく明確にはし難い。弥生時代中期末から後期にかけての遺構・遺物は、現状では見受けられない。

続いて、遺物の出土量から顕著になるのが、弥生時代終末期の様相である。今回の調査地全体での遺物 28,294 点の中で弥生時代終末期の遺物 16,449 点が占める割合は、各時代の中で最も高い比率(58.1%)を占める。遺物の集中する箇所として、第 1 次調査の 205 自然流路(4,968 点)や第 2 次調査の 2010 自然流路中上層の遺物(1,282 点)、2001 土器溜まり(606 点)、4 区の二次的な遺物として捉えられる 4040 土坑(1,835 点)などがあり、遺構として第 2 次調査の 3 区の 3031・3032 井戸以外は、明確な遺構がない状態である。弥生時代終末期においても、弥生時代中期と同様に調査地に近接して生活域が営まれていたことは確実である。

古墳時代前期・中期と考えられる遺物は、二次的な形成土に含まれて出土することが多く、遺構の内容を明確に把握することは難しい。

古墳時代後期は、第 2 次調査の 3 区の掘立柱建物を始め、3 区の 3027・3062 土器埋設土坑や第 1 次調査の 011・005・004 井戸があり、一定の生活域の広がりが顕著に認められる。反面、第 2 次調査の 3 区では、古墳時代の遺物を伴う遺構は多いが、その性格を推し量れるだけの情報量に乏しい。また、第 2 次調査の 4 区南側の溝群は、出土遺物が少なく時期決定において未確定要素を含むが、古墳時代と考えた場合、居住域と生産域を画する遺構群として理解が可能である。また、第 1 次調査地全体に 205 自然流路の上層埋土(遺物包含層第 4 層)が薄く堆積しており、自然流路が埋没する過程において水害や流水方向の変化などがあったと考えられる。

奈良時代は、第 1 次調査の 001 井戸や第 2 次調査の 3 区の 3115 井戸によって生活域の存在を考えなければならない。その他、出土遺物と遺構の重複関係から奈良時代と考えた第 2 次調査の 1 区南端・2-2 区北端の溝状遺構・土坑列、4 区の杭列がある。

各遺構の時代変遷

各項目において記述した内容を整理し、主要な遺構の時期(もしくは、遺構・遺物包含層から出土した遺物の時期)を考えた場合、以下のような図式が可能となる(図 60 に対応)。古い時代

	第 1 次調査	第 2 次調査 1・2 区	第 2 次調査 3 区	第 2 次調査 4 区
江戸時代	遺物包含層第 2 層	包含層第 2 層?	機械掘削第 2 層	遺物包含層第 2 層
鎌倉時代	K 遺構			
鎌倉時代	遺物包含層第 3 層			
奈良時代	001 井戸	2021 溝状遺構・土坑列	3115 井戸	杭列
飛鳥時代		2021 溝状遺構?		
古墳時代後期	032 落ち込み?		3039 土坑・3108 土坑	溝群
古墳時代後期	遺物包含層第 4 層		掘立柱建物	溝群
古墳時代後期	005 井戸・004 井戸	2011 自然流路上層	3027 土坑・3062 土坑	溝群
古墳時代後期	011 井戸			
古墳時代前期・中期?		2003 土坑・2011 自然流路下層(縄蓆文)		
弥生時代終末期	206 土坑・012 土坑	2005 土坑・2003 土坑		
弥生時代終末期	205 自然流路	2010 自然流路中上層	3032 井戸・3031 井戸	
弥生時代中期	037 小穴・209 土坑	2010 自然流路下層		
弥生時代中期		2010 自然流路より下位層		
弥生時代前期	018 井戸			
弥生時代前期		3019 土坑		

以上のように、明確な居住の状況を示す遺構が少ない。古墳時代と考えられる掘立柱建物以外は間接的に人々の生活の痕跡を物語るものである。

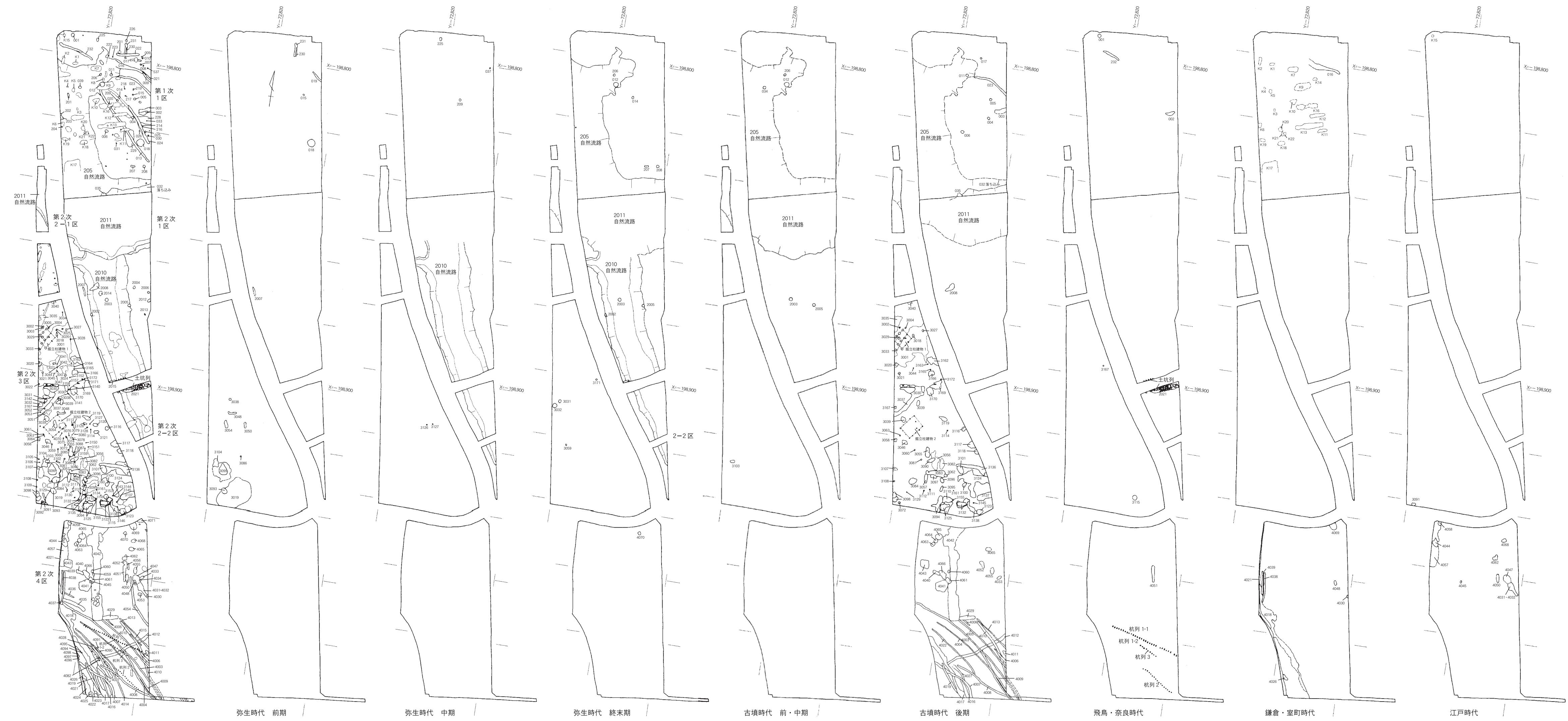


図 60 各時代の遺構変遷図

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
1	図21	17	35	116	第1次I9-b7	第2遺構面	018井戸南側中層	弥生土器	広口壺	口縁部	10%	全体にやや磨滅ぎみ、紀伊I-3様式、反転復元
2	図21	17	32	118 95 116	第1次I9-b6・7 I9-b6・7 I9-b7	第2遺構面	018井戸中層 北側 南側下層	弥生土器	壺	頸部～体部	50%	頸部と肩部に箋描線文を施した後その上に貼付突審を付す、頸部は縱方向の粗いハケ調整の後不定方向の粗いヘラミガキ調整を施す、内面の剥離・磨滅著しい、外面の遺存はまま良好、紀伊I-3様式一部反転復元
3	図21	17	38	132	第1次I9-b7	第2遺構面	018井戸取り上げ3	弥生土器	壺	体部	25%	内面の磨滅著しい、外面の遺存はまま良好、紀伊I-3様式、反転復元
4	図21	17	37	117	第1次I9-b7	第2遺構面	018井戸取り上げ1	弥生土器	壺	体部～底部	30%	外面部底から底部底面にかけて薄い黒斑有り、全体に剥離・磨滅著しい、紀伊I様式、反転復元
5	図21	17	33	173	第1次I9-b6・7	第2遺構面	018井戸セクション	弥生土器	壺	体部～底部	30%	外面部底から底部底面にかけて黒斑有り、底部底面も不定方向のヘラミガキ調整を施す、内面の剥離・磨滅著しい、外面の遺存はまま良好、紀伊I様式、一部反転復元
6	図21	17	36	116	第1次I9-b7	第2遺構面	018井戸南側下層	弥生土器	壺	底部	100%	内面と底部底面の磨滅著しい、外面底部はやや磨滅ぎみ、紀伊I様式、一部反転復元
7	図21	17	34	115	第1次I9-b7	第2遺構面	018井戸南側中層	弥生土器	壺	底部	30%	内面底部に焦げ付き有り、外面底部の一部に煤厚く付着する、全体にやや磨滅ぎみ、紀伊I様式、反転復元
8	図21	17	52	186	第1次I9-b1	第2遺構面	037小穴	弥生土器	高坏	脚台部	95%	外面裾部から内面にかけて黒斑有り、全体に磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、一部反転復元
9	図21	17	83	365	第1次I9-d3	第2遺構面	209土坑	弥生土器	手捏ね土器	口縁部～底部	65%	外面部底から底部底面にかけて黒斑有り、全体に磨滅著しい、口頭部がかなり歪む、外面肩部に箋先による刺突文、体部に稚拙で雑な櫛描波状文と直線文が各1条施される、紀伊IV-1様式、一部反転復元
10	図21	17	70	303	第1次I9-f8	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	壺	口縁部～体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元、細片のため口径不明確
11	図21	17	69	292	第1次I9-e8	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	壺	口縁部～体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元、細片のため口径不明確
12	図21	17	66	458 464	第1次I9-e7 I9-f7	第2遺構面	205自然流路 遺物集中1取り上げ1	弥生土器	広口壺	口縁部～体部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元
13	図21	17	68	481	第1次I9-e8	第2遺構面	205自然流路 遺物集中4取り上げ4	弥生土器	広口壺	口縁部	65%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
14	図21	—	67	464	第1次I9-f7	第2遺構面	205自然流路 遺物集中1取り上げ1	弥生土器	広口壺	口縁部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
15	図21	17	61	292 474	第1次I9-e8 I9-f8	第2遺構面	205自然流路 遺物集中4 遺物集中4	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	90%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元
16	図21	17	62	331	第1次I9-d10	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元
17	図21	17	63	337	第1次I9-e10	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	12%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元
18	図21	—	64	367	第1次I9-d10・11	第2遺構面	205自然流路 遺物集中13	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	12%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元
19	図21	17	65	464	第1次I9-f7	第2遺構面	205自然流路 遺物集中1取り上げ1	弥生土器	直口壺	口縁部～頸部	50%	全体に剥離・磨滅著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
20	図22	17	73	429	第1次I9-c11	第2遺構面	205自然流路 遺物集中12取り上げ12	弥生土器	壺	口縁部～体部	12%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元
21	図22	17	72	418	第1次I9-a10	第2遺構面	205自然流路 遺物集中5取り上げ5	弥生土器	壺	口縁部	35%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元
22	図22	—	74	461	第1次I9-f7	第2遺構面	205自然流路 遺物集中1取り上げ1	弥生土器	壺	体部～底部	50%	外面部底から底部底面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
23	図22	—	71	314	第1次I9-g10	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	壺	底部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
24	図22	17	78	473	第1次I9-e8	第2遺構面	205自然流路 遺物集中4取り上げ4	弥生土器	高坏	坏部	75%	内面口縁部に黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元
25	図22	17	79	477	第1次I9-e8	第2遺構面	205自然流路 遺物集中4取り上げ4	弥生土器	高坏	坏部	60%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元
26	図22	17	76	321	第1次I9-c10	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	高坏	脚柱部	100%	全体に剥離・磨滅著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
27	図22	17	75	309	第1次I9-f10	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	高坏	脚台部	75%	外面部底から内面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元
28	図22	17	77	472	第1次I9-e8	第2遺構面	205自然流路 遺物集中4取り上げ4	土師器	高坏	脚台部	80%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階か、一部反転復元
29	図22	—	80	309	第1次I9-f10	第2遺構面	205自然流路	弥生土器	鉢	体部～底部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
30	図22	17	81	416	I9-d9・10・11 I9-e9・10・11	第2遺構面	205自然流路 精査	弥生土器	小型鉢	口縁部～底部	75%	外面部口縁部から底部底面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階
31	図22	17	82	427	第1次I9-c10	第2遺構面	205自然流路 遺物集中11取り上げ11	弥生土器	鉢	底部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階
32	図22	17	60	292	第1次I9-e8	第2遺構面	205自然流路 遺物集中4	須恵器	蓋	体部～口縁部	20%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第5段階～第6段階（田辺TK209型式前後）、反転復元
33	図22	18	59	413	第1次I9-h6	西壁側溝 第4層205落ち込み	——	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	80%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
34	図22	18	58	376	第1次I9-g7	東西トレンチ南 第4層205落ち込み	——	弥生土器	壺	底部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元
35	図22	18	53	213	第1次I9-f10	包含層第4層	——	弥生土器	高坏	脚台部	25%	全体に磨滅著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
36	図22	18	55	229	第1次 I 9-e11	包含層第4層	——	土師器	高坏	脚柱部	90%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期か、一部反転復元
37	図22	18	54	226 229	第1次 I 9-e11 I 9-e11	包含層第4層 包含層第4層	——	須恵器	坏身	口縁部～ 体部	8%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅱ型式第1段階（田辺MT15型式）、反転復元
38	図22	18	56	255	第1次 I 9-b10・c10	包含層第4層 落ち込み	——	須恵器	高坏	脚裙部	15%	外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅰ型式第3段階～第4段階（田辺TK208型式～TK23型式）、反転復元
39	図22	—	57	266	第1次 I 8-g25	南北セクション 第4層	——	須恵器	蓋	体部～ 口縁	10%	外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅳ型式第1段階（田辺MT21型式）、反転復元
40	図22	18	28	138	第1次 I 9-e2	第1遺構面 011井戸上層 取り上げ1	011井戸上層 取り上げ1	土師器	甕	口縁部～ 体部	70%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期、一部反転復元
41	図22	18	30	163	第1次 I 9-e2	第1遺構面 011井戸下層 取り上げ5	011井戸下層 取り上げ5	土師器	甕	口縁部～ 体部	70%	全体に剥離・磨滅著しい、古墳時代後期、一部反転復元
42	図22	18	29	140	第1次 I 9-e2	第1遺構面 011井戸上層 取り上げ2	011井戸上層 取り上げ2	土師器	高坏	脚台部	60%	外面の一部にまばらに煤薄く付着する、全体に磨滅著しい、古墳時代後期、一部反転復元
43	図22	18	31	274	第1次 I 9-e2	第1遺構面 011井戸下層 取り上げ6	011井戸下層 取り上げ6	土師器	高坏	坏部～ 脚台部	40%	全体に磨滅著しい、古墳時代後期、一部反転復元
44	図22	18	26	133	第1次 I 9-c3	第1遺構面 005井戸下層 取り上げ1	005井戸下層 取り上げ1	土師器	甕	口縁部～ 体部	50%	外面肩部から体部にかけてと内面口縁部に黒斑有り、全体に遺存はまま良好、古墳時代後期、一部反転復元
45	図22	18	27	133	第1次 I 9-c3	第1遺構面 005井戸下層 取り上げ1	005井戸下層 取り上げ1	土師器	甕	口縁部～ 体部	15%	全体にやや磨滅ぎみ、古墳時代後期、反転復元
46	図22	18	25	098	第1次 I 9-c5	第1遺構面 004井戸上層	004井戸上層	土師器	高坏	坏部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期、一部反転復元
47	図23	18	47	192	第1次 I 9-a10	第1遺構面 032落ち込み 取り上げ2	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	30%	全体に磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元	
48	図23	—	42	149	第1次 I 9-c10・11	第1遺構面 032落ち込み	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	8%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、反転復元	
49	図23	18	46	188	第1次 I 9-c11	第1遺構面 032落ち込み 取り上げ7-1	弥生土器	壺	体部～ 底部	50%	外面体部から底部底面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅著しい、庄内式併行期新段階、反転復元	
50	図23	—	45	184	第1次 I 9-a10	第1遺構面 032落ち込み	弥生土器	甕	口縁部～ 体部	30%	外面下半部に煤付着の痕跡有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元	
51	図23	—	44	149	第1次 I 9-c10・11	第1遺構面 032落ち込み	弥生土器	甕	口縁部	10%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元	
52	図23	18	39	141	第1次 I 9-a10	第1遺構面 032落ち込み	弥生土器	高坏	坏部	25%	全体に磨滅著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
53	図23	—	40	142	第1次 I 9-a10	第1遺構面 032落ち込み	弥生土器	高坏	坏部～ 脚柱部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元	
54	図23	18	43	149	第1次 I 9-c10・11	第1遺構面 032落ち込み	土師器	高坏	脚台部	60%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元	
55	図23	—	41	142	第1次 I 9-a10	第1遺構面 032落ち込み	弥生土器	甕	体部～ 底部	50%	外面底部に薄い黒斑有り、全体に剥離・磨滅著しい、庄内式併行期新段階、一部反転復元	
56	図23	18	51	194	第1次 I 9-b10	第1遺構面 032落ち込み 取り上げ6	土師器	製塙土器	底部	100%	全体に剥離・磨滅著しい、全体に被熱、脚台3式、布留式併行期古段階、一部反転復元	
57	図23	18	50	194	第1次 I 9-b10	第1遺構面 032落ち込み	土師器	製塙土器	底部	50%	全体に磨滅極めて著しい、全体に被熱、脚台3式、布留式併行期古段階、反転復元	
58	図23	—	49	194	第1次 I 9-b10	第1遺構面 032落ち込み	土師器	製塙土器	底部	100%	全体に磨滅極めて著しい、全体に被熱、脚台3式、布留式併行期古段階、一部反転復元	
59	図23	—	48	194	第1次 I 9-b10	第1遺構面 032落ち込み	土師器	製塙土器	底部	50%	全体に磨滅極めて著しい、脚台3式、布留式併行期古段階、反転復元	
60	図23	18	22	156	第1次 I 8-h24	第1遺構面 001井戸中層	土師器	坏A	口縁部～ 底部	75%	全体に遺存はまま良好、奈良時代平城Ⅲ段階か	
61	図23	—	20	075	第1次 I 8-h24	第1遺構面 001井戸	土師器	甕	口縁部～ 体部	15%	全体に磨滅著しい、奈良時代平城Ⅲ段階か、反転復元	
62	図23	18	24	157	第1次 I 8-h24	第1遺構面 001井戸	土師器	製塙土器	口縁部～ 体部	10%	全体に磨滅著しい、奈良時代、反転復元	
63	図23	—	21	075	第1次 I 8-h24	第1遺構面 001井戸	須恵器	坏B	底部(高台)	25%	ロクロ回転方向：左回り、奈良時代平城Ⅲ段階か、反転復元	
64	図23	18	23	157	第1次 I 8-h24	第1遺構面 001井戸	須恵器	平瓶	口縁部～ 頸部	95%	外面口縁部から頸部の約1/3に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、奈良時代平城Ⅲ段階か	
65	図23	19	5	045	第1次 I 9-f1・g12	側溝	——	土師器	甕	口縁部～ 体部	45%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、奈良時代か、反転復元
66	図23	19	2	040	第1次 I 9-b11	側溝	032落ち込み の可能性有り	土師器	製塙土器	体部～ 脚台部	90%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、全体に被熱、脚台3式、布留式併行期古段階、反転復元
67	図23	—	3	040	第1次 I 9-b11	側溝	032落ち込み の可能性有り	須恵器	坏蓋	体部～ 口縁部	8%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅰ型式第5段階（田辺TK47型式）、反転復元
68	図23	19	4	043	第1次 I 9-d11	側溝	032落ち込み の可能性有り	須恵器	高坏	脚台部	10%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅰ型式第3段階（田辺TK208型式）、反転復元、細片のため脚据径不明確
69	図23	19	1	009	第1次 I 9-h8・9	側溝	——	白磁	皿	口縁部～ 体部	10%	口縁端部及び端面の釉搔き取り、室町時代、反転復元
70	図23	—	18	072	第1次 I 9-f1	第1遺構面 k 11攪乱	瓦器	楕	底部(高台)	45%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、焼成遺存磨滅著しく軟質化、鎌倉時代、反転復元	
71	図23	—	19	080	第1次 I 9-c6	第1遺構面 k 11攪乱	瓦器	小皿	口縁部～ 底部	40%	全体に磨滅著しい、焼成遺存磨滅著しくやや軟質化、鎌倉時代、反転復元	
72	図23	—	6	020	第1次 I 9-g1	包含層 (第3層)	——	弥生土器	直口壺	口縁部	10% 以下	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、断面のみ
73	図23	19	11	104	第1次 I 9-b9・10	包含層(落ち) 第3層	——	土師器	壺	口縁部～ 頸部	10%	外面口縁部下半に櫛描波状文の痕跡有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代前期、反転復元
74	図23	19	15	128	第1次 I 9-e11	包含層 (第3層)	——	土師器	高坏	脚柱部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代中期か、一部反転復元
75	図23	19	12	104	第1次 I 9-b9・10	包含層(落ち) 第3層	——	土師器	製塙土器	体部～ 底部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、全体に被熱、脚台3式、布留式併行期古段階、一部反転復元
76	図23	19	13	104	第1次 I 9-b9・10	包含層(落ち) 第3層	——	土師器	製塙土器	体部～ 底部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、全体に被熱、脚台3式、布留式併行期古段階、一部反転復元

遺物番号	捕図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
77	図23	—	10	092	第1次 I9-a9・10	包含層(落ち) 第3層	—	須恵器	壺蓋	口縁部	10%	ロクロ回転方向:不明、陶邑II型式第3段階(田辺MT85型式)、反転復元
78	図23	—	9	066	第1次 I9-f3	包含層(第3層)	—	須恵器	壺蓋	口縁部	10%以下	ロクロ回転方向:左回り、陶邑II型式第4段階(田辺TK43型式)、断面のみ
79	図23	19	17	129	第1次 I9-g10・11	包含層第3層	—	須恵器	壺身	口縁部～底部	25%	外側受け部から底部底面にかけて自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向:右回り、陶邑II型式第4段階(田辺TK43型式)、反転復元
80	図23	19	16	121 128 043	第1次 I9-d10・11 I9-e11 I9-d11	包含層(落ち) 第3層 包含層第3層 側溝	—	須恵器	無蓋高壺	壺部	25%	ロクロ回転方向:左回り、陶邑I型式第3段階(田辺TK208型式)、反転復元
81	図23	19	7	027	第1次 I8-d25	包含層(第3層)	—	須恵器	平瓶	頸部～体部	10%	ロクロ回転方向:右回り、陶邑III型式(田辺TK46型式前後)、一部反転復元
82	図23	19	14	127	第1次 I9-e10・11	包含層第3層	—	須恵器	壺身	口縁部～体部	20%	ロクロ回転方向:左回り、瓦質焼成、飛鳥II段階、陶邑II型式第6段階、反転復元
83	図23	—	8	060	第1次 I9-g10	包含層(第3層)	—	信楽系陶器	碗	体部～底部(高台)	15%	壺付から高台内露胎、露胎部:2.5Y8/2灰白色、施釉部:2.5Y8/3淡黄色、反転復元
94	図34	20	124	377	第2次1区 I9-b18	第2遺構面	2010自然流路より下位層 Eトレンチ	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、口縁部垂下面に凹線文の後綴位の箒描文、外側頸部直下に櫛描簾状文の痕跡有り、紀伊III-3様式、反転復元
95	図34	20	123	501	第2次2-2区 H10-x2	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外側頸部上位に櫛描波状文・下位に櫛描直線文の痕跡有り、紀伊IV-1様式、反転復元
96	図34	20	114	485	第2次1区 H9-x24・25	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
97	図34	20	113	485	第2次1区 H9-x24・25	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外側に櫛描直線文もしくは簾状文の僅かな痕跡有り、紀伊III-2様式、反転復元
98	図34	20	118	520	第2次1区 I9-a21	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
99	図34	20	120	538	第2次1区 I9-b19	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	33%	全体に磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
100	図34	20	119	614	第2次1区 I9-b18	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	高坏	口縁部～体部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
101	図34	20	116	485	第2次1区 H9-x24・25	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	高坏	脚柱部	55%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、一部反転復元
102	図34	20	117	498	第2次1区 I9-b23・24	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	高坏	脚台部	25%	外側裾部から内面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
103	図34	20	121	501	第2次2-2区 H10-x2	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	鉢	口縁部～体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元、細片のため口径不明確
104	図34	20	122	501	第2次2-2区 H10-x2	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	把手付鉢	口縁部～体部	3%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外面上半は箒描き斜格子文・下半は2本の窓状の原体を束ねた櫛描斜格子文を施す、その後に横位の把手を貼付する、紀伊III-3様式、反転復元、細片のため口径不明確
105	図34	20	115	485	第2次1区 H9-x24・25	第2遺構面	2010自然流路下層	弥生土器	器台	脚台部	25%	外側裾部に黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
106	図34	20	126	331	第2次2-2区 H10-x2	第2遺構面	2010自然流路中層 Fトレンチ	弥生土器	広口壺	口縁部	20%	全体に剥離・磨滅著しい、口縁部垂下面に円形浮文+竹管文が貼付られ全周する、内面口縁部に櫛描波状文が僅かに残る、紀伊IV-1様式、反転復元
107	図34	20	127	467	第2次1区 H9-x24	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	広口壺	口縁部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、口縁部内面に櫛描列点文が僅かに残る、紀伊IV-1様式、反転復元
108	図34	20	125	905	第2次2-1区 I9-a-d18	第2遺構面	2010自然流路上層 Eトレンチ駐	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
109	図34	20	133	507	第2次2-1区 I9-c20	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
110	図34	20	130	525	第2次1区 H9-b19	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	広口壺	口縁部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
111	図34	20	129	477	第2次1区 I9-b24	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	10%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外側口縁部に貼付られた円形浮文+竹管文の単位は不明、庄内式併行期古段階、反転復元
112	図34	20	134	507	第2次2-1区 I9-c20	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	壺	口縁部～体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元、細片のため口径不明確
113	図34	20	131	613	第2次1区 I9-b17	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	壺	口縁部～体部	7%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
114	図34	20	135	465	第2次2-2区 H10-y1	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	壺	口縁部～体部	6%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元、細片のため口径不明確
115	図34	20	136	466	第2次2-2区 H10-y2	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	高坏	壺部	10%	口縁部端面から内面の剥離・磨滅極めて著しい、外側の遺存はまだ良好、紀伊IV-1様式、反転復元
116	図34	20	132	499	第2次2-1区 H9-c21	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	高坏	脚台部	65%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、一部反転復元
117	図34	20	128	469	第2次1区 H9-x24	第2遺構面	2010自然流路上層	弥生土器	蓋	口縁部～摘み部	60%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式～3様式、一部反転復元
118	図35	20	103	859	第2次2-1区 I9-d18	第1遺構面	2001土器溜まり	弥生土器	広口壺	口縁部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
119	図35	20	104	901	第2次2-1区 I9-d18	第1遺構面	2001土器溜まり	弥生土器	広口壺	口縁部	10%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
120	図35	20	105	901	第2次2-1区 I9-d18	第1遺構面	2001土器溜まり	弥生土器	壺	口縁部～体部	8%	外側口縁部から頸部にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階か、反転復元、細片のため口径不明確
121	図35	20	102	859	第2次2-1区 I9-d18	第1遺構面	2001土器溜まり	弥生土器	高坏	脚柱部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
122	図35	20	99	363	第2次1区 I9-a19	第1遺構面	2005土坑	弥生土器	壺	口縁部～体部	10%	全体に磨滅著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
123	図35	21	146	596	第2次2-1区 I9-c16	第1遺構面	2011自然流路下層Gトレンチ	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	25%	全体に磨滅著しい、口縁部垂下面に凹線文の後綴位の箒描文、外側頸部上位に櫛描波状文・下位に凹線文の後櫛描簾状文を施す、紀伊III-3様式、反転復元
124	図35	21	145	593 596	第2次2-1区 I9-c15 I9-c16	第1遺構面	2011自然流路下層Gトレンチ 下層Gトレンチ	弥生土器	直口壺	口縁部～頸部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
125	図35	21	165	709	第2次3区 I9—i11	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	二重口縁壺	口縁部	10%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期中段階、反転復元
126	図35	21	143	570	第2次1区 H9—y11	第1遺構面	2011自然流路 下層	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
127	図35	21	166	749	第2次3区 I9—i11	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	壺	口縁部～ 体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期か、反転復元、細片のため口径不明確
128	図35	21	138	553	第2次1区 I9—a14	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	壺	口縁部～ 体部	6%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期新段階、反転復元、細片のため口径不明確
129	図35	21	144	593 596	第2次2-1区 I9—c15 I9—c16	第1遺構面	2011自然流路 下層Gトレンチ 下層Gトレンチ	弥生土器	高壺	壺部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊IV-1様式、反転復元
130	図35	21	167	749	第2次3区 I9—i11	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	高壺 (器台か)	壺部	50%	内面の受け部突帯はやや歪、全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期か、一部反転復元
131	図35	21	141	569	第2次1区 I9—b14	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	高壺	脚台部	80%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
132	図35	21	139	554	第2次1区 I9—a14	第1遺構面	2011自然流路 下層	土師器	高壺	脚台部	60%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期中段階か、一部反転復元
133	図35	—	142	569	第2次1区 I9—b14	第1遺構面	2011自然流路 下層	須恵器	高壺	脚台部	25%	外側全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑I型式第4段階か（田辺TK23型式か）、反転復元
134	図35	—	147	652	第2次2-1区 I9—c11·12 d12	第1遺構面	2011自然流路 下層確認 トレンチ	弥生土器	広口壺 (器台か)	口縁部	14%	全体に遺存はまま良好、内外面共にまばらにタール状の付着物有り、庄内式併行期古段階、反転復元
135	図35	—	158	578	第2次1区 I9—b14	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	広口壺	口縁部～ 頸部	20%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
136	図35	21	162	604	第2次2-1区 I9—f·g13	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	壺	口縁部～ 頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期新段階、反転復元
137	図35	21	151	603	第2次2-1区 I9—f14	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	二重口縁壺	口縁部～ 頸部	40%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、反転復元
138	図35	—	154	557	第2次1区 H9—y11	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元、細片のため口径不明確
139	図35	—	159	573	第2次2-1区 I9—f15·16	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	壺	体部～ 底部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階か、一部反転復元
140	図35	21	150	893	第2次2-1区 I9—c15	第1遺構面	2011自然流路 上層Gトレンチ 畦	土師器	壺	体部～ 底部	75%	外側体部から底部底面にかけて部分的に煤付着する、全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
141	図35	21	149	591	第2次2-1区 I9—c14	第1遺構面	2011自然流路 Gトレンチ	弥生土器	高壺	壺部	40%	全体に剥離やや著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
142	図35	21	160	599	第2次2-1区 I9—c14	第1遺構面	2011自然流路 上層	弥生土器	高壺	脚台部	60%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、一部反転復元
143	図35	21	161	602	第2次2-1区 I9—e14	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	高壺	壺部～ 脚台部	40%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
144	図35	21	153	542	第2次1区 H9—y13	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	高壺	壺部～ 脚台部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
145	図35	21	156	561	第2次1区 I9—a12	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	高壺	脚柱部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
146	図35	21	148	591	第2次2-1区 I9—c14	第1遺構面	2011自然流路 Gトレンチ	土師器	高壺	壺部～ 脚台部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
147	図35	21	152	535	第2次1区 I9—a14	第1遺構面	2011自然流路 上層	土師器	高壺	壺部～ 脚台部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
148	図36	22	140	562 559	第2次1区 I9—a12 I9—a11	第1遺構面	2011自然流路 下層 上層	須恵器	壺蓋	天井部～ 口縁部	50%	外側全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑I型式第3段階（田辺TK208型式）、一部反転復元
149	図36	22	157	564	第2次1区 I9—b11	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	壺蓋	天井部～ 口縁部	20%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑I型式第4段階前後か（田辺TK23型式前後）、反転復元
150	図36	22	163	702	第2次3区 I9—i13	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	壺蓋	天井部～ 口縁部	15%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
151	図36	22	164	702 708	第2次3区 I9—i13 I9—i11	第1遺構面	2011自然流路 上層 上層	須恵器	壺身	口縁部～ 底部	10%	外側に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第4段階（田辺TK43型式）、一部反転復元
152	図36	22	137	553 542	第2次1区 I9—a14 H9—y13	第1遺構面	2011自然流路 下層 上層	須恵器	•	頸部～ 体部	50%	外側全体と内面口縁部に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：不明、陶邑I型式第4段階～第5段階か（田辺TK23型式～TK47型式か）、一部反転復元
153	図36	22	155	559	第2次1区 I9—a11	第1遺構面	2011自然流路 上層	須恵器	高壺	壺部～ 脚台部	25%	壺部内面に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑I型式第3段階か（田辺ON46型式～TK208型式か）、一部反転復元
154	図36	22	110	435	第2次2-2区 H10—x1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	壺身	口縁部～ 体部	5%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第5段階～第6段階、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
155	図36	22	112	547	第2次2-2区 H10—y1	第1遺構面	2048土坑	須恵器	壺身	口縁部～ 体部	6%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第5段階～第6段階か、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
156	図36	22	100	403	第2次1区 H9—y25	第1遺構面	2019土坑 (土坑列)	須恵器	壺身	口縁部～ 体部	5%	外側全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第6段階、反転復元、細片のため口径不明確
157	図36	22	109	435	第2次2-2区 H10—x1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	壺蓋	天井部～ 口縁部	15%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑IV型式第1段階か、反転復元
158	図36	22	101	403	第2次1区 H9—y25	第1遺構面	2019土坑 (土坑列)	須恵器	壺B	底部 (高台)	25%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑IV型式、反転復元
159	図36	22	108	435	第2次2-2区 H10—x1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	壺	体部～ 底部	10%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑IV型式第1段階か、飛鳥or奈良時代か、反転復元
160	図36	22	111	436	第2次2-2区 I10—y1	第1遺構面	2021溝状遺構	須恵器	壺か	口縁部	5%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑IV型式第1段階か、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
161	図36	22	106	434	第2次2-2区 H10—x1	第1遺構面	2021溝状遺構	黒色土器 A類	椀	口縁部～ 底部	20%	外側は分割による軽いヘラケズリ調整、全体に磨滅著しい、平安時代後期、反転復元
162	図36	22	107	434 454	第2次2-2区 H10—x1	第1遺構面	2021溝状遺構	瓦器	椀or鉢	底部 (高台)	100%	全体に磨滅著しい、焼成遺存やや軟質化、平安時代後期、一部反転復元
163	図36	22	93	259	第2次2-2区 H10—x3	包含層 第2層	—	須恵器	壺蓋	天井部～ 口縁部	15%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
164	図36	22	85	114	第2次1区 I 9-a24	包含層 第2層	——	須恵器	坏蓋	天井部～ 口縁部	15%	外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅱ型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
165	図36	22	88	142	第2次2-2区 H10-y2・3	包含層 第2層	——	須恵器	坏蓋	天井部～ 口縁部	8%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅲ型式第1段階（田辺TK217型式）、反転復元、細片のため口径不明確
166	図36	22	96	336	第2次2-2区 H10-y2	包含層 第2層	——	須恵器	坏蓋	天井部～ 口縁部	8%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅲ型式第2段階～第3段階（田辺TK217型式～TK46型式）、反転復元、細片のため口径不明確
167	図36	22	91	259	第2次2-2区 H10-x3	包含層 第2層	——	須恵器	坏蓋	口縁部	8%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅲ型式第1段階～第2段階、反転復元、細片のため口径不明確
168	図36	22	84	112	第2次1区 H9-y23	包含層 第2層	——	須恵器	坏身	口縁部～ 底部	15%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅱ型式第2段階～第3段階（田辺TK10型式～MT85型式）、反転復元
169	図36	22	98	368	第2次2-2区 H10-v6	包含層 第2層	——	須恵器	坏身	口縁部～ 底部	15%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅱ型式第4段階（田辺TK43型式）、反転復元
170	図36	22	97	368	第2次2-2区 H10-v6	包含層 第2層	——	須恵器	坏身	口縁部～ 体部	10%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅱ型式第5段階（田辺TK209型式）、反転復元
171	図36	22	90	255	第2次2-2区 H10-v6	包含層 第2層	——	須恵器	壺	口縁部	8%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅳ型式か、反転復元、細片のため口径不明確
172	図36	22	94	281	第2次2-2区 H10-x4	包含層 第2層	——	須恵器	壺	口縁部～ 頸部	15%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅳ型式か、反転復元
173	図36	22	86	131	第2次1区 H9-y25	包含層 第2層	——	須恵器	壺	口縁部	6%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅰ型式第1段階（田辺TK73型式）、反転復元、細片のため口径不明確
174	図36	22	95	333	第2次2-2区 H10-x3	包含層 第2層	——	須恵器	壺	口縁部	5%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅲ型式第1段階（田辺TK217型式）、反転復元、細片のため口径不明確
175	図36	22	89	142	第2次2-2区 H10-y2・3	包含層 第2層	——	須恵器	壺	口縁部	10%	内面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅱ型式第6段階、反転復元、細片のため口径不明確
176	図36	22	92	259	第2次2-2区 H10-x3	包含層 第2層	——	須恵器	高坏	脚台部	15%	内外面共に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅰ型式第4段階（田辺TK23型式）、反転復元
177	図36	22	87	279	第2次2-1区 I 9-d13	包含層 第2層	——	土師器	高坏	脚柱部	100%	脚柱部は粘土紐巻き上げ技法による成形、全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階、一部反転復元
196	図50	24	177	734 735	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5 取り上げ区画6下層	弥生土器	広口壺	口縁部～ 体部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外顎部と体部上位に削出突帯を施す、紀伊I-2様式、反転復元	
197	図50	24	175	731	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	広口壺	口縁部～ 体部	20%	内面の剥離・磨滅極めて著しい、外顎部と体部上位に削出突帯+1条の箋描沈線文を施す、紀伊I-2様式、反転復元	
198	図50	24	183	737 884	第2次3区 I 10-c9-d9	3019土坑 取り上げ区画1 取り上げ区画1	弥生土器	広口壺	口縁部～ 底部	60%	外顎部から体部中位と体部下半から底部にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、外顎部上位に箋描沈線文3条・上端は削り出し、紀伊I-2様式、一部反転復元	
199	図50	24	178	735	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画6下層	弥生土器	広口壺	口縁部～ 頸部	20%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外顎部に稚拙な箋描沈線文3条を施す、紀伊I-2様式、反転復元	
200	図50	—	181	742	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	広口壺	口縁部～ 頸部	60%	全体に磨滅極めて著しい、外顎部に箋描沈線文2条を施す、紀伊I-2様式、反転復元	
201	図50	24	174	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	弥生土器	広口壺	口縁部～ 頸部	20%	内面の剥離・磨滅極めて著しい、外顎部上位に磨滅著しい、紀伊I-2様式、反転復元	
202	図50	24	180	731	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	壺	体部	5%	全体に磨滅極めて著しい、外顎部上位に削り出し突帯を施す、紀伊I-2様式、反転復元、細片のため体部径不明確	
203	図50	24	176	731	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	8%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外顎部上位に凹線文様の箋描沈線文を施す、紀伊I-2様式、反転復元、細片のため口径不明確	
204	図50	—	182	742	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	壺	体部～ 底部	50%	外面部底から底部底面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、一部反転復元	
205	図50	—	179	689	第2次3区 I 10-d11	3019土坑	弥生土器	壺	底部	100%	外面部底から底部底面にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、反転復元	
206	図50	24	187	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	繩文土器	深鉢	体部	—	全体に剥離・磨滅極めて著しい、貼付突带上に浅いV字刻みが施される、繩文時代晩期、細片のため天地逆の可能性もあり	
207	図50	24	196	742	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	繩文土器	深鉢	体部	—	全体に剥離・磨滅極めて著しい、貼付突带上に浅いV字刻みが施される、繩文時代晩期、細片のため天地逆の可能性もあり	
208	図50	24	194	735	第2次3区 ——	3019土坑 下層 取り上げ区画6	繩文土器	深鉢	体部	—	全体に剥離・磨滅極めて著しい、貼付突带上に深めのD字刻みが施される、繩文時代晩期、細片のため天地逆の可能性もあり	
209	図50	24	195	741	第2次3区 I 10-d10	3019土坑 下層 取り上げ区画5	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	8%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、口唇部に浅いV字刻みが施される、紀伊I-2様式、細片のため口径不明確	
210	図50	24	184	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	12%	部分的に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式、反転復元	
211	図50	24	197	885	第2次3区 I 10-c10	3019土坑 取り上げ区画1	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外顎部直下に箋描沈線文2条の痕跡有り、紀伊I-2様式、細片のため口径不明確	
212	図50	24	192	733	第2次3区 ——	3019土坑 下層 取り上げ区画2	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	10%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、口唇部に浅いV字刻みが施される、外顎部直下に箋描沈線文2条の痕跡有り、紀伊I-2様式、反転復元	
213	図50	24	185	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	6%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、外顎部に縦位のハケ調整が僅かに遺る、紀伊I-2様式、反転復元	
214	図50	24	198	886	第2次3区 I 10-c10	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	—	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式、細片のため断面と外顎のみ	
215	図50	—	186	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	—	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式、細片のため断面と外顎のみ	
216	図50	24	191	731	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	壺	口縁部～ 体部	12%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式、反転復元	
217	図50	24	189	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	弥生土器	壺	体部～ 底部	15%	外面部底から底部底面の一部にかけて黒斑有り、部分的に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、反転復元	
218	図50	24	188	724	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画4	弥生土器	壺	体部～ 底部	10%	部分的に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、反転復元	
219	図50	24	190	730	第2次3区 ——	3019土坑 取り上げ区画5	弥生土器	壺	体部～ 底部	50%	外面部底から底部底面の一部にかけて黒斑有り、内面の一部を除いて剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、反転復元	

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
220	図50	24	193	734	第2次3区 ——	——	3019土坑 下層 取り上げ区画5	弥生土器	甌	底部	100%	外面底部から底部底面の一部にかけて黒斑有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、反転復元
221	図51	25	234	845	第2次3区 I 10-b10	——	3135土坑	縄文土器	深鉢	口縁部～体部	5%	外面体部の貼付突帯以下に煤付着の痕跡有り、内面の剥離・磨滅極めて著しい、外面の磨滅やや著しい、口唇部と体部の貼付突帯上に深いV字刻みが施される、縄文時代晚期、反転復元、細片のため口径不明確
222	図51	25	232	851	第2次3区 I 10-d・e8	——	3099土坑	弥生土器	広口壺	口縁部～頸部	15%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、反転復元
223	図51	25	233	812 867	第2次3区 I 10-e8 I 10-d・e8	——	3104土坑 3099土坑疊	弥生土器	甌	口縁部～体部	15%	外面頸部以下に煤付着の痕跡有り、全体に剥離・磨滅極めて著しい、外面頸部直下に筐描沈線文3条を施す、沈線文間に籠による横位刺突文を施す、紀伊I-2様式、反転復元
224	図51	25	217	743	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸	弥生土器	広口壺	口縁部	25%	全体にやや磨滅ぎみ、庄内式併行期古段階、反転復元
225	図51	25	218	927	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸	弥生土器	広口壺	口縁部	10%	全体に磨滅極めて著しい、庄内式併行期古段階、反転復元
226	図51	25	219	933	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸	弥生土器	広口壺	口縁部	25%	内面は磨滅著しい、外面はやや磨滅ぎみ、庄内式併行期古段階、反転復元
227	図51	25	222	938	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸 最下層	弥生土器	壺	頸部～底部	95%	全体に遺存はまま良好、庄内式併行期古段階か、一部反転復元
228	図51	25	221	933	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸	弥生土器	壺	頸部～底部	50%	外面体部下半から底部底面にかけて黒斑有り、全体に遺存はまま良好、庄内式併行期古段階か、一部反転復元
229	図51	—	216	743	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸	弥生土器	甌	体部～底部	10%	外面底部に煤厚く付着する、内面は磨滅著しい、外面の遺存はまま良好、庄内式併行期古段階か、反転復元
230	図51	25	220	933	第2次3区 I 10-f3	——	3032井戸	弥生土器	鉢か	体部～底部	60%	内外面共に体部下半が帯状に黒色化する、全体に磨滅やや著しい、庄内式併行期古段階か、一部反転復元
231	図51	25	205	915	第2次3区 I 10-f3	——	3031井戸 疊	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	8%	外面に黒斑有り、全体に磨滅やや著しい、庄内式併行期古段階、反転復元、細片のため口径不明確
232	図51	25	204	915	第2次3区 I 10-f3	——	3031井戸 疊	弥生土器	広口壺	口縁部	12%	全体に磨滅極めて著しい、阿波式土器、庄内式併行期古段階、反転復元
233	図51	25	207	872	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ1	須恵器	坏身	口縁部～底部	100%	外面受け部以下に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第1段階（田辺MT15型式）
234	図51	25	208	876	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ3の下	須恵器	坏身	口縁部～底部	30%	外面受け部以下に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第1段階（田辺MT15型式）、反転復元
235	図51	25	206	716 875-1	第2次3区 I 9-e22 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ3	土師器	把手付深鉢	口縁部～底部	80%	外面口縁部から体部中位とその反対側の体部中位の2箇所に黒斑有り、内面の磨滅著しい、外の遺存はまま良好、全体に歪み著しい、特に口縁部と底部の歪みは極めて著しい、古墳時代後期、一部反転復元
236	図51	25	210	876	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ3の下	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
237	図51	25	214	878	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ4の下	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み極めて著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
238	図51	25	212	876	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ3の下	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
239	図51	25	213	877	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ4	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
240	図51	25	215	879	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ5	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
241	図51	25	209	876	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ3の下	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
242	図51	25	211	876	第2次3区 I 9-e22	——	3027土坑 取り上げ3の下	土師器	手捏ね小椀	口縁部～底部	100%	口縁部の歪み著しい、全体に磨滅著しい、古墳時代後期
243	図51	26	225	882	第2次3区 I 10-b8	——	3062土坑 取り上げ2	土師器	坏	口縁部～底部	95%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期か
244	図51	26	224	881	第2次3区 I 10-b8	——	3062土坑 取り上げ1	土師器	坏	口縁部～底部	95%	口縁部の歪み著しい、全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期か
245	図52	26	200	728	第2次3区 I 10-e2	——	3030土坑	弥生土器	広口壺	口縁部～体部	20%	内面の剥離・磨滅極めて著しい、外は部分的に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式、反転復元
246	図52	26	201	728	第2次3区 I 10-e2	——	3030土坑	弥生土器	甌	体部～底部	50%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、紀伊I-2様式か、一部反転復元
247	図52	26	252	843	第2次3区 H10-y8	——	3124土坑	土師器	高坏	脚柱部	100%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、布留式併行期古段階か、一部反転復元
248	図52	26	203	728	第2次3区 I 10-e2	——	3030土坑	須恵器	坏蓋	体部～口縁部	5%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元、細片のため口径不明確
249	図52	—	251	842	第2次3区 H10-y10	——	3122土坑	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	25%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
250	図52	26	250	842	第2次3区 H10-y10	——	3122土坑	須恵器	坏蓋	体部～口縁部	25%	外面全體に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
251	図52	26	253	843	第2次3区 H10-y8	——	3124土坑	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	30%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第2段階～第3段階（田辺TK10型式～MT85型式）、反転復元
252	図52	26	255	843	第2次3区 H10-y8	——	3124土坑	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	15%	外面全體に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
253	図52	26	254	843	第2次3区 H10-y8	——	3124土坑	須恵器	坏蓋	天井部～口縁部	25%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第3段階～第4段階（田辺MT85型式～TK43型式）、一部反転復元
254	図52	26	199	713	第2次3区 I 10-f・g1	——	3021土坑	須恵器	坏身	口縁部～底部	25%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第2段階（田辺TK10型式）、反転復元
255	図52	26	202	728	第2次3区 I 10-e2	——	3030土坑	須恵器	坏身	口縁部～体部	5%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第4段階（田辺TK43型式）、反転復元、細片のため口径不明確
256	図52	26	223	768	第2次3区 I 9-e6	——	3046土坑	須恵器	坏身	口縁部～体部	10%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
257	図52	26	228	808	第2次3区 I 10-b10	——	3094土坑	須恵器	坏身	口縁部～体部	15%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
258	図52	26	230	802	第2次3区 I 10-e・f10	——	3098土坑	須恵器	坏身	口縁部～底部	75%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第2段階（田辺TK10型式）、一部反転復元
259	図52	26	257	843	第2次3区 H10-y8	——	3124土坑	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	外面受け部以下に自然釉厚く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元、細片のため口径不明確

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
260	図52	26	227	808	第2次3区 I10-b10	——	3094土坑	須恵器	壺	口縁部	25%	外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
261	図52	26	256	843	第2次3区 H10-y8	——	3124土坑	須恵器	広口壺	口縁部～頸部	10%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元、細片のため口径不明確
262	図52	26	229	808	第2次3区 I10-b10	——	3094土坑	須恵器	壺	口縁部	20%	外面共に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第2段階（田辺TK10型式）、反転復元
263	図52	26	258	868	第2次3区 I9-d24	——	3162土坑	須恵器	器台	口縁部～体部	5%	外面共に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑I型式第1段階（田辺TK73型式）、反転復元、細片のため口径不明確
264	図52	26	226	918	第2次3区 I10-e11	——	3091土坑	土師質土器	焙烙	口縁部～底部	25%	外面口縁部から腰部にかけて煤厚く付着する、全体に磨滅やや著しい、江戸時代、反転復元
265	図52	26	231	802	第2次3区 I10-e-f10	——	3098土坑	陶器	餐盤 (びんたらい)	口縁部～底部	50%	化粧道具、全体に粗い貫入有り、片側面に草文を施す、底部底面は露胎
266	図53	27	237	934 935	第2次3区 H10-y9・10 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内 井側内	土師器	皿	口縁部～底部	30%	全体に遺存はまま良好、底部底面は粗いヘラミガキ調整が施される、見込に連結輪状、見込から口縁部にかけて放射状暗文が施される、奈良時代平城II段階か、一部反転復元
267	図53	27	236	934 935	第2次3区 H10-y9・10 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	皿	口縁部～底部	25%	全体に遺存はまま良好、見込に連結輪状、見込から口縁部にかけて放射状暗文が施される、奈良時代平城II段階か、反転復元
268	図53	27	235	934 935	第2次3区 H10-y9・10 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	皿	口縁部～底部	40%	底部底面全体に煤厚く付着する、外間に二次焼成の痕跡有り、全体に遺存はまま良好、見込に連結輪状の暗文が施される、奈良時代平城II段階か、反転復元
269	図53	27	238	935	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	須恵器	皿	口縁部～底部	95%	全体に遺存はまま良好、内面5Y4/1灰色～5Y3/1オリーブ黒色、外面2.5Y5/1or4/1黄灰色～7.5YR4/2灰褐色、奈良時代平城II段階か
270	図53	27	249	937	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	薬壺	口縁部～底部	90%	全体に剥離・磨滅やや著しい、焼成堅緻、外表面以下は横位の4分割のヘラミガキ調整が施される、奈良時代平城II段階か
271	図53	27	246	935	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	壺	口縁部～底部	95%	底部底面を省く外面全体に煤薄く付着する、内面体部上半から口縁部にかけて焦げ付きが認められる、全体に遺存はまま良好、内面は横位のハケ調整後ユビナデ及びユビオサエ調整、外表面は縦位のハケ調整が施される、奈良時代平城II～III段階か
272	図53	27	245	934 935	第2次3区 H10-y9・10 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内 井側内	土師器	壺	口縁部～底部	90%	底部底面を省く外面全体に煤厚く付着する、内面体部上半から口縁部にかけて焦げ付きが認められる、全体に遺存はまま良好、内面はユビナデ及びユビオサエ調整・外表面は縦位のハケ調整が施される、奈良時代平城II～III段階か
273	図53	27	244	934 935	第2次3区 H10-y9・10 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内 井側内	土師器	壺	頸部～底部	75%	外面全体に煤厚く付着する、内面体部上半から頸部にかけて焦げ付きが認められる、全体に遺存はまま良好、内面は縦位のハケ調整後ユビオサエ調整・体部上半は横位のハケ調整・外表面は縦位のハケ調整が施される、口縁部は打ち欠きの可能性有り、奈良時代平城II～III段階か
274	図53	27	239	934	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	壺	口縁部～底部	67%	外面全体に二次焼成の痕跡有り、全体に遺存はまま良好、口縁部は打ち欠きの可能性有り、奈良時代平城II～III段階か、一部反転復元
275	図53	27	243	854	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸	土師器	壺	口縁部～体部	8%	外面全体に煤薄く付着する、全体にやや磨滅ぎみ、内面は板状工具による縦位のナデ調整後一部に横位のハケ調整、外表面は縦位のハケ調整が施される、奈良時代平城II～III段階か、反転復元
276	図53	27	242	934	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	壺	口縁部～底部	80%	外面全体に二次焼成の痕跡有り、外面全体に斑らに煤薄く付着する、全体に遺存はまま良好、内面は板状工具による横位のナデ調整・外表面は縦位の粗いヘラケズリ調整が施される、奈良時代平城II～III段階か、一部反転復元
277	図54	28	241	934	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	壺	体部～底部	75%	外面体部下半から底部底面にかけて煤薄く付着する、全体に遺存はまま良好、内面は板状工具による横位のナデ調整・外表面は縦位の粗いヘラケズリ調整が施される、奈良時代平城II～III段階か、一部反転復元
278	図54	28	240	934	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	壺	頸部～底部	90%	外面全体に二次焼成の痕跡有り、全体に遺存はまま良好、内面は板状工具によるナデ後縦位のユビナデ調整・外表面は一見ヘラミガキ調整に見える縦位の軽いヘラケズリ調整が施される、口縁部は打ち欠きの可能性有り、奈良時代平城II～III段階か、一部反転復元
279	図54	28	247	935	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	土師器	壺	頸部～体部	25%	全体に遺存はまま良好、内面は斜め左上がりの粗いハケ調整・外表面は縦位の粗いハケ調整が施される、口縁部は打ち欠きの可能性有り、奈良時代平城II～III段階か、反転復元
280	図54	28	248	934	第2次3区 H10-y9・10	——	3115井戸 井側内	須恵器	壺	口縁部～体部	5%	ロクロ回転方向：右回り、外表面頸部以下はタタキ整形後回転ナデ調整が施される、奈良時代平城II～III段階か、反転復元、細片のため口径不明確
281	図54	28	173	751	第2次3区 I10-e3	包含層 第3層	——	須恵器	坏蓋	体部～口縁部	10%	外面上に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
282	図54	28	171	750	第2次3区 I9-f3	包含層 第3層	——	須恵器	坏身	口縁部～体部	20%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式）、反転復元
283	図54	28	172	750	第2次3区 I9-f3	包含層 第3層	——	須恵器	皿	口縁部～底部	——	ロクロ回転方向：左回り、奈良時代、細片のため断面のみ
284	図54	28	168	574	第2次3区	機械掘削 第2層	——	須恵器	坏身	口縁部～体部	5%	外面体部に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑II型式第3段階（田辺MT85型式か）、反転復元、細片のため口径不明確
285	図54	28	169	575	第2次3区	機械掘削 第2層	——	中国製染付	碗	体部～底部(高台)	25%	粗い貫入僅かに有り、置付は露胎、外面体部に蕉葉文、江戸時代、反転復元
286	図54	28	170	637	第2次3区	機械掘削 第2層	——	肥前系染付	碗	体部～底部(高台)	8%	外面体部に草花文、外面高台部に2条の巻線、置付は露胎、江戸時代、反転復元
293	図59	29	282	451	第2次4区 I10-a16	4040土坑 (土器溜まり)	——	土師器	高壺	坏部	5%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期か、反転復元、細片のため口径不明確
294	図59	29	283	410 452	第2次4区 I10-a16 I10-a16	4040土坑 (土器溜まり)	——	土師器	高壺	坏部	25%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期か、反転復元
295	図59	29	281	305	第2次4区 I10-a16	4040土坑 (土器溜まり)	——	土師器	高壺	脚柱部	75%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、古墳時代後期か、一部反転復元
296	図59	29	274	209 166 14	第2次4区 H10-w25 H10-t21 H10-x25	包含層第2層 包含層第2層	4017溝 ——	須恵器	平瓶か	口縁部～頸部	50%	内外面共に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑III型式第3段階、反転復元

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
297	図59	29	273	168	第2次 4区 H10-u20	——	4015溝	縄文土器	深鉢	口縁部	——	全体に磨滅著しい、口唇部の貼付突带上に深いV字刻みが施される、縄文時代晚期
298	図59	29	279	317 430	第2次 4区 I 10-c16 I 10-b16	——	4021溝 4039溝	土師器	壺	口縁部～頸部	13%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、奈良時代、反転復元、細片のため口径不明確
299	図59	29	280	450	第2次 4区 H10-x25	——	4022溝	土師器	土釜	口縁部	8%	全体に剥離・磨滅極めて著しい、室町時代、反転復元、細片のため口径不明確
300	図59	29	284	294	第2次 4区 H10-w15	——	4052土坑	須恵器	壺	口縁部	5%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅰ型式第4段階（田辺TK23型式）、反転復元
301	図59	29	277	213	第2次 4区 H10-x24	——	4020溝	須恵器	壺	口縁部～頸部	7%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅰ型式第5段階か（田辺TK47型式か）、反転復元、細片のため口径不明確
302	図59	29	276	211	第2次 4区 H10-x24	——	4018溝	須恵器	平瓶	口縁部～体部	30%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅱ型式第6段階、反転復元
303	図59	29	285	294	第2次 4区 H10-w15	——	4052土坑	須恵器	壊身	口縁部～体部	5%	ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅱ型式第4段階（田辺TK43型式）、反転復元、細片のため口径不明確
304	図59	29	286	343	第2次 4区 I 10-b13	——	4064土坑	須恵器	壊身	口縁部～体部	5%	ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅱ型式第4段階（田辺TK43型式）、反転復元、細片のため口径不明確
305	図59	29	275	249	第2次 4区 I 9-b20	——	4018溝	須恵器	壊蓋	天井部～体部	30%	全体に磨滅著しい、ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅲ型式第3段階前後か、一部反転復元
306	図59	29	278	246	第2次 4区 H10-y23	——	4021溝	龍泉窯系青磁	碗	口縁部	8%	外面口縁部に片切彫りによる雷文帯が施される、室町時代、反転復元、細片のため口径不明確
307	図59	29	267	81	第2次 4区 I 10-b14	包含層第2層	——	須恵器	短頭壺	口縁部～体部	15%	外面肩部以下に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、陶邑Ⅱ型式第2段階（田辺TK10型式）、反転復元
308	図59	29	260	8	第2次 4区 H10-v24	包含層第2層	——	須恵器	壺	口縁部～頸部	10%	内外面共に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：左回り、陶邑Ⅱ型式第2段階（田辺TK10型式）、反転復元、細片のため口径不明確
309	図59	29	266	78	第2次 4区 I 10-a15	包含層第2層	——	須恵器	壺	口縁部～体部	10%	全体に磨滅極めて著しい、ロクロ回転方向：左回り、極めて軟質、陶邑Ⅱ型式第4段階か（田辺TK43型式か）、反転復元
310	図59	29	272	109	第2次 4区 I 10-b12	包含層第2層	——	須恵器	壊身	口縁部～体部	15%	全体に磨滅著しい、ロクロ回転方向：右回り、奈良時代平城Ⅱ段階前後か、一部反転復元
311	図59	29	271	109	第2次 4区 I 10-b12	包含層第2層	——	須恵器	壊蓋	天井部～体部	60%	外面全体に自然釉薄く付着する、ロクロ回転方向：右回り、奈良時代平城Ⅱ段階前後か、一部反転復元
312	図59	29	270	109	第2次 4区 I 10-b12	包含層第2層	——	須恵器	壊蓋	天井部～体部	50%	ロクロ回転方向：右回り、奈良時代平城Ⅱ段階前後か、一部反転復元
313	図59	29	264	43	第2次 4区 H10-y19	包含層第2層	——	須恵器	壊	口縁部～底部	25%	全体に磨滅著しい、やや軟質、奈良時代平城Ⅱ段階前後か、反転復元
314	図59	29	268	81	第2次 4区 I 10-b14	包含層第2層	——	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	6%	外面口縁部端面に自然釉薄く付着する、鎌倉時代、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
315	図59	29	262	26	第2次 4区 H10-u16	包含層第2層	——	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	5%	外面口縁部端面に自然釉薄く付着する、鎌倉時代、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
316	図59	29	261	11	第2次 4区 H10-w25	包含層第2層	——	白磁	碗	口縁部～体部	8%	鎌倉時代、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
317	図59	29	269	86	第2次 4区 I 10-c16	包含層第2層	——	肥前系磁器	碗	底部(高台)	25%	置付は露胎、江戸時代、反転復元
318	図59	29	263	29	第2次 4区 H10-u18	包含層第2層	——	瀬戸系磁器	蕪麦猪口	体部～底部	25%	江戸時代、反転復元
319	図59	29	259	4	第2次 4区 H10-r25	包含層第2層	——	肥前系磁器か	鉢	体部～底部	10%	底部底面の釉は削り取り、内面に胎土目痕有り、江戸時代、反転復元
320	図59	29	265	68	第2次 4区 H10-x15	包含層第2層	——	土製品	紡錘車	——	90%	全体に磨滅著しい、直径4.2cm・厚み2.8cm・重量(55g)

和田遺跡 出土遺物一覧 石器(S)・金属(M)

No. 9

数値の()付は、残存値を示す。

遺物番号	挿図番号	写真図版	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	取上区画	遺構面堆積層位	遺構番号層位	遺物種類	器種	法量			石材	備考
										長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
84	図24	19	S 6	270	1次 I 9-h6	包含層(第4層落ち込み)	——	打製石器	石鐵	2.75	2.0	0.35 (1.34)	サヌカイト	緻密
85	図24	19	S 3	020	1次 I 9-g1	包含層(第3層)	——	打製石器	石鐵	3.5	1.55	0.1~0.45	1.85	サヌカイト 石錐の可能性有り
86	図24	19	S 1	040	1次 I 9-b11	側溝	032 落ち込みの可能性有り	石製品	双孔円盤	2.3	2.5	0.25	3.45	滑石 両面に斜位の擦痕有り
87	図24	19	S 4	109	1次 I 9-d11	包含層(第4層)	——	石製品	臼玉	0.5	0.5	0.25	0.11	滑石 孔の直径0.15cm
88	図24	19	S 8	415	1次 I 9-c10	——	205自然流路	磨製石器	小型扁平片刀石斧	3.75	2.1	1.05 (16)	緑色岩 リープ灰色を呈する	緻密、色調2.5GY7/1~5GY7/1明オーラー
89	図24	19	S 5	241	1次 I 9-e2	包含層(第4層落ち込み)	——	石製品	温石	(6.1)	(5.2)	1.6	(83)	粘板岩 4面に成形のため擦痕有り
90	図24	19	S 2	040	1次 I 9-b11	側溝	032 落ち込みの可能性有り	礫石器	敲石	9.1	4.6	3.45	220	粗粒砂岩 片面と片端に敲打痕、片器面の風化著しい
91	図24	19	S 10	487	1次 I 9-e8	——	205自然流路 遺物集中4取り上げ4	礫石器	敲石	13.6	7.9	6.7	1034	チャート質 片端に敲打痕
92	図24	19	S 7	327	1次 I 9-d11	——	205自然流路	礫石器	石皿	(16.1)	23.1	7.5 (4170)	粗粒砂岩 中央の凹み部に敲打痕有り、欠損部は比較的古い破れ	
93	図24	19	S 9	422	1次 I 9-b10	——	205自然流路 遺物集中9取り上げ9	礫石器	砥石	(8.85)	(10.05)	5.8 (858)	細粒砂岩 比較的緻密、欠損部は比較的古い破れ	
178	図37	23	S 15	618	2次 2-1区 I 9-c16	第2遺構面	2010自然流路 下層	打製石器	石鐵	2.3	1.15	0.3	0.66	サヌカイト 細密
179	図37	23	S 23	504	2次 2-1区 I 9-f15	第1遺構面	2011自然流路 上層	打製石器	石鐵	(2.45)	(1.3)	0.4 (1.02)	サヌカイト 細密	
180	図37	23	S 24	504	2次 2-1区 I 9-f15	第1遺構面	2011自然流路 上層	打製石器	石鐵	2.75	1.6	0.3	1.13	サヌカイト 細密
181	図37	23	S 16	475	2次 1区 I 9-a24~25	第2遺構面	2010自然流路 上層	打製石器	石鐵	(2.1)	(1.5)	0.4 (1.37)	サヌカイト 細密	
182	図37	23	S 18	625	2次 2-1区 I 9-d16	第2遺構面	2010自然流路 上層	打製石器	スクレイバー	7.8	4.75	0.8 (31.95)	サヌカイト 細密、全体に風化著しい、背面の一部に原面が遺る	
183	図37	23	S 26	585	2次 2-1区 I 9-e15~16	第1遺構面	2011自然流路 上層	打製石器	スクレイバー	7.8	4.4	0.65	29.49	サヌカイト 0.1cm以下の白色粒を少量含む、両面の大半に原面が遺る
184	図37	23	S 21	559	2次 1区 I 9-a11	第1遺構面	2011自然流路 上層	打製石器	スクレイバー	7.3	7.75	1.0	52.92	サヌカイト 細密、両側縁は未調整
185	図37	23	S 14	926	2次 1区 H 9-y24	第2遺構面	2010自然流路 最下層 Dトレンチ	磨製石器	石庖丁	(8.6)	5.65	0.6 (45)	緑泥片岩 刃部に刃毀れ有り、紐通し孔は両面からの穿孔	
186	図37	23	S 11	387	2次 1区 1~2区	排土中	——	磨製石器	石庖丁	(5.75)	(5.0)	0.7 (30)	緑泥片岩 両面共に剥離面を残す、紐通し孔は両面からの穿孔	
187	図37	23	S 28	777	2次 3区 I 9-i8~9	第1遺構面	2011自然流路 下層	礫石器	敲石	15.5	6.7	3.8	544	細粒砂岩 両端に強い敲打痕、両側縁に弱く浅い無数の敲打痕
188	図37	23	S 22	559	2次 1区 I 9-a11	第1遺構面	2011自然流路 上層	礫石器	敲石	13.3	7.7	5.6	913	粗粒砂岩 両面と両端に粗い敲打痕、片面は鉄分質の付着著しい
189	図37	23	S 12	154	2次 2-1区 I 9-f15	第2層	——	礫石器	敲石	10.6	5.6	3.8	380	輝綠岩 一部磨製状態、使用時に上半部は既に欠損していたと判断できる
190	図37	23	S 19	591	2次 2-1区 I 9-c14	第1遺構面	2011自然流路 Gトレンチ	礫石器	敲石	9.8	3.4	3.15	177	緑泥片岩 両端に浅い敲打痕
191	図37	23	S 13	896	2次 2-1区 I 9-d18	第1遺構面	2001土器溜まり 取り上げ2	礫石器	敲石	12.9	5.9	3.4	405	細粒砂岩 両端に敲打痕、両側縁に深い擦痕有り
192	図38	23	S 17	521	2次 1区 I 9-a22	第2遺構面	2010自然流路 上層	礫石器	敲石 凹石	11.7	12.4	8.85	2050	粗粒砂岩 両面に敲打による凹み、側縁の全周に敲打痕
193	図38	—	S 27	697	2次 3区 I 9-h13	第1遺構面	2011自然流路 上層	礫石器	凹石	(12.25)	11.45	5.7 (1255)	緑泥片岩 部分的に器面の剥離有り	
194	図38	23	S 20	503	2次 1区 H 9-y13	第1遺構面	2011自然流路 上層	石製品	紡錘車	5.0	5.1	1.4	48.7	滑石 緩めに斜め面に縦位の筋文様が均等に施される、但し表面に鉄分質の付着のため不鮮明
195	図38	23	S 25	505	2次 2-1区 I 9-d15	第1遺構面	2011自然流路 上層	石製品	有孔円盤	5.2	4.7	0.55 (26.48)	滑石 比較的緻密、紐通し孔は両面からの穿孔	
287	図54	28	S 29	812	2次 3区 I 10-e8	——	3014土坑	打製石器	調整石器か	10.25	6.7	3.3	190	サヌカイト 緩め、粗割りの剥片を利用した調整石器か、刀部は敲打による潰れが認められる
288	図54	28	S 33	924	2次 3区 I 10-d1	——	3169土坑	打製石器	石劍	(2.7)	(2.6)	0.6 (4.69)	サヌカイト 緩密、基部の一部に原面が遺る	
289	図54	28	S 30	934	2次 3区 H 10-y9~10	——	3115井戸 井側内	礫石器	凹石 敗石	17.3	15.3	7.65	3450	緑泥片岩 片面に凹み、片側縁に敲打痕
290	図54	28	S 31	868	2次 3区 I 9-d24	——	3162土坑	礫石器	磨石 敗石	8.35	4.25	2.35	145	緑泥片岩 両端に磨痕、片面に敲打痕、敲打により両側縁が欠損する
291	図54	28	S 32	924	2次 3区 I 10-d1	——	3169土坑	礫石器	磨石 敗石	13.8	5.8	4.9	710	緑泥片岩 両端に磨痕、片面に敲打痕、敲打により両側縁が欠損する
292	図54	28	M 2	795	2次 3区 I 10-e11	——	3091土坑	——	小型鉄斧	5.6	4.3	2.1 (73)	—— 鋳造が極めて著しい、正確な鉄部が不明確	
321	図59	29	S 37	305	2次 4区 I 10-a16	——	4040土坑 (土器溜まり)	打製石器	石鐵	2.0	1.8	0.25	1.02	サヌカイト 緩密
322	図59	29	S 38	299	2次 4区 H 10-y16	——	4061土坑	打製石器	石鐵	2.1 (1.4)	0.3 (0.81)	サヌカイト 緩密		
323	図59	29	S 35	198	2次 4区 H 10-t·u21	——	4010溝	磨製石器	石庖丁	(6.45)	(4.2)	0.8 (31.25)	緑泥片岩 全体に光沢痕有り、紐通し孔は両面からの穿孔	
324	図59	29	S 34	7	2次 4区 H 10-v25	包含層 第2層	——	磨製石器	石庖丁	(6.6)	(4.5)	0.8 (33.88)	緑泥片岩 全体に磨滅著しい、紐通し孔は両面からの穿孔	
325	図59	29	S 36	409	2次 4区 I 10-a16	——	4040土坑 (土器溜まり)	石製品	管玉	4.7	0.9	1.0	8.60	碧玉 全体にくすんだ色調を呈する、2.5Y4/2暗灰黄色~5Y4/2灰オーラー、孔は両端からの穿孔

写真図版 1 第1次調査 第2遺構面 調査地全景・調査遺構



1 調査地全景（北東上空から）



2 調査地全景（真上上空から：右側が北）



3 調査遺構全景（北北西から）



1 018 井戸完掘状況・木杭検出状況（南東から）



2 018 井戸断面土層・遺物出土状況（南から）



3 018 井戸遺物出土状況（南西から）



4 018 井戸 木杭検出状況（東から）



5 037 小穴土器出土状況（南から）



6 037 小穴断面土層（北から）



7 209 土坑断面土層（南から）



1 205 自然流路 遺物集中4出土状況（南から）



2 205 自然流路 遺物集中4出土状況（南から）



3 205 自然流路 遺物集中9出土状況（北から）



4 205 自然流路 遺物集中13出土状況（北西から）



5 205 自然流路 B-B'断面土層（南東から）



1 調査地全景（南南西上空から）



2 調査地全景（真上上空から：左側が北）



3 調査遺構全景（南西から）

写真図版 5 第1次調査 第1遺構面 調査遺構



1 206 土坑完掘状況（北東から）



2 206 土坑断面土層（北から）



3 012 土坑断面土層（北東から）



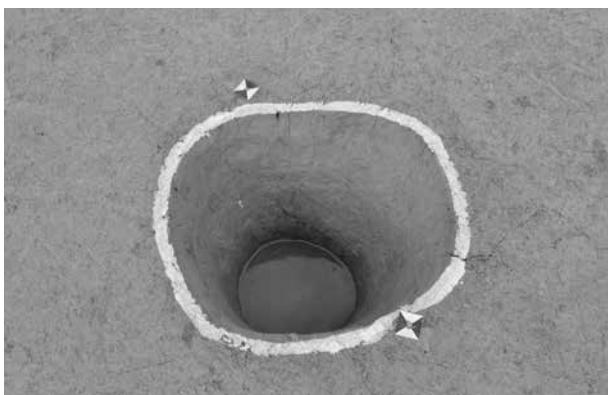
4 011 井戸完掘状況（南から）



5 011 井戸上層遺物出土状況（西から）



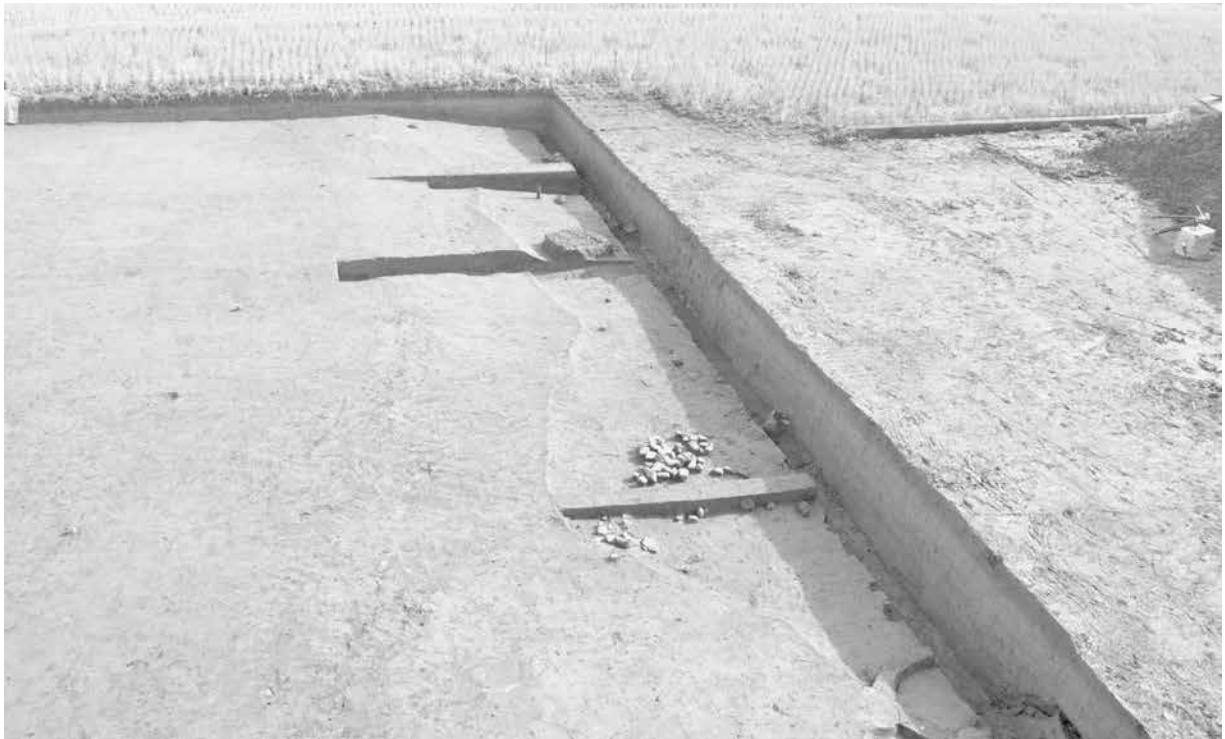
6 011 井戸断面土層（南東から）



7 005 井戸完掘状況（南から）



8 005 井戸下層遺物出土状況（南西から）



1 032 落ち込み遺物出土状況（西から）



2 032 落ち込み礫出土状況（南西から）



3 004 井戸断面土層（北西から）



4 001 井戸木枠出土状況（北から）



5 001 井戸遺物出土状況（北から）



6 001 井戸板石出土状況（北から）



7 001 井戸断面土層（北から）



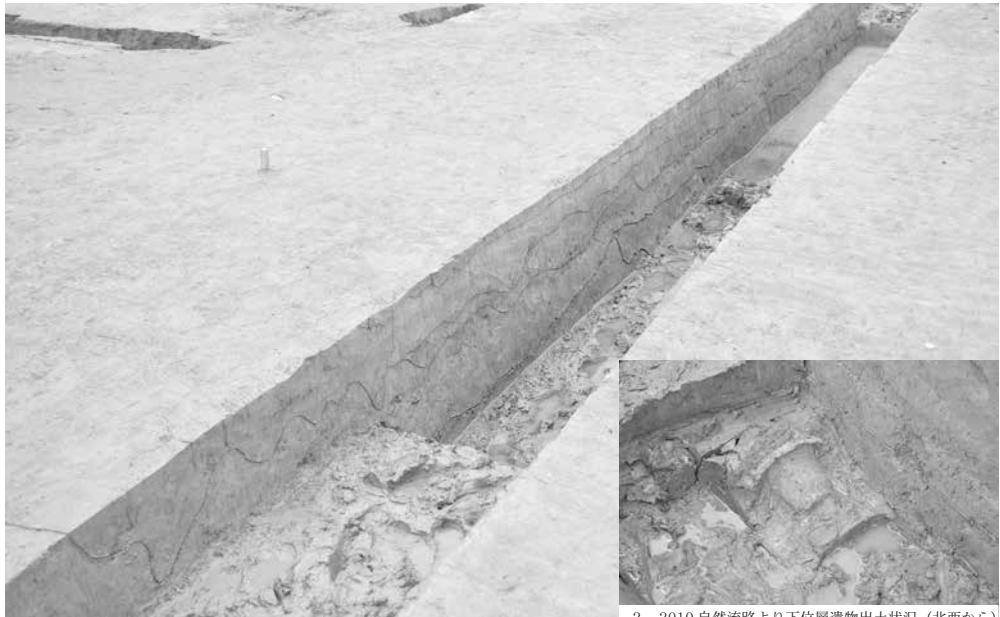
1 調査地全景（東上空から）
(左側奥は3区)



2 調査地全景（北上空から）
(右側は3区)



3 調査遺構全景（北から）
(右側奥は3区)



1 2010 自然流路 下層確認E トレンチ断面土層（北東から）



2 2010 自然流路より下位層遺物出土状況（北西から）



3 2010 自然流路 下層確認F トレンチ断面土層（西から）



4 2010 自然流路上層 2001 土器溜まり（南から）



1 調査地全景（真上上空から：右側が北）
(2010・2011 自然流路検出状況)



2 調査遺構全景（北から）
(2010・2011 自然流路検出状況)



3 2011 自然流路 下層確認Gトレーニング断面土層（南東から）

写真図版 10 第2次調査1・2区 第1遺構面 調査遺構



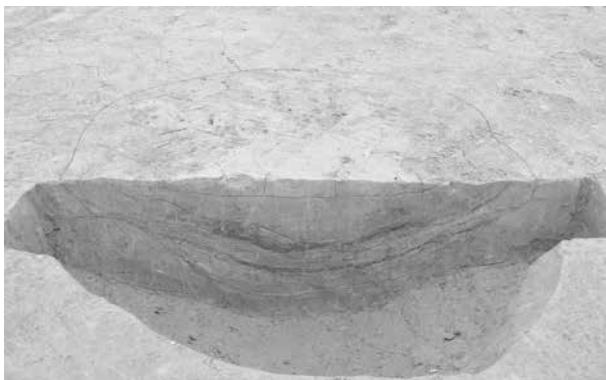
1 2005 土坑完掘状況（南から）



2 2005 土坑断面土層（南から）



3 2003 土坑完掘状況（南から）



4 2003 土坑断面土層（南から）



5 2021 溝状遺構・土坑列（東から）



6 2021 溝状遺構・土坑列断面土層（西南西から）（調査区 2-2 区 北壁）

写真図版 11 第2次調査3区 調査地全景・調査遺構



1 調査地全景（西上空から）
(左側奥は1・2区 第2遺構面)



2 調査地全景（南上空から）
(右側は1・2区 第2遺構面)



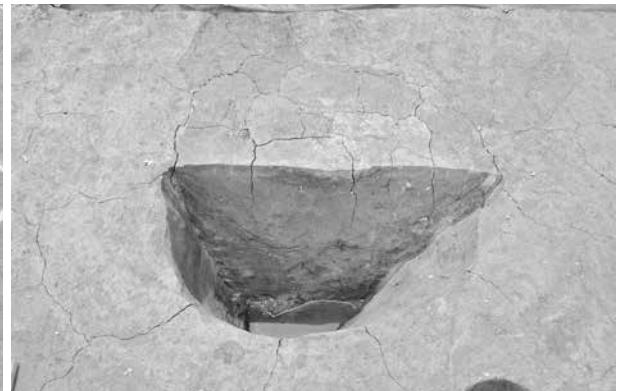
3 調査遺構全景（南から）
(右側奥は1・2区 第2遺構面)



1 3019・3099 土坑掘削状況（南東から）



2 3032 井戸掘削状況（南南東から）



3 3032 井戸上位層断面土層（東から）



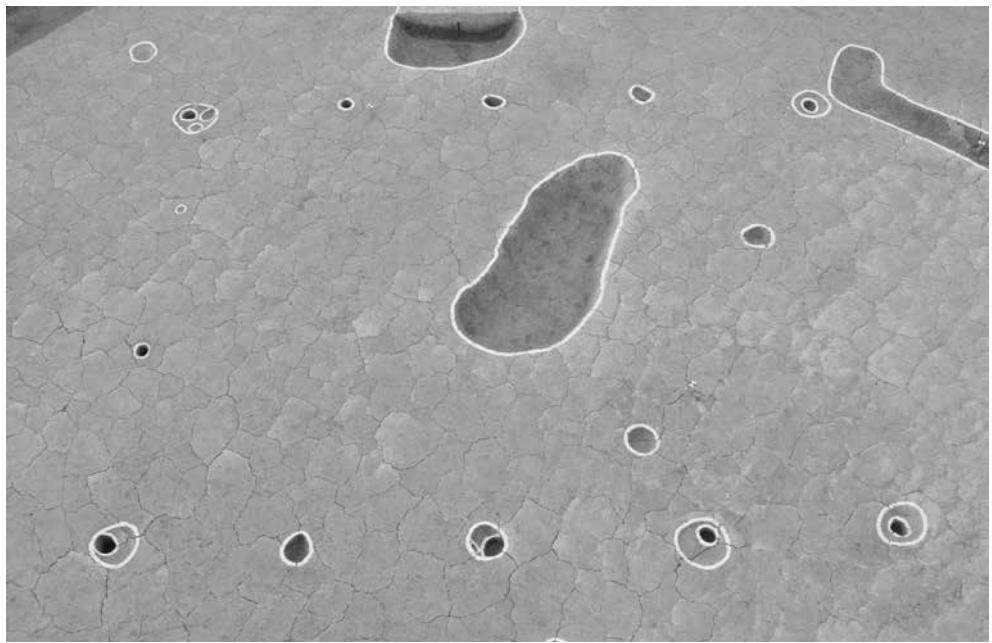
4 3032 井戸下位層断面土層（東から）



5 3031 井戸断面土層（北から）



6 掘立柱建物 1 掘削状況（南東から）



1 挖立柱建物 2 完掘状況 (南東から)



2 3027 土坑遺物出土状況 (北北西から)



3 3027 土坑遺物出土状況 (北東から)



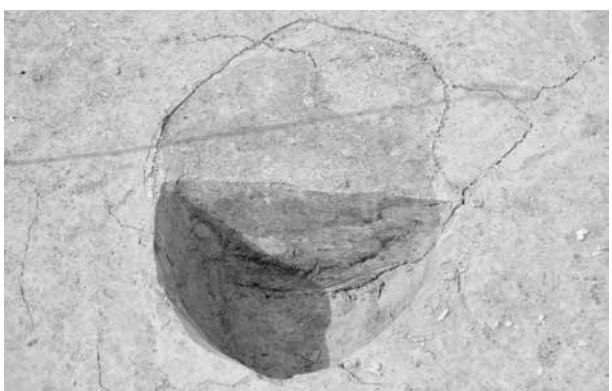
4 3062 土坑遺物出土状況 (南東から)



5 3062 土坑遺物出土状況 (南から)



6 3039 土坑断面土層 (北西から)



7 3108 土坑断面土層 (南から)



1 3115 井戸とその周辺（南西から）



2 3115 井戸掘削状況（西から）



3 3115 井戸断面土層（西から）



1 調査地全景（南上空から）
(奥は1・2区 第1遺構面)



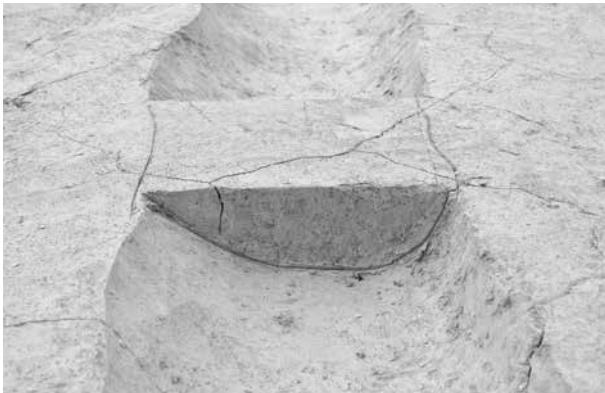
2 調査地全景（真上空から：右側が北）



3 杭列・溝群（南東から）



1 4040 土坑遺物出土状況（南南西から）



2 4003 溝断面土層（南東から）



3 4004・4009 溝断面土層（南東から）



4 4007 溝断面土層（南から）



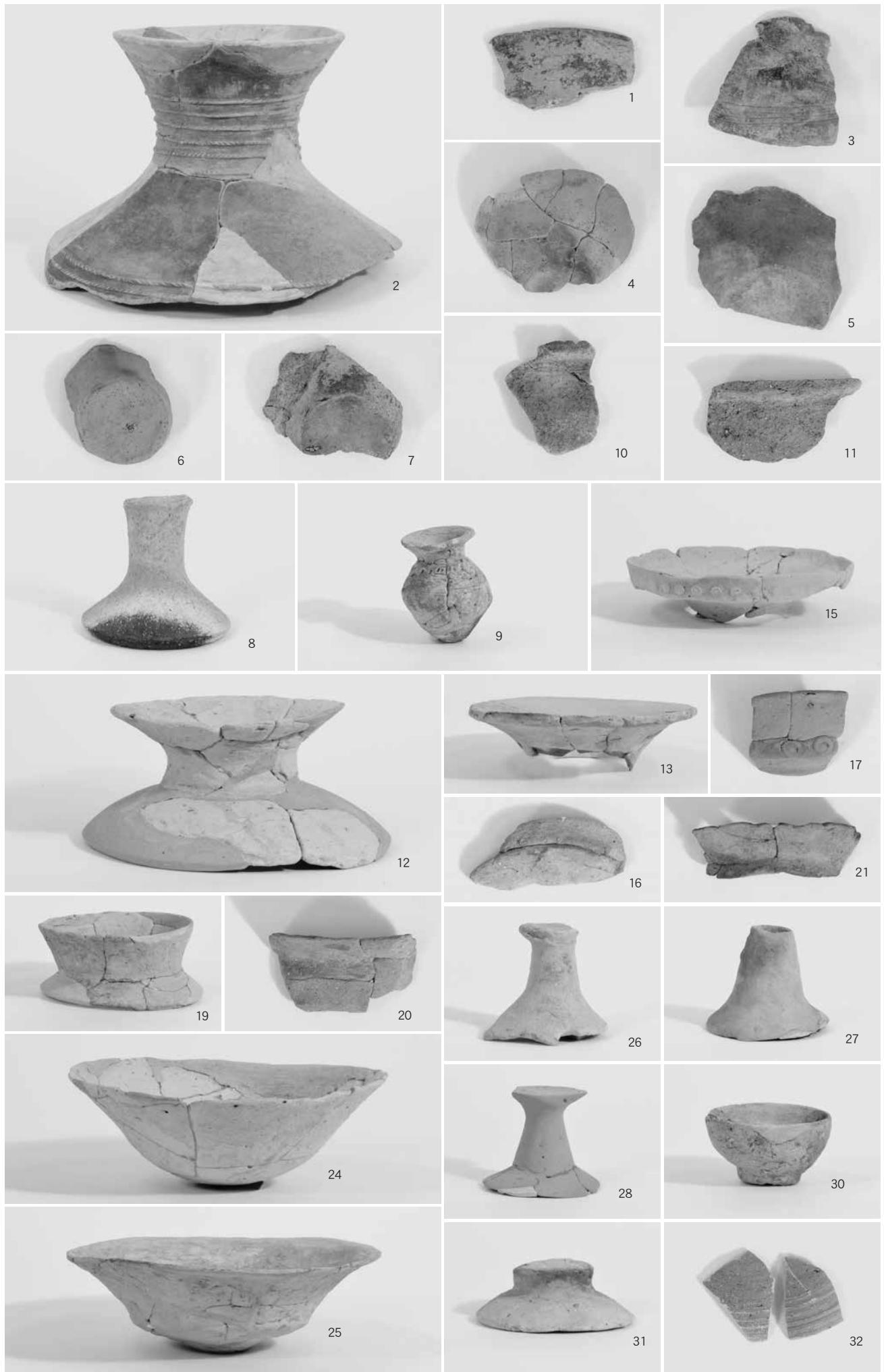
5 4012 溝断面土層（西から）



6 4017 溝断面土層（南東から）



7 4042 溝状遺構断面土層（南東から）



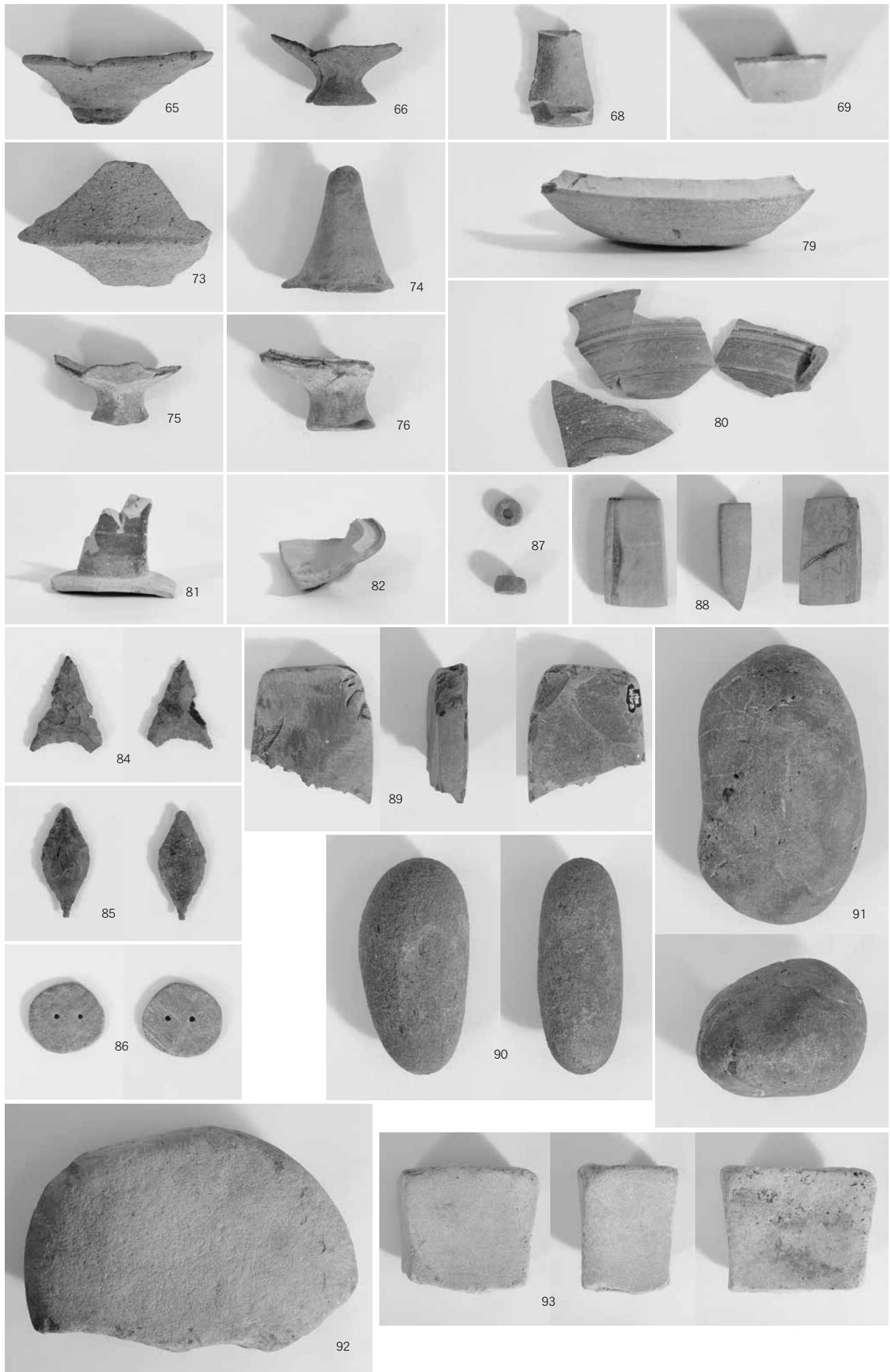
1~7: 018 井戸、8: 037 小穴、9: 209 土坑、10~13・15~17・19~21・24~28・30~32: 205 自然流路

図 21・22 に対応



33~38: 遺物包含層第4層、40~43: 011 井戸、44・45: 005 井戸、46: 004 井戸、
47・49・52・54・56・57: 032 落ち込み、60・62・64: 001 井戸

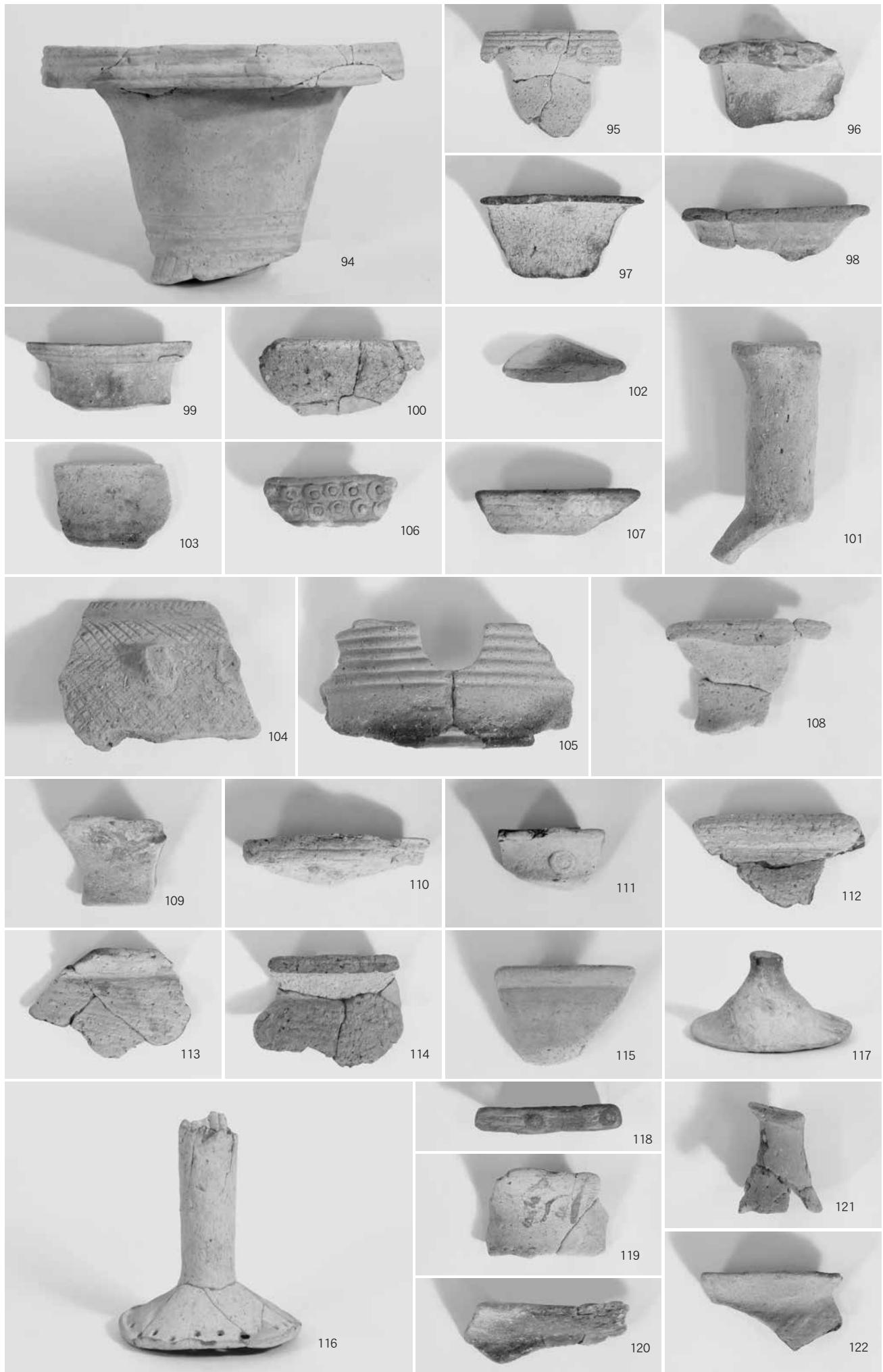
図 22・23 に対応



65・66・68・69・86・90：調査区側溝、73～76・79～82・85：遺物包含層第3層、
84・87・89：遺物包含層第4層、88・91～93：205自然流路

図23・24に対応

写真図版 20 第2次調査1・2区 出土遺物1



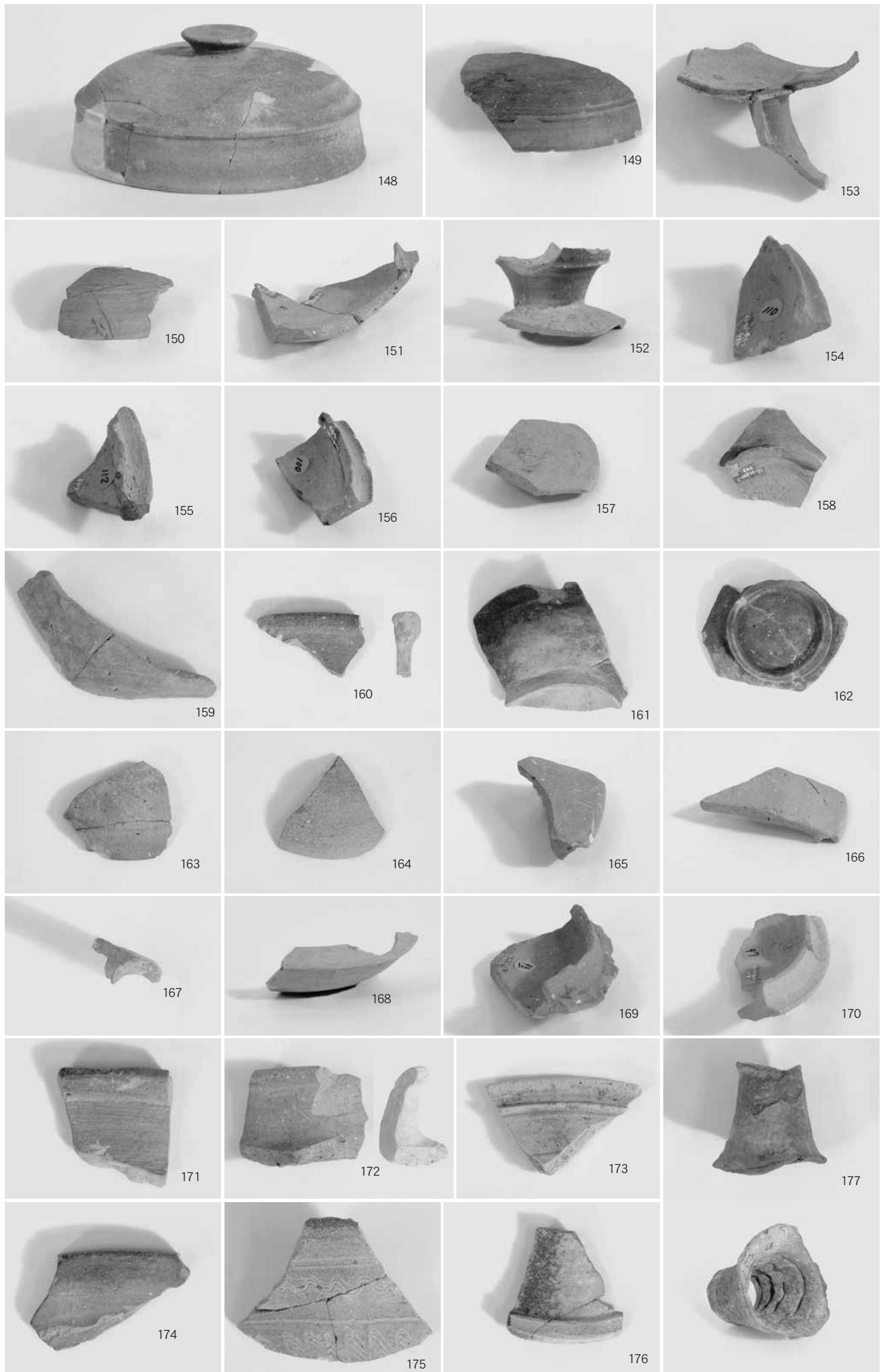
94: 2010自然流路より下位層、95~105: 2010自然流路下層、106: 2010自然流路中層、
107~117: 2010自然流路上層・層位無し、118~121: 2001土器溜まり、122: 2005土坑

図34・35に対応



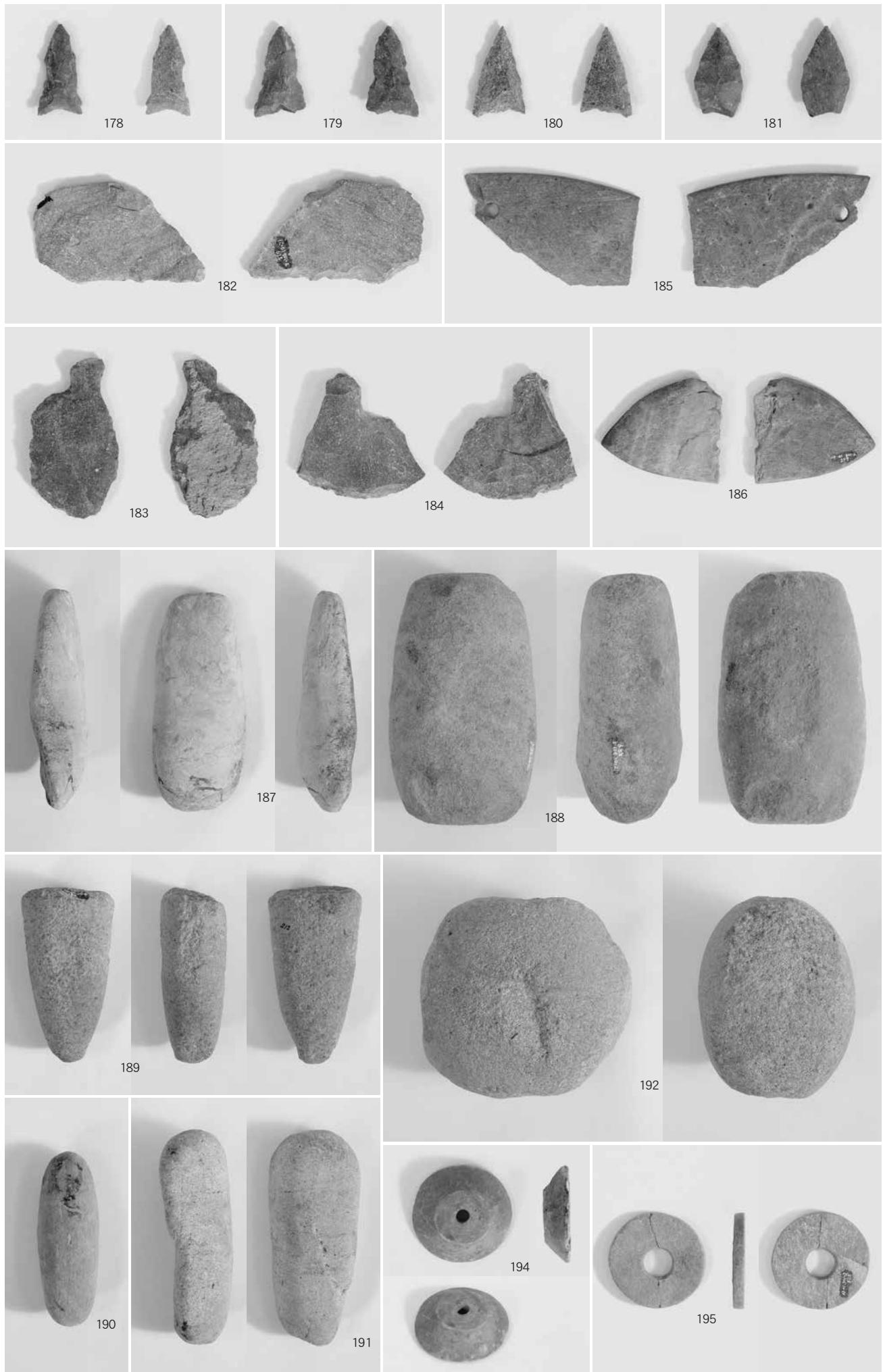
123～132：2011 自然流路下層、136・137・140～147：2011 自然流路上層・層位無し

図35に対応



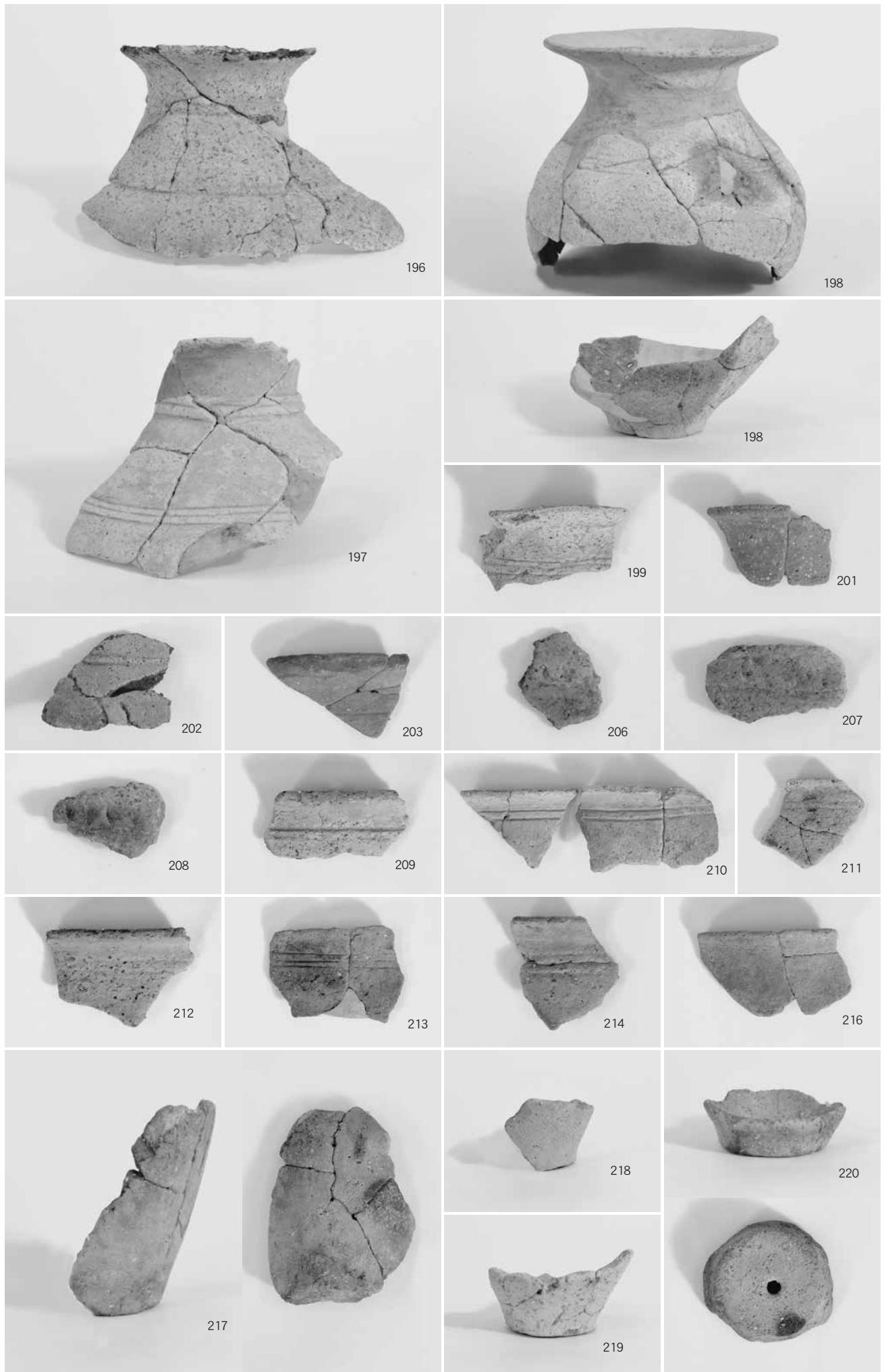
148~153: 2011 自然流路上層、154・157・159~162: 2021 溝状遺構、155: 2048 土坑、
156・158: 2019 土坑、163~177: 遺物包含層第2層

図36に対応



178: 2010 自然流路下層、179・180・183・184・188・190・194・195: 2011 自然流路上層・層位無し、
181・182・192: 2010 自然流路上層・層位無し、185: 2010 自然流路最下層、186: 排土、187: 2011 自然流路下層、189: 遺物包含層第2層、191: 2001 土器溜まり

図37・38に対応



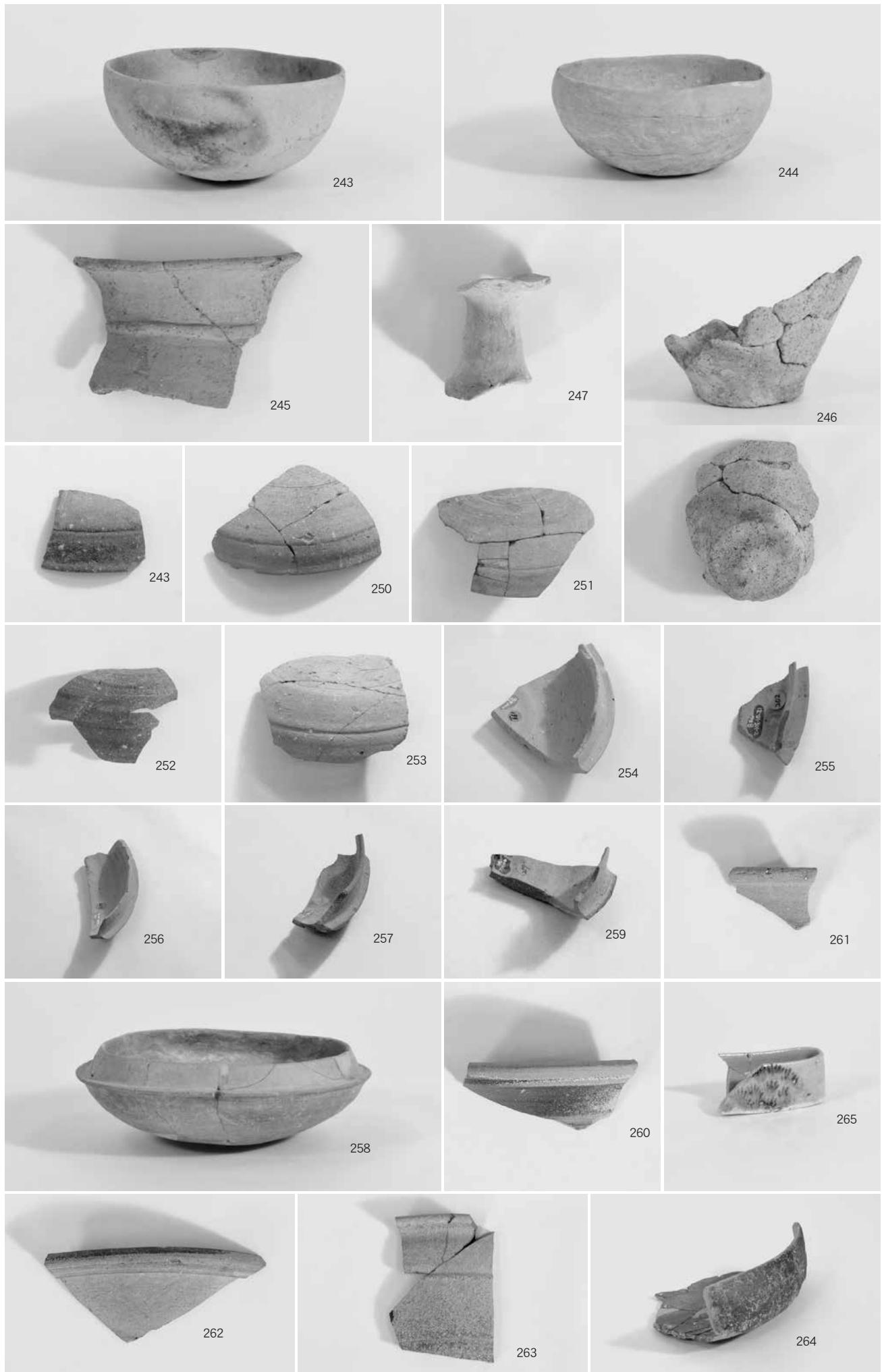
196~199・201~203・206~214・216~220: 3019 土坑

図 50 に対応



221:3135 土坑、222:3099 土坑、223:3104 土坑、224~228・230:3032 井戸、231・232:3031 井戸、
233~242:3027 土坑

図 51 に対応



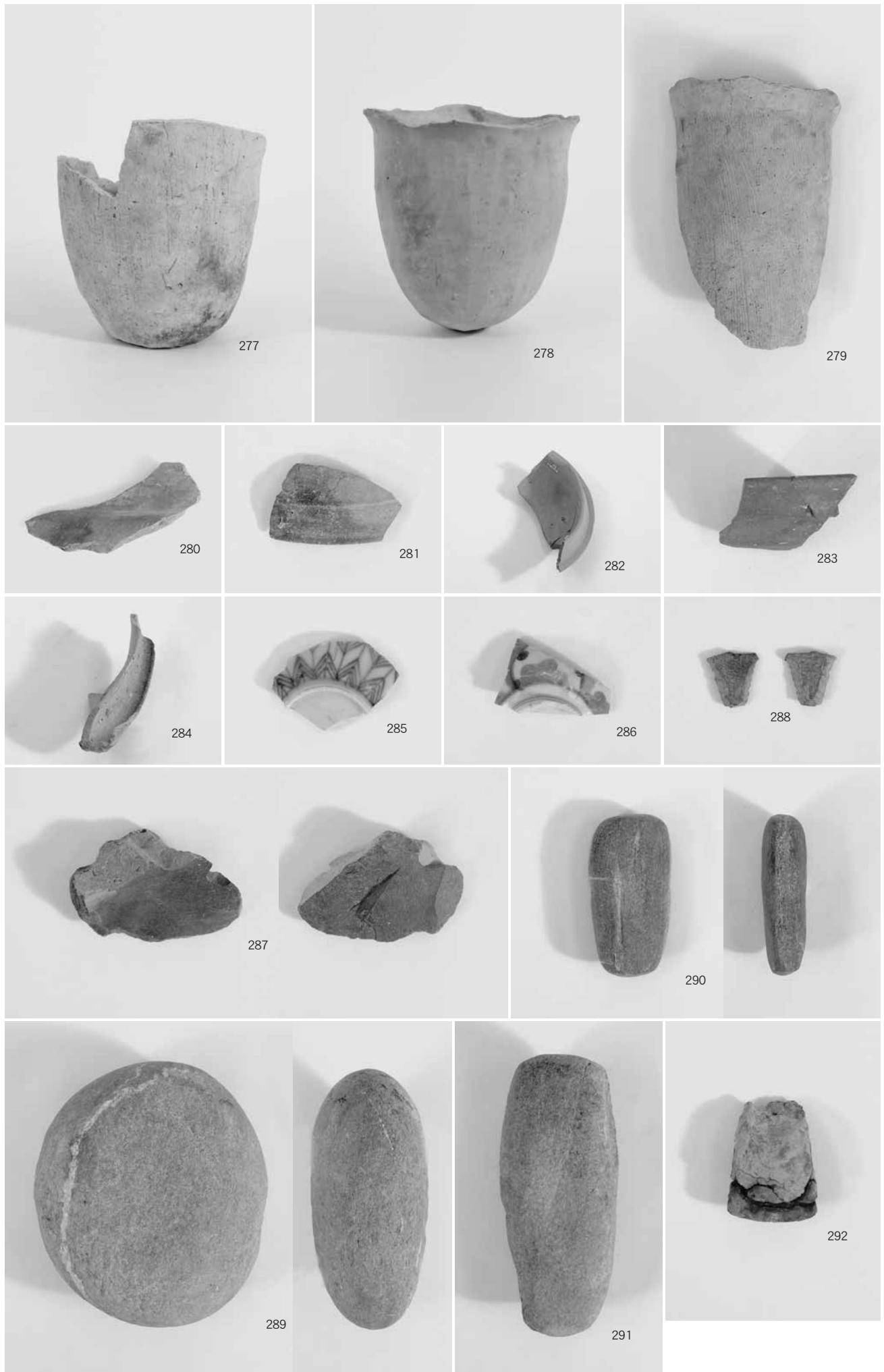
243・244：3062 土坑、245・246・248・255：3030 土坑、247・251～253・259・261：3124 土坑、
250：3122 土坑、254：3021 土坑、256：3046 土坑、257・260・262：3094 土坑、258・265：3098 土坑、
263：3162 土坑、264：3091 土坑

図 51・52 に対応



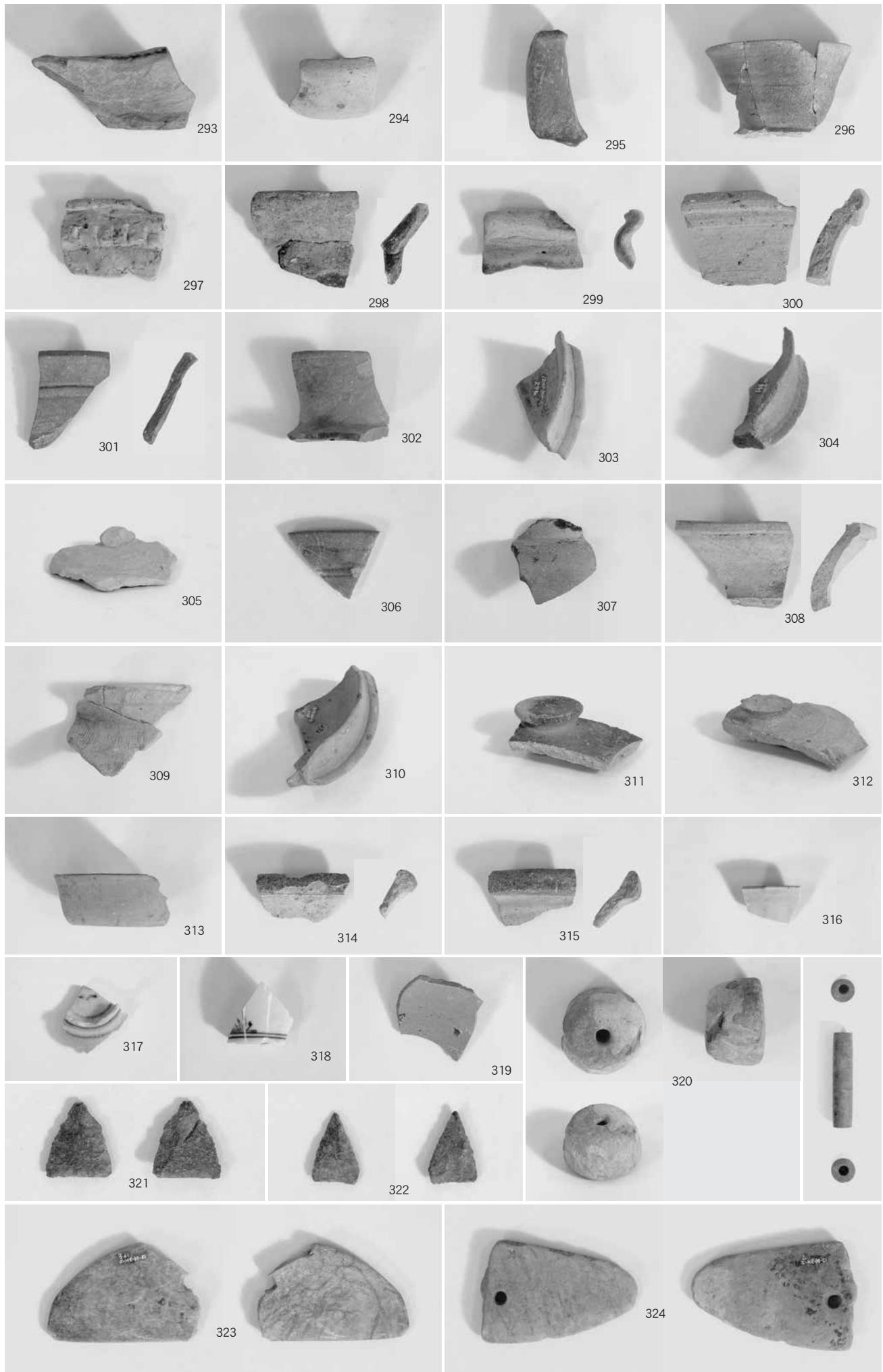
266～276：3115 井戸

図 53 に対応



277~280・289:3115 井戸、281~283:遺物包含層第3層関係、284~286:遺物包含層第2層関係、
287:3104 土坑、288・291:3169 土坑、290:3162 土坑、292:3091 土坑

図54に対応



293~295・321・325:4040 土坑(土器溜まり)、296:4017 溝、297:4015 溝、298・306:4021 溝、
299:4022 溝、300・303:4052 土坑、301:4020 溝、302・305:4018 溝、304:4064 土坑、307~
320・324:遺物包含層第2層、322:4061 土坑、323:4010 溝

図 59 に対応

報告書抄録

和田遺跡

—秋月海南線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2015年3月18日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋1263-1

印刷・製本：初田印刷株式会社
和歌山県和歌山市吹上5丁目4-40